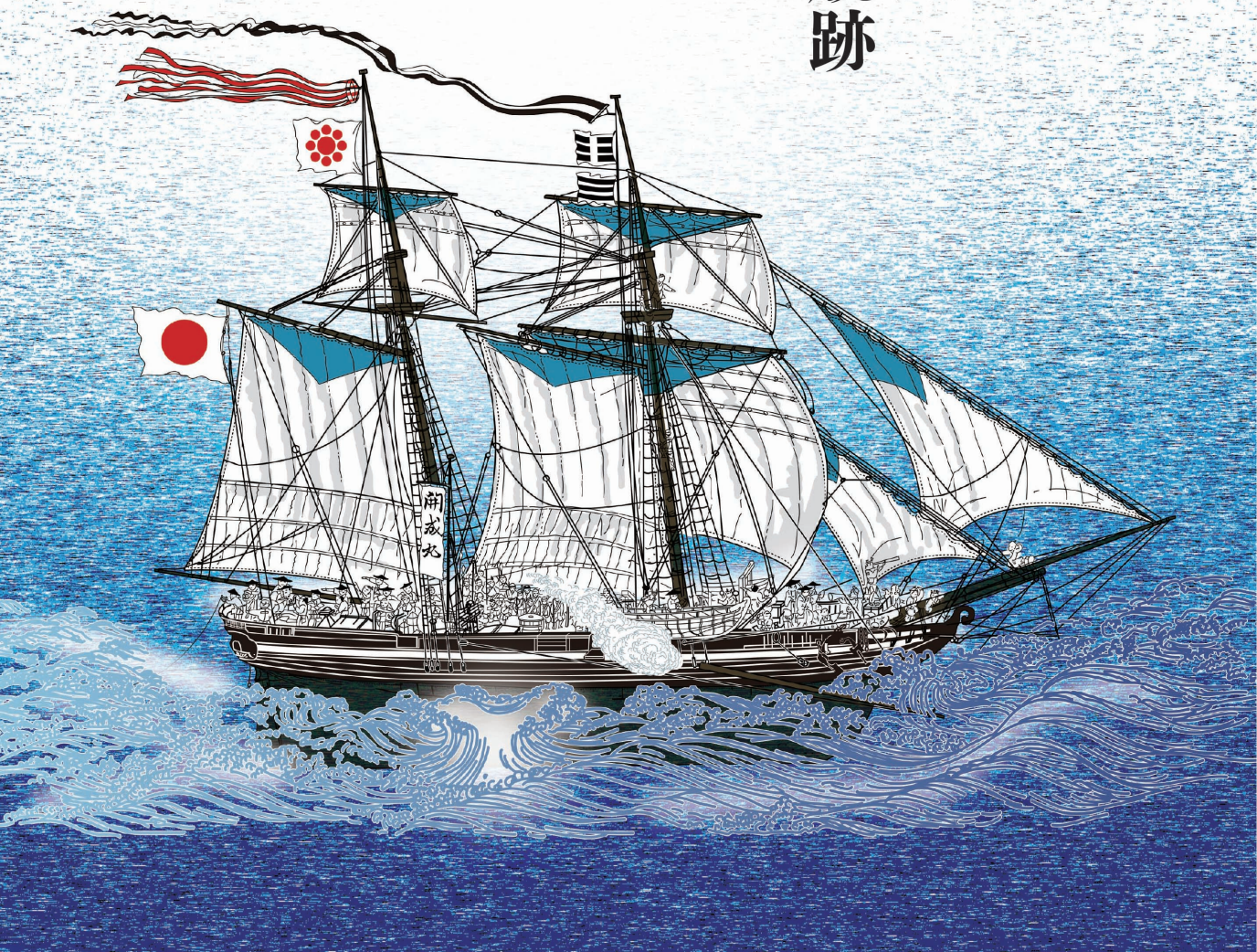
仙台藩の洋式帆船
開成丸の航跡
幕末の海防構想と実践の記録

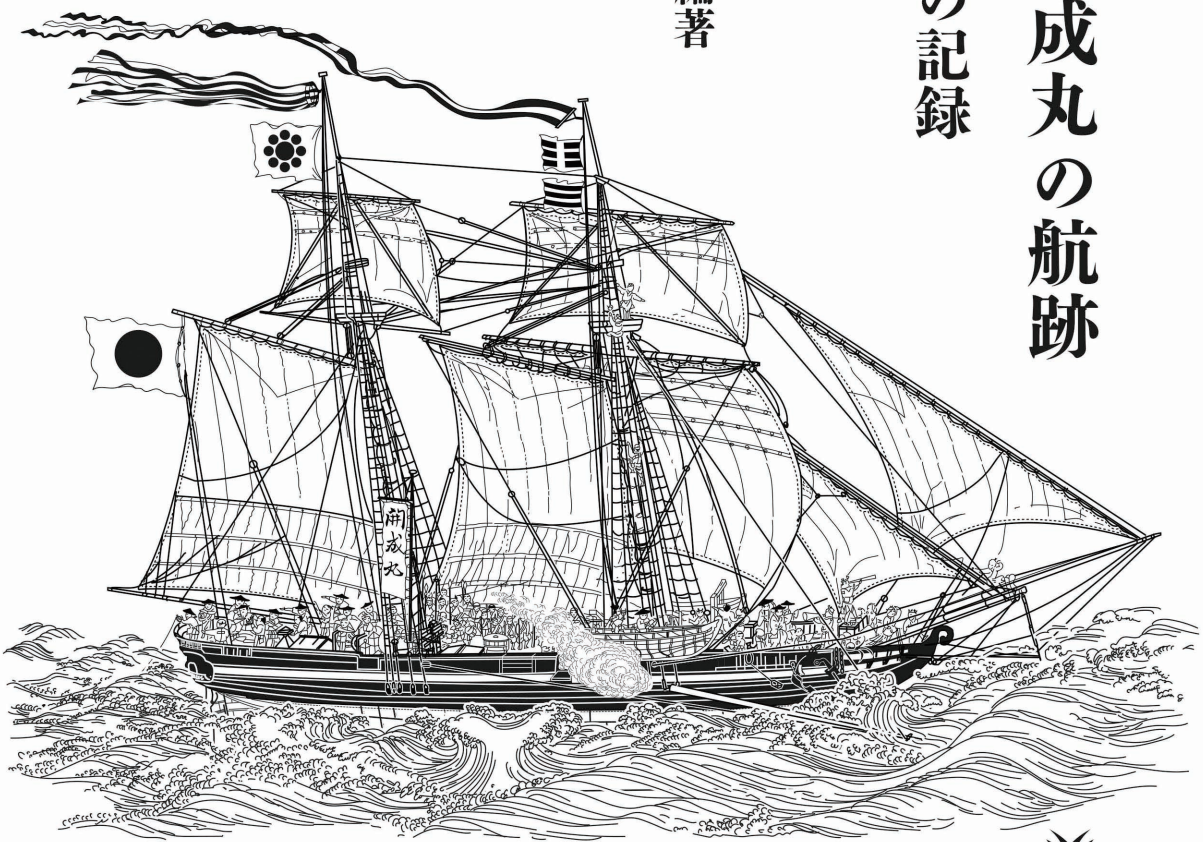
佐藤大介・黒須潔・井上拓巳 編著



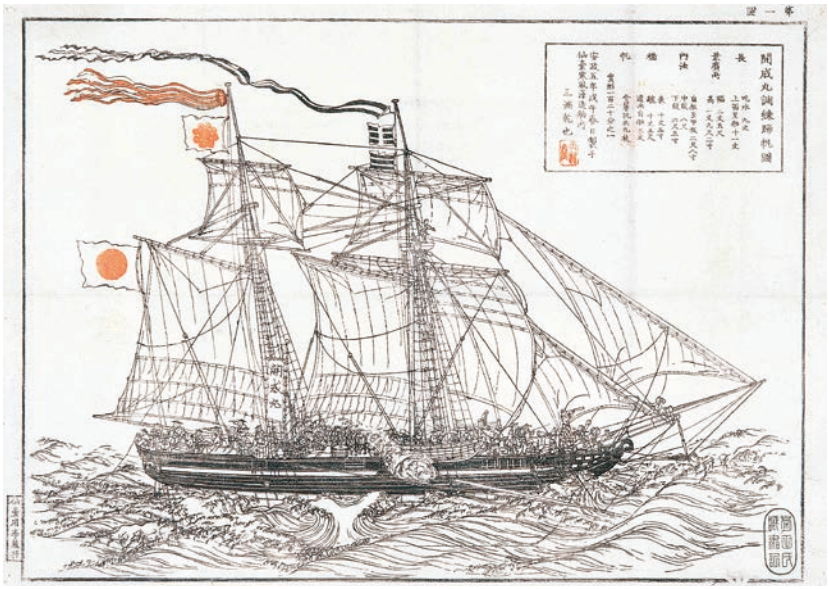
仙台藩の洋式帆船 開成丸の航跡

幕末の海防構想と実践の記録

佐藤大介・黒須潔・井上拓巳 編著



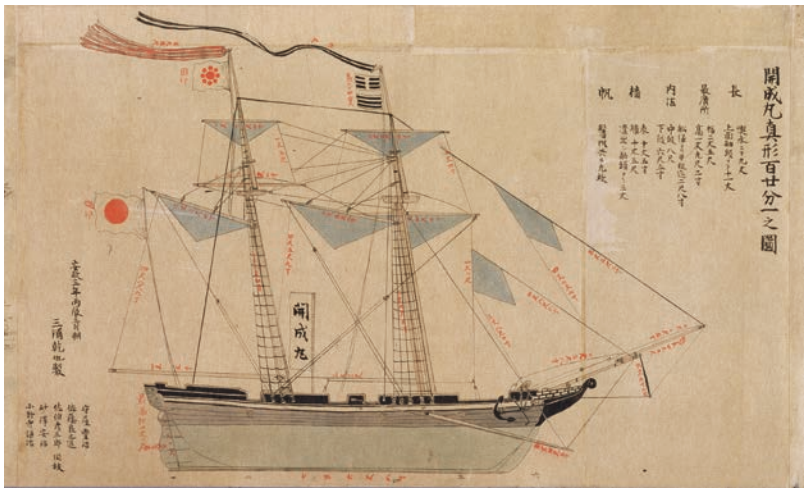
IRIDeS
International Research Institute of Disaster Science
災害科学国際研究所



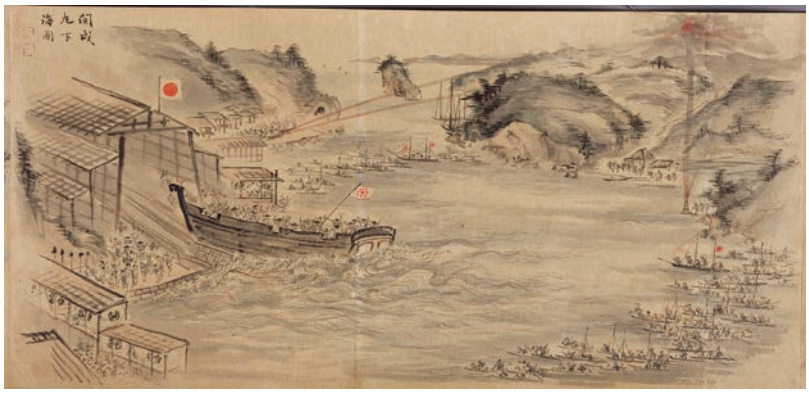
（口絵 1）　三浦乾也「開成丸調練帰帆図」 安政 5 年（1858）　仙台市博物館所蔵

（口絵 2）　寒風沢島に儲けられた造艦施設の図
（東京国立博物館所蔵「寒風澤嶼造艦碑その他」より：
Image : TNM Image Archives）

（口絵 3）　開成丸造艦碑
（宮城県塩竈市、寒風沢島／
2018 年 5 月 28 日
佐藤大介撮影）



（口絵 4）「開成丸真形百廿分之一図」
（東京国立博物館所蔵「寒風澤嶼造艦碑その他」より：Image：TNM Image Archives）
帆の上端に青い帆印が描かれている



（口絵 5）「開成丸下海図」（同前） 開成丸の進水を描く

（口絵 6）「三月初開成丸初度航海帰帆之図」（同前） 安政 4 年（1857）初航海からの帰帆を描く

刊行にあたって

佐藤大介

本書は、江戸時代末の安政三年（一八五六）から仙台藩が建造をはじめ、翌四年に運用を開始した洋式帆船・開成丸に関する論説と、開成丸に関する史料（古文書）を所収したものである。

一九世紀における欧米列強の日本への接近、さらには嘉永六年（一八五三）年のペリー来航を契機とする江戸幕府の大船建造解禁令といった海防体制の強化にともない、幕府や諸藩で洋式艦船の建艦が進められた。開成丸はその草創期の事例として、仙台藩の郷土史、さらには技術史、科学史の観点から、史料の掘り起こしと研究が進められている。

本書では一連の成果に学びつつ、論説編では幕末仙台藩の科学史、海運史および政治社会史の観点から、開成丸の建艦および運用について再検討を試みた。

また史料編では、開成丸関連の記録を改めて集成するとともに、養賢堂学頭・大槻習斎の造艦関係記録、志村恒憲の日記、万延元年（一八六〇）冬から翌年春にかけての江戸方面への航海記録「ふなわたり日記」、仙台城下町商人小西家の記録と

いった、これまで未活字化の史料を翻刻して掲載している。これらを通じて、一次史料に基づく研究が進展することが期待される。

開成丸は、仙台藩の学者たちが学んだ西洋技術に基づいて建艦された。一方で造船した船大工、乗り組んだ水主たち、仙台藩領の沿岸や江戸までの航海を支えたしくみは、江戸時代を通じて、海辺の人々が築き上げた文化に支えられていた。江戸時代の仙台藩における、海をめぐる歴史の、一つの結晶だともいえる。

今回、改めて開成丸の軌跡をまとめて公刊することで、海と関わった人々や地域の歴史・文化を再生し、後世に伝えていく手がかりになればと考えている。本書が多くの方の目に触れ、様々な形で活用されれば幸いである。

二〇二二年三月一一日

目次

刊行にあたって　佐藤大介　ii

論説編

幕末の仙台藩洋式帆船・開成丸について……黒須　潔　3
「ふなわたり日記」に見える開成丸の下田・浦賀・奥津滞在中の動向……井上　拓巳　17
幕末仙台藩政治社会史のなかの開成丸―「海洋国家」の夢への航跡……佐藤　大介　32

史料編

一　養賢堂学頭・大槻習斎の海防構想　61

1　大槻習斎意見書下書（造艦の推進につき）……嘉永七年（一八五四）カ　61
2　軍艦調書（下書）……年不詳　62

二　小型洋式船の建造　65

3　大槻習斎より達（バッテーラ船の帆印）……嘉永七年（一八五四）　65
4　大槻習斎意見書（バッテーラ船調練・旗印・船員取立の件）……嘉永七年（一八五四）　65
5　大槻習斎意見書（車輪船配備につき）……嘉永七年（一八五四）　67
6　片倉小十郎より下知（バッテーラ船落成につき祈祷の件）……嘉永七年（一八五四）　68
7　大槻習斎より達（造船落成につき祈祷の件）……嘉永七年（一八五四）　68

8 大槻習斎願書（造船御用達の養賢堂蘭学方登用につき）……安政二年（一八五五）カ 69
9 大槻習斎より達（調練内覧の願い）……嘉永七年（一八五四） 70
10 大槻習斎より達（調練に付き馬借用願）……安政二年（一八五五） 71
11 軍艦目印につき触書……安政二年（一八五五） 72

三 開成丸の建造 75

12 軍艦方御用係の任命……安政三年（一八五六） 75
13 軍艦製造材木調……安政三年（一八五六） 75
14 千葉碓之進書状（嵐にて寒風沢の雨舎倒れる）……安政三年（一八五七）カ 78
15 大槻習斎より上申（嵐にて寒風沢の雨舎倒れる件）……安政三年（一八五七）カ 78
16 寒風沢での建艦景況……安政四年（一八五七） 79
17 軍艦名前書上……安政四年（一八五七） 80
18 寒風沢島造艦碑……安政四年（一八五七） 80
19 三浦陶蔵へ褒賞（扶持方給付）……安政四年（一八五八） 83
20 三浦陶蔵へ褒賞（大番組へ召し出し）……安政五年（一八五八） 83
21 廻状（三浦陶蔵ら廻村に付）……安政五年（一八五八） 84
22 航海術御用など仰付……安政五年（一八五七） 84

四 開成丸の航行 86

23 書開成船図後……安政六年（一八五八） 86
24 廻状（軍艦航行につき）……安政五年（一八五七） 87

25 三浦陶蔵らより上申（航海景況報知など）……安政六年（一八五七） 88
26 書上（開成丸乗組員）……安政六年（一八五七） 89
27 大槻習斎意見書下書（開成丸に大砲搭載の件）……安政六年（一八五七） 89
28 開成丸乗船報告……安政六年（一八五九） 90

五 開成丸との日々 92

29 開成丸航海日誌……安政六年（一八五九）頃 92
30 志村恒憲日記……安政六年（一八五九） 116
31 ふなわたり日記……万延二年（一八六一）頃 154

六 開成丸での商品輸送 196

32 開成丸御直行方より拝借証文……文久元年（一八六一） 196
33 名前書上（直行方役人）……文久元年（一八六一） 197
34 小西久兵衛書状（下書）……文久元年（一八六一） 197
35 小西利八書状……文久元年（一八六一） 199
36 小西利八書状……文久元年（一八六一） 200
37 覚（商品運賃受取）……文久元年（一八六一） 202
38 覚（商品仕入につき）……文久元年（一八六一）カ 203
39 覚（商品運賃受取）……文久元年（一八六一）カ 204
40 覚（砂糖代金の決済）……文久元年（一八六一）カ 205

七　開成丸関係者のその後　207
41　蒸気船へ乗込仰せ付け……慶応四年（一八六八）　207
編集を終えて　佐藤　大介　209

論説編

幕末の仙台藩洋式帆船・開成丸について

黒須　潔

はじめに

仙台藩は、幕末に開成丸という西洋式の帆船を建造した。開成丸の全長は一一丈、約三三メートル。バウスプリットと呼ばれる前方に突き出した帆柱を加えると、全長は優に四〇メートルを超える。フォア、メインの二本のマストに縦帆を張ったスクーナー型の船であり、それぞれのマストの上部（トップ）に横帆（セイル、スル）を張ることができるので、ツートップスルスクーナーに分類される。仙台藩の船であることを示すための幟は赤九曜紋で、青龍の鱗をイメージした青い三角形を帆印としていた［史料4、11］。

江戸初期に造られたサン・ファン・バウティスタ号（全長約五五メートル）に比べ、二回りほど小さい船である。

一　プロジェクトのはじまり

嘉永六年（一八五三）六月にペリーが来航した後、幕府は九月に大船建造の禁を解き、翌七年五月には浦賀奉行所が鳳凰丸を建造した。一方、ロシアはプチャーチンを日本に派遣して通商を求めた。プチャーチンとの交渉は嘉永七年（一八五四）一一月三日から伊豆下田で始まったが、翌日に安政東海地震が発生し、プチャーチンらが乗ってきたディアナ号が津波で大破、後に沈没してしまった。幕府はロシア側から技術供与を受け、船を建造してロシア側に提供することになった。この船は安政二年（一八五五）三月一〇日に完成し、建造地である戸田村の名を取りヘダ号と命名され、プチャーチンらを乗せ二二日に出航している。この後、幕府は戸田号の同型艦[1]を、安政二年一二月までに六隻完成させてい

る。仙台藩は安政二年の冬に小野寺鳳谷（一八一〇～六六）と二名の船大工を豆州相州に派遣し、西洋船の建設を視察させたとあるが、彼らが見たのはこの同型艦の建造である。この様子については、たまたま視察に同行した仙台藩の岡千仞が語った「在臆話記」[2]に詳しい。その後、鳳谷らは浦賀で鳳凰丸、横浜でぎ装中だった水戸藩の旭日丸と最先端の洋式帆船を見学、江戸では三浦乾也（一八二一～八九）にも会っている［史料23］。三浦乾也は、仙台藩の西洋船建造の総棟梁となる人物であるが、陶工としても有名な人物である。嘉永七年八月から数か月間、長崎でオランダ人のヘルハルドゥス・ファビウス（一八〇六～八八）やヤン・カレル・ファン・デン・ブルーク（一八一四～六五）に、蒸気船建造に必要な技術を学んでいる。三浦乾也が学んだ技術の一部は、「佐伯彦三郎造船関係蔵書」[3]や「航海類書」[4]にみられるが、造船術、航海術以外にも高炉、反射炉などの製鉄から、鍛造、圧延、万力、旋盤、ねじ切りなどの金属加工などの周辺技術までが記されている（写真1）。開成丸には船速を図るための量程車と砂時計をはじめ、羅針、深浅儀等の測量機器、遠眼鏡、験温器が積まれていたほか、三浦乾也がヲキタ

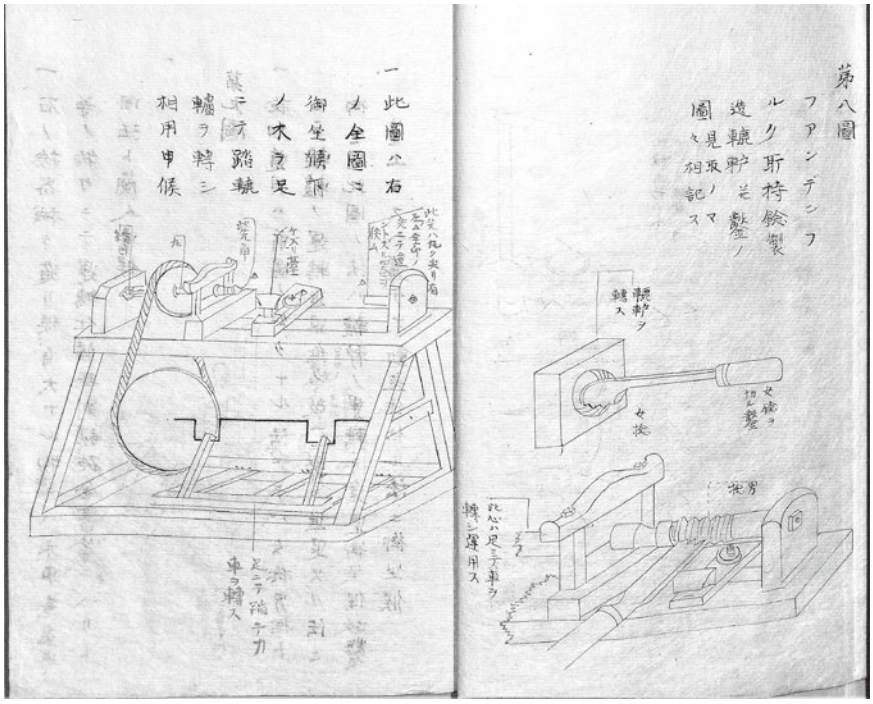


写真１「帆前機器并蒸気船器械製造之具」
『佐伯彦三郎造船関係蔵書』

ント、セキスタント、写真鏡を作ったことも記録に残っている。[5]

二　西洋船の建造

さて、小野寺鳳谷の訪問を受けた三浦乾也は、安政三年（一八五六）正月には塩釜に移り住んでおり、ペリーが来航してからわずか二年半で、仙台藩は本格的な西洋船の建造に着手することになった。仙台藩は、開成丸を建造する前に二隻の西洋船を建造していた。［史料3、6］によれば、嘉永七年七月には塩釜において西洋船の建造が始まっており、九月下旬頃に船が完成したことがわかる。更に、［史料10］には、安政二年四月七日に閑上で行われる日新丸と天開丸の調練を藩主が見学する予定であると記されている。この翌日、四月八日の「治家記録」[6]には、奉行芝多周防、出入司熊谷文之允、笠原一学、養賢堂学頭大槻格次習斎（一八一一～六五）を大銃及び軍艦製造用係に命じたことが記されている。また、四月二五日にはアメリカ船が石巻に現れ大騒ぎになった。このためか、訓練中の日新丸・天開丸を異国船と見間違えることもしばしばあって、しばらくの間、領内の沿岸部は騒がしい状態が続いたようである。[7]海防はもちろん、領内の輸送あるいは海外との交易も視野に入れた上層部の思惑が［史料1］から読み取ることができる。この点に関しては、本書の佐藤論文で詳細が述べられているのでそちらに譲りたい。

開成丸は、仙台藩の藩校である養賢堂が主体となって造られた。学頭の大槻習斎を筆頭に、養賢堂指南役であった小野寺鳳谷が直接作業を担当することになった。養賢堂の学田から得られる資金で建造費用を賄い、人材面でも多くの人材を充てている。三浦乾也を登用することも、大槻習斎と江戸昌平黌の同期であった姫路藩の儒者・菅野白華（一八二〇～七〇）の推挙によるものとある。

安政三年（一八五六）正月頃、守屋豊治、佐藤良之進、佐伯彦三郎（一八二八～九六）、砂沢安治（一八三五～九九）の四人の和算家が三浦乾也の部下となった［史料23］。少なくとも守屋以外の三人は、養賢堂の算術教員である早井次賀（一七八五頃～一八五四）を師としていることが「仙台人名大辞書」などから分っている。[8]正月二八日に造艦の命が出さ

れ、三浦乾也が総棟梁、作事奉行格に任じられた。三月朔日には、開成丸の基本的な設計図ともいえる一二〇分の一の外観図が完成している[9]。この図面には三浦乾也と四人の和算家に加え、小野寺鳳谷の名前が記されている。同じ頃、寒風沢島では造船場が整備されていた。「開成丸下海図」[10]、「蒸気船打建手続順図」（写真2）や［史料16］によれば、造艦の土台となる斜度十五度のスロープと、それをすっぽり覆う巨大な小屋が作られた。小屋の幅と高さは二〇メートル、奥行きは四〇メートルを超える大きさが必要であり、建設費用だけでも一千両かかったとある。

六月一一日には藩主が寒風沢島を訪れ、同じ日に島に運び込まれた木材の検査が行われている［史料13］。八月二六には起工式が行われた［史料23、29］。三浦乾也を総棟梁として、棟梁は気仙沼の船大工の太七、弟の甚四郎が兄を補佐した。西洋船の設計を担当した四人の和算家も八月一六日に造船役を命じられている[11]。「帆前機器并蒸気船器械製造之具」（写真3）等の資料から、彼らは他の五人の仙台藩士とともに交代で寒風沢島に泊まり込み、［史料14］からは造船作業の監理業務を行っていたことが伺われる[12]。

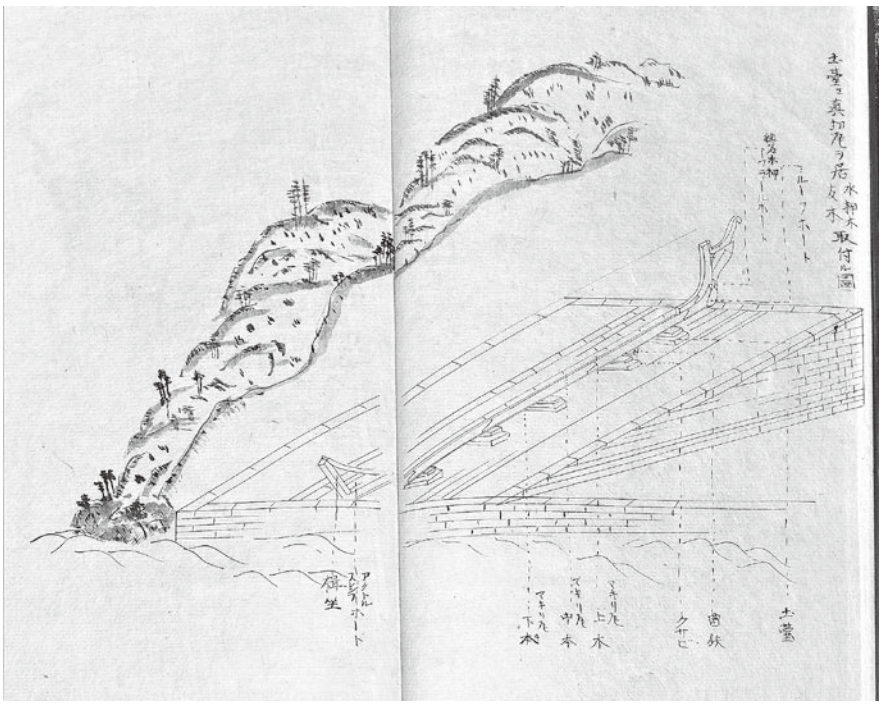


写真2 「蒸気船打建手続順図」
『佐伯彦三郎造船関係蔵書』

また、この時期の仙台藩には、養賢堂の算術家とも近い、天文暦道を業務とするグループがあった。一〇月下旬、天文方のリーダー・村田善次郎（一八一六～七八）が軍艦方測量指南役を命じられ、古山誠之丞（一八二四～八七）、志村将輔（一八二五～九八）、橋本清太夫（一八二四～?）、内池種治（一八三二～?）の四人が交代で寒風沢島に詰めたほか、若手の森田九平、上野歓治、御足軽の（影山）芳蔵が軍艦方稽古人として三浦乾也に学んだ［史料12］。和算家たちは主に船の建造、天文家たちは主に航海を担当したと考えられる。寒風沢島に残る開成丸建造碑［史料18］の裏面には、関係者八五名の名前が記されている。儒者、ロシア文学者などの肩書で名を残している人々、日本で初めてエンピツを量産した樋渡源吾とその兄の章助[13]、堤焼の陶工庄司（ママ）源七郎、ルソン島へ漂着した経験を持つ喜兵衛、後に藩の奉行但木土佐の暗殺未遂事件の首謀者として処刑された油井順之輔（一八二五～六五）など様々な名前がみられる。

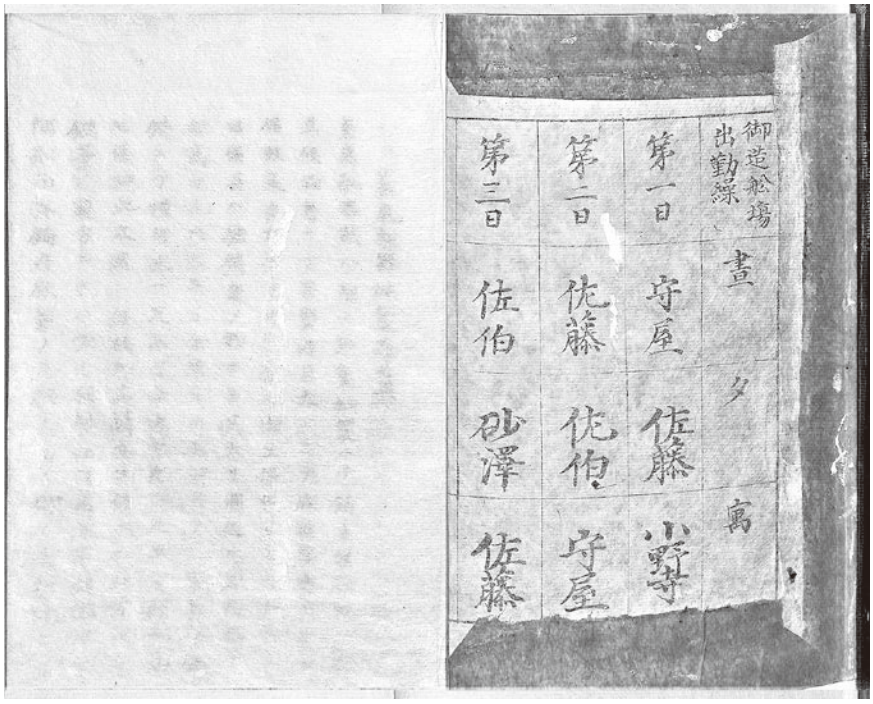


写真３　造船場の出勤録（一部）
「帆前機器并蒸気船器械製造之具」

三　開成丸の調練

安政四年（一八五七）六月二八日、船の進水式が行われ、開成丸と命名される。半月後の七月一三日、藩主が開成丸と海兵調練を見学、三浦乾也をはじめ、多くの関係者が賞された。一〇月には、命を受けた法蓮寺が開成丸の祈祷を行っており、一一月にはぎ装が終わり完成した。

初めての調練は、安政四年（一八五七）一二月朔日に行われた。寒風沢島の隣、桂島の石浜岬の沖まで船を出したと思われる。ここで祝砲を三発鳴らして碇泊したとある。図2は、三回目の調練の記録「開成丸近海御乗廻航海図」を基に作成した航路図であるが、「石ハマ」とある辺りまで船を出したと思われる。

二回目の調練は安政五年（一八五八）二月晦日から三月朔日にかけて行われた。出入司の松枝氏を船将として、奉行の芝多氏、養賢堂学頭の大槻習斎など藩の重鎮を含めた関係者ら八～九〇名が乗り込み、石巻の折浜沖で一泊している。この調練の航海図は「開成丸初度航海図」（図1）として残っ

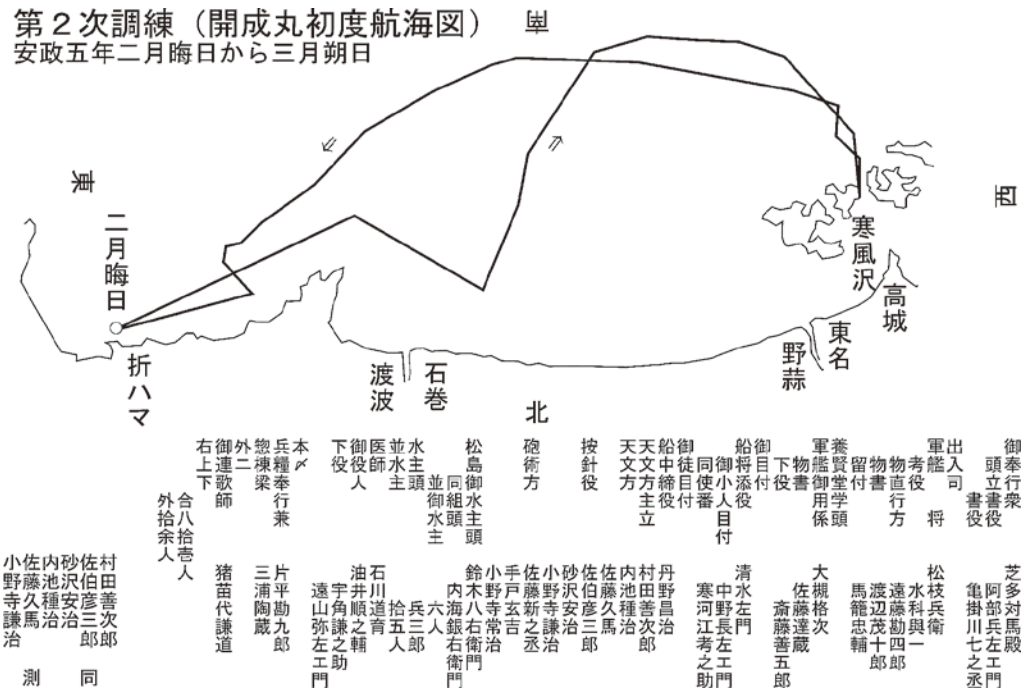


図１　二回目の調練の航路図
原図：「開成丸造鑑図巻」（東京国立博物館）

ているほか、この時の航海の様子を描いたのが「開成丸調練帰帆図」[14]である。三回目の調練は、安政五年七月三日から七日にかけて行われた。「開成丸近海御乗廻航海図」（図2）には、図の作成者六名の名前と簡単な航海の記録が記されている。これによれば、六日は天気が悪く風が強かったとあり、田代島付近で船の航路が大きな円を描いているのはこのためであろう。

四回目の調練の様子は「開成丸航海日誌」［史料29］、「開成丸調練航海図」（図3）に記されている。安政五年一二月二五日に出帆。翌々日に石巻沖で米を積み、領内を最大限に走る予定であった。途中、新年を気仙沼の松崎村沖で過ごし、前奉行の鮎貝氏から多大なる差し入れを受けている。「安政六年歳次己未日記」［史料30］によれば、四回目の調練から戻ってきたのは一月八日であるが、一六日に再度小調練に出るよう命ぜられ、この時に目付の境野吉之助と徒目付の野田伊左衛門が乗船しており、これが五回目の調練となる。一七日に出帆したものの一九日まで石浜沖で風待ち、その後、仙台湾をぐるりと回って二五日に帰港したことが、「開成丸乗船景況書」［史料28］に記されている。

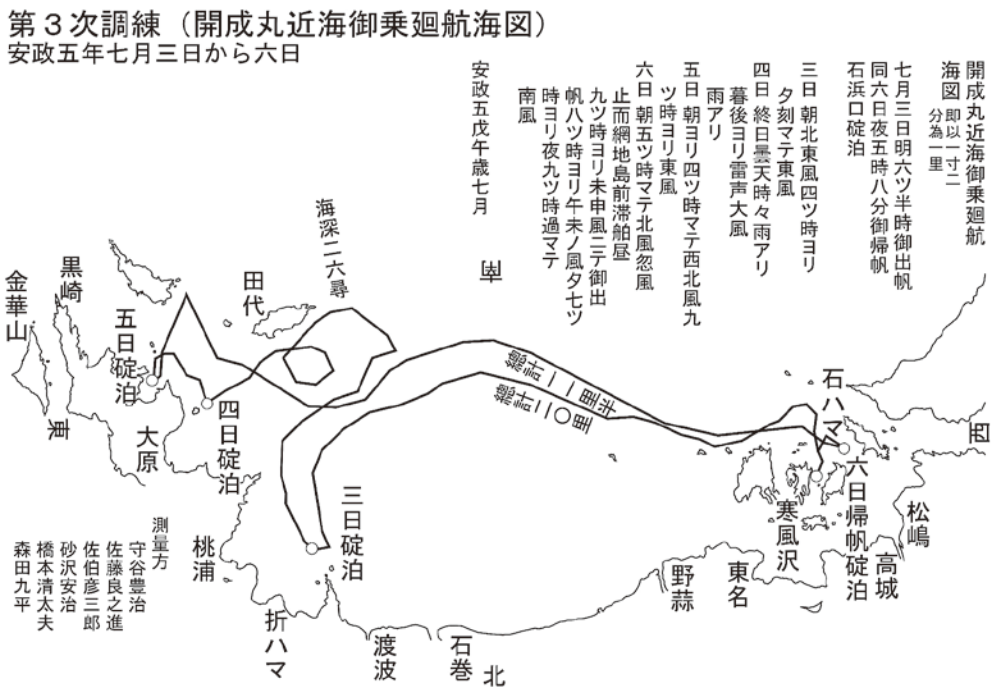


図2　三回目の調練の航路図
原図：「開成丸近海御乗廻航海図」（仙台市博物館）

四　江戸への航海

そして、二月一二日に開成丸は初めて江戸への航海を行うため石浜沖を出帆し、およそ一週間で江戸に着いた。この初めての航海は「開成丸航路図」として藩に報告されており、図4はこれに基づいて作成した図である。「開成丸航路図」には、この図の作成者として、村田善次郎ら一〇人の名前が記されているが、「開成丸航海日誌」［史料29］によれば、大槻礼輔は砲術方主立、佐藤新之丞、手戸玄吉、小野寺常治の三人は、砲術方測量方手伝であり、この航海では砲術方も乗船していたことがわかる。

二回目の航海は、「開成丸航海日誌」［史料30］や「ふなわたり日記」［史料31］によれば、安政六年一二月六日に深川に到着、正月を復路の根元沖で迎えたとあるので、遅くとも二月頃には仙台に戻っていると思われる（図5）。

そして、万延元年（一八六〇）の夏に行われた三回目の航海の復路、犬吠埼沖で相当なダメージを受けたとある。

「ふなわたり日記」［史料31］は、この時の修理を行ってい

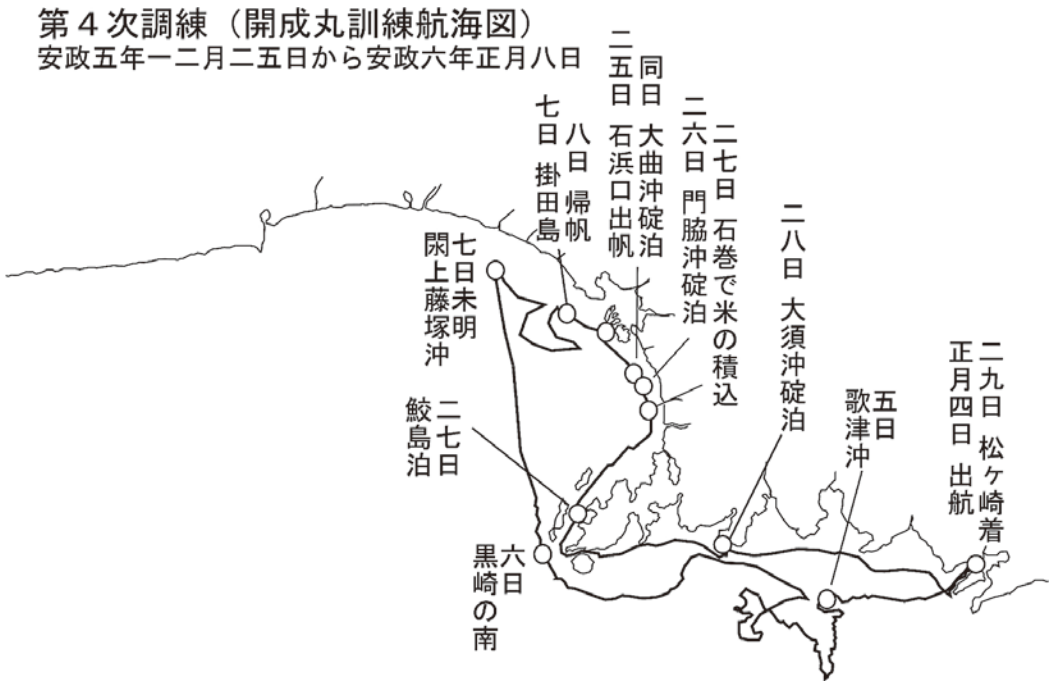


図３　四回目の調練の航路図
原図：「開成丸訓練航海図」（東京国立博物館）

るところから始まる。天文方御用を勤めていた村田善次郎が書いた開成丸の四回目の航海である。ここで登場人物を紹介してみたい。著者の村田善次郎と共に塩釜入りを果たした古山誠之丞（利貞）は、当時の天文家の中ではサブリーダー格であり、今回の航海では出航準備のみ行っている。村田善次郎らと現地で合流した内池種治は二九歳、安政六年（一八五九）に天文方御用を命じられたばかりである。佐藤久馬も慶応元年（一八六五）に天文方御用になっていることから、この時点では二〇代の青年かと思われる。もう一人の天文家、梅津彦三郎は、足軽運蔵の子とあり、見習いや村田善次郎の連れとして登場する。村田善次郎は、古山誠之丞、内池種治、佐藤久馬を教え子とも記しているが、これは古山らが、元々村田の私的な門人として算術や天文を学んでおり、その縁で天文方に推挙されたためである。足軽の子である梅津彦三郎が天文方のメンバーに加わっているのも、彼の算術や天文の才能が認められたためであろうと想像する。

開成丸の修理を行っている中嶋義七は、「造艦碑」［史料18］にも名が見られ、建造時から関わっていた大工である。石巻から来た職人の斎藤富治は、「開成丸航海日誌」［史料

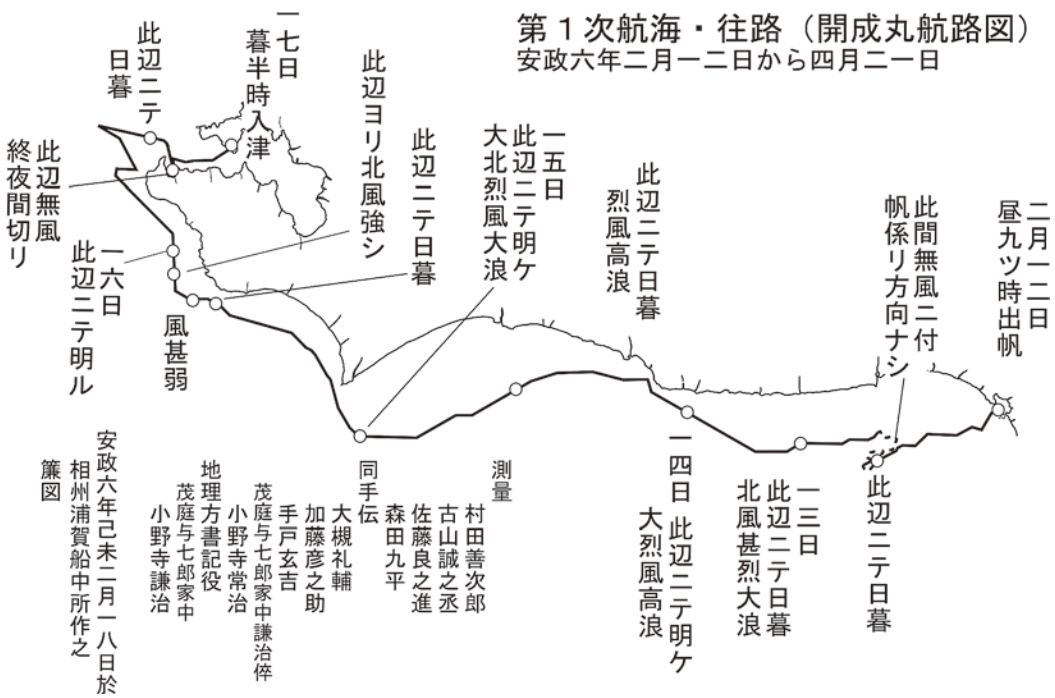


図４　一回目の航海の航路図
原図：「開成丸航路図」（神戸大学海事博物館）

29」によれば「軍艦方下役仮役　鍛冶主立兼」とある。太田長五郎も三浦乾也の江戸門人であると［史料18］に記されている。これら職人たちは、今回の航海には参加していない。

開成丸を実際に動かしていたのは、仙台藩主の遊覧船を操る御水主らである。船長の長南兵三郎、賄の巳之助は四回目の調練でも同じ役目であった。市三郎、内海銀右衛門、五郎助の三人は、［史料29］によれば、「表廻り」、「御道具締り兼松島御水主組頭假役」、「松島御水主」とある。このほかの一二名についても、四回目の調練とほぼ同じメンバーであろうと思われる。更に米の売買を担当していたのだろう徒目付の高橋健吉知誠が、連れの永沢義三郎と与七と共に往路のみ乗船している。

天文方は古山利貞を除く四名、藩の役人三名、水主一七名の総勢二四名が今回の乗船メンバーである。砲術方は乗っておらず、最低限の人数での航海ということになる。

開成丸は、万延元年一二月二日に寒風沢を出て数日間石浜沖で風を待ち、六日に江戸へ向い出航した。開成丸が調練を開始してから丸三年経ったにも関わらず、「ふなわたり日記」［史料31］からは天文方と水主らのチームワークの悪さが読

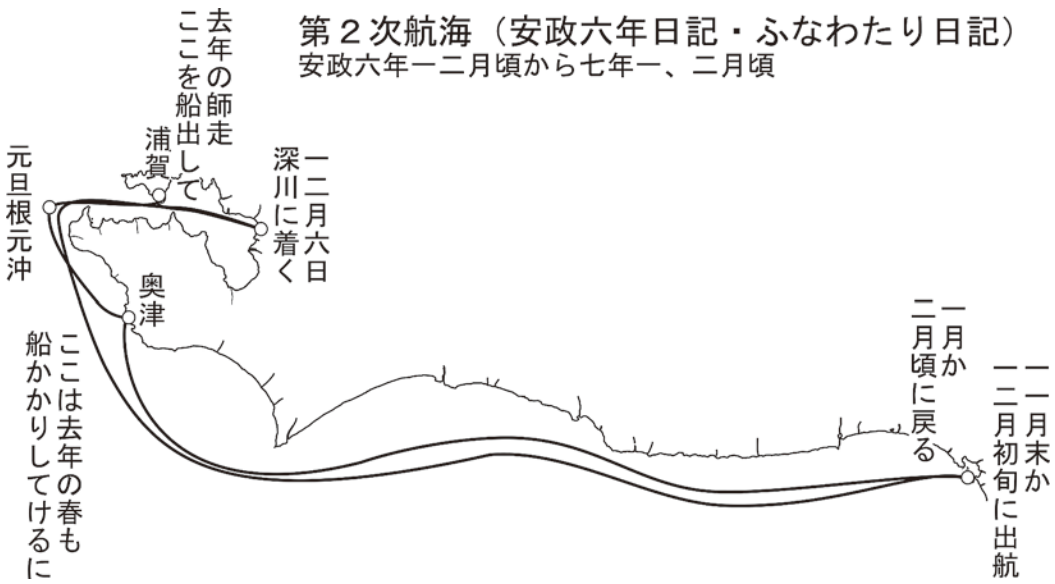


図５　二回目の航海の航路図

み取れる。西洋船の扱いに慣れていないこともあるが、陸地を目印とせず、沖合を天測で進むという航海術そのものが、水主たちの身についていなかったようである。この航海でも、天候に翻弄された開成丸は、気が付くと伊豆大島付近まで流され、下田に寄港、一週間ほど滞在した後ようやく浦賀にたどり着いた。

浦賀は、幅も奥行きも仙台港の半分ほどの狭い港である。そこに、四五百もの小舟が集まり、間を縫うように大型の船も行き交っていた。その中には異国船もあって、ボートで上陸する異国人を見ようと騒ぐ子供たちもいる。節分の日、叶神社[19]には炒った豆を持った人々が集まり豆まきを行っていたが、これを見た村田は、故郷にないことなので珍しくも興味深いとの感想を記している。浦賀や奥津での様子は、本書の井上論文に詳しいのでそちらに譲りたい。

開成丸が浦賀に停泊している間に、長州藩士や箱館丸の測量方の代嶋伝郎、木村卓平[15]、幕府の蒸気船朝陽丸の測量役の荒井育之助と古河（甲賀）源吾[16]が開成丸を訪れている。開成丸が寒風沢を出航した前年一二月二日にも箱館奉行所の亀田丸が寒風沢に寄港し、測量方の小西健三郎、海老子重次郎、

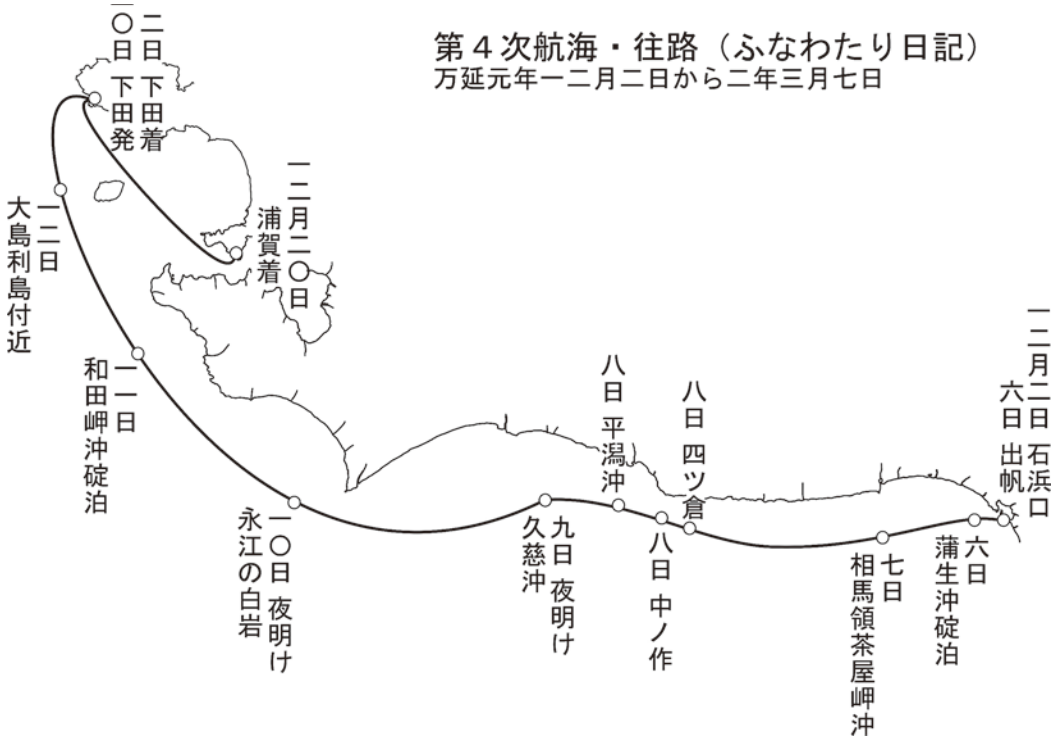


図６　四回目の航海の航路図（往路）

佐藤泰治郎が開成丸を訪問している。この頃、各地で作られた洋式船の見学や測量方同士の情報交換が盛んに行われていたことが伺われる。

さて、浦賀では開成丸から米を降ろし、代わりに浦賀で調達した塩を積みこんだ。この経緯については、本書の佐藤論文に詳細が記されているのでそちらに譲りたい。浦賀を二月三日に出航したものの、往路とは異なり帰路は季節風の影響を強く受けたのであろうか。開成丸の迷走ぶりは図7の通りである。風上に船を進めるためには、ジグザグに針路を取る「間切り」を行う必要があるが、それでも船は進まない。奥津では、いったん船を出したものの、再び悪天候のために戻って、一〇日以上も風待ちしている。積み荷が水に弱い塩だったからか、それとも船が大きく破損した三回目の航海に懲りての安全策なのだろうか。進んでは戻り、進んでは戻りを繰り返しながら、ようやく寒風沢に戻ったのは、三月七日のことであった。たくさんの人々が開成丸の無事を喜び迎えたという。空はれてのどけし。こんな言葉で「ふなわたり日記」は締め括られている。

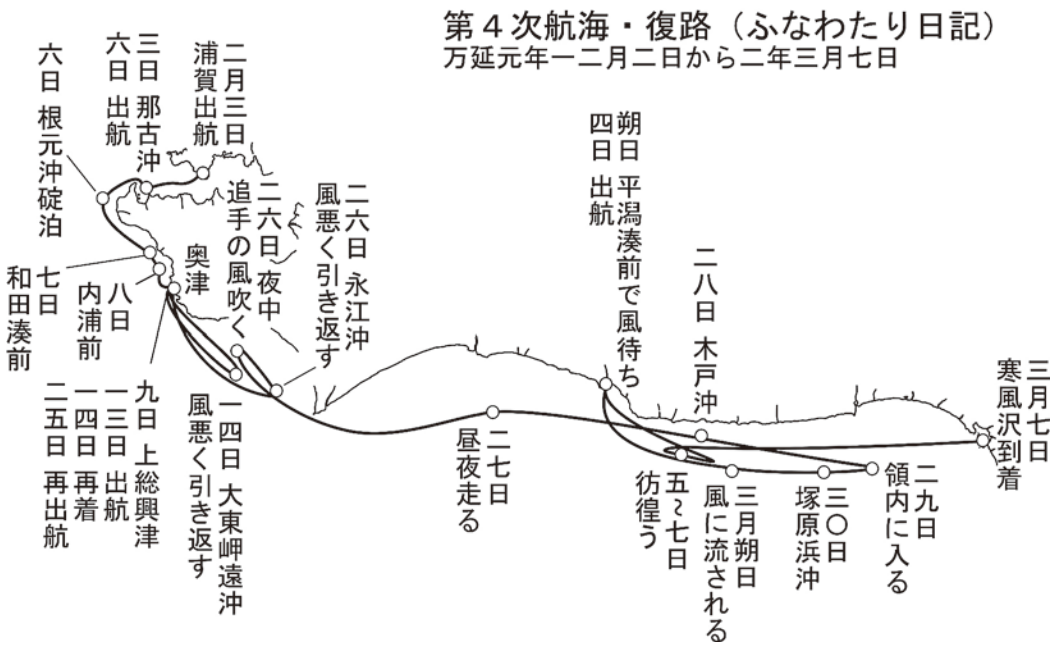


図7　四回目の航海の航路図（復路）

おわりに

さて、様々な史料から浮かび上がる開成丸のプロジェクトは、決して順風満帆ではなかったようである。最新の造船技術と航海術をいち早く取り入れ、国防や海外貿易まで視野に入れた高い理想が見える。一方で、権限を持たない船長、航海や商取引を片手間で行わざるを得なかった天文方、途中からいなくなった砲術方など、組織力や技術力の未熟さなどの現実が垣間見える。あるいは、異国人による直接的な指導があれば、組織力や技術力の問題は解決していたのであろうか。

開成丸には、同じ西洋船を運用する測量方などの人々がたびたび訪れており、酒を酌み交わしながら、お互いの情報を交換したようである。その内容は、いったいどのようなものであったのだろうか。時には愚痴もあったと想像するのであるが、真実は如何に。興味は尽きないところである。

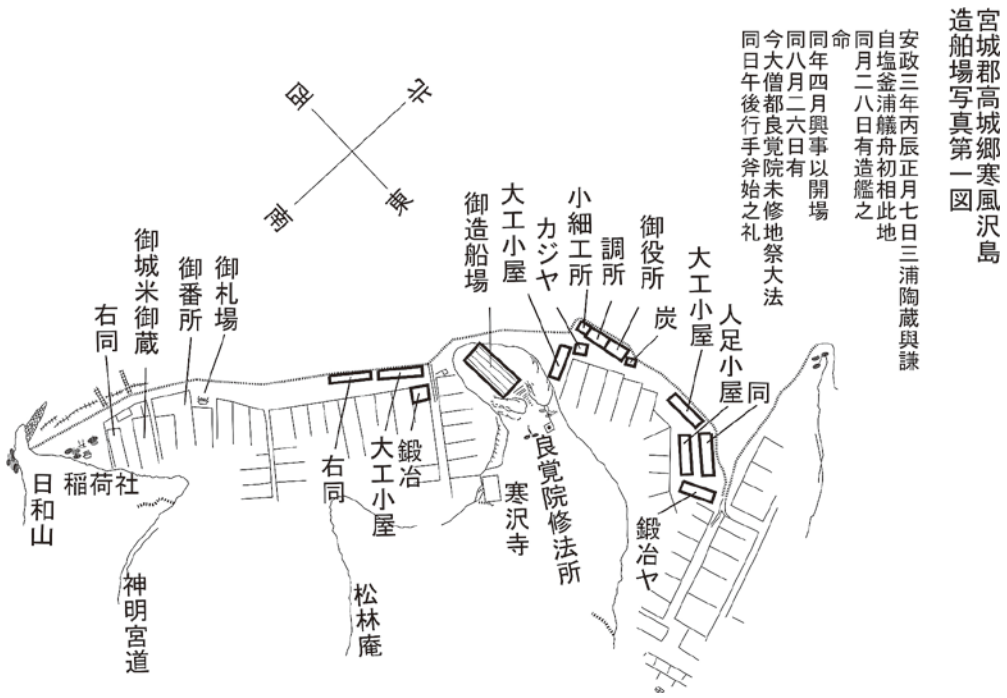


図８　寒風沢島の造船場の周辺
原図：「開成丸造鑑図巻」（東京国立博物館）

注

（1）これらの船が作られた戸田村は豆州君沢郡（静岡県沼津市）にあったことから、同型艦は君沢形と呼ばれている。君沢形はスクーナー全般を指す言葉として使われることもあるため、開成丸を君沢形としている文献もある。

（2）岡千仞「在臆話記上・下」『随筆百花苑第1、2巻』、中央公論社（一九八〇）。

（3）「佐伯彦三郎造船関係蔵書」一八冊（仙台市博物館）ここでは、書名だけ記す。「帆前機器并蒸気船器械製造之具全」（一冊）、「蒸気船打建手続順図」（一冊）、「蒸気船製造口授・台場之図・軍艦語説伝・蘭船見聞集・瀝青塗之伝」（一冊）、「重訳航海金針全」（一冊）、「廻船安乗録全」（一冊）、「海路安心録」（一冊）、「遠西奇器図説」（一冊）、「利尼船製造全書一～五」（五冊）、「舶砲新篇　放射篇上中下」（三冊）、「七種軍艦造法論三～五」（三冊）。

（4）志村茂斎（恒憲）「航海類書」（東北大学附属図書館所蔵）。

（5）江木鰐水「江木鰐水日記」（『大日本古記録　江木鰐水日記』上、東京大学史料編纂所　一九五四年）。

（6）「楽山公治家記録」安政二年四月八日（仙台市博物館所蔵）。

（7）大西恵美子「養賢堂の軍艦『吉田大肝入文書』より」『仙台郷土研究』二九五号、二一七頁（二〇一七）。

（8）「仙台人名大辞書」では、佐伯彦三郎は国分高広、砂沢安治は佐藤安治として紹介されている。

（9）「開成丸真形百二〇分一之図」『開成丸造鑑図巻』（東京国立博物館研究情報アーカイブス）巻末に石井重賢蔵とある。石井は三浦乾也の養子で日本画家である。

（10）「開成丸下海図」『開成丸造鑑図巻』（東京国立博物館研究情報アーカイブス、仙台市博物館）。

（11）吉田正志監修「源貞氏耳袋」刊行会編（二〇〇七年九月）安政三年八月一六日。

（12）「帆前機器并蒸気船器械製造之具」は、造船場の出勤繰を表紙に再利用している。佐伯が残した別の本（個人蔵）の表紙裏からも出勤繰の六日目から九日目（最終日）が見つかっている。これらを勘案して九人が三泊四日の勤務を繰り返していたと推測した。

（13）小井川百合子「鉛筆の歴史」『仙台市博物館調査研究報告』第9号、一九八八年、五七―六三頁。

（14）三浦乾也「開成丸調練帰帆図」（仙台市博物館所蔵）。

（15）木村卓平は、幕府の測量方・菊池卓平（一八四五～一九二八）と同一人物か。菊池の実父は木村姓である。

（16）荒井郁之助（一八三六～一九〇九）と甲賀源吾（一八三九～六九）は、後に幕府の榎本艦隊のナンバー2、3として箱館戦争にも加わった人物である。

「ふなわたり日記」に見える開成丸の下田・浦賀・奥津滞在中の動向

井上拓巳

はじめに

開成丸の第四次航海に関する村田善次郎による「ふなわたり日記」[1]には、航海中の出来事はもとより、途中の湊に滞在した際の出来事が詳細に記述されている。本稿では、「ふなわたり日記」を題材に、航海中に立ち寄った伊豆国下田・相模国浦賀・上総国奥津での、開成丸乗員と湊にいる人々との交流を中心に、滞在中の動向について検討したい。下田・浦賀・奥津はいずれも航路上の要所であり、仙台藩の廻船もたびたび立ち寄っていた。いずれの湊においても、仙台藩の関係者がおり、それらの人物と開成丸の乗員との交流が「ふなわたり日記」に記述されている。本稿では、それらの人物の素性などを明らかにしながら、その交流にどういった意味があったのかについても考察したい。

開成丸乗員と交流した主要な人物は仙台藩の役人である穀役人や仙台藩の穀宿であった。彼らは主に仙台藩廻米に従事しており、それについて過去に拙稿の中で述べたことがある[2]。基本的に主要な湊に派遣されていた穀役人や穀横目が仙台藩廻米について監視などを行っていた。穀宿は廻米に従事することを主な職務としていたが、廻船が仙台藩領に戻る際に積んでいた荷物の破船処理に関わるなど、仙台藩に関する荷物の輸送に広く関わっていたことが明らかとなっている。また穀宿は穀役人や穀横目との日常的な関係があることも分かっている[3]。

そこで本稿では、まず仙台藩による運航管理について検討し、そこに関わる仙台藩の役人や穀宿、足軽といった役職の人物について、確認していきたい。次に、下田・浦賀・奥津における滞在時の動向について、主に人々との交流の面から検討したい。以上の検討を通じて、滞在中の出来事から判明

することを整理していきたい。

一　仙台藩による廻船の運航管理

（一）仙台藩の「名題」制度と管理・統制

開成丸の動向について検討する前に、仙台藩による廻船の運航管理について、確認しておきたい。仙台藩の海上輸送を通じた廻米に関する研究はこれまでも活発に行われており、中でも斎藤善之氏による研究によって、仙台藩の廻船の運航管理体制が明らかとなっている[4]。本稿で取り扱う開成丸の運航については、厳密に言えば異なるものの、関連する部分も多い。斎藤氏の研究成果に学びながら、検討していきたい。

斎藤善之氏は主に仙台藩領内の石巻の御穀船について検討されている。御穀船は仙台藩の廻米に主として従事し、石巻から江戸、銚子まで仙台藩米を輸送するとともに、仙台藩領内に帰る際には仙台城下商人の仕入荷物の輸送などに従事した。また盛岡藩や一関藩の廻米や、幕府城米輸送に従事することもあった。

仙台藩の廻船は、領内のみならず、江戸や銚子などへの遠隔地の海上輸送に従事しており、仙台藩による廻船の運航管理が必要であった。斎藤氏によれば、仙台藩では「名題」と呼ばれる廻船の船主と船頭を登録する制度があった。「名題」による廻船の名義の継承や譲渡には仙台藩による承認が必要であり、この制度によって廻船の適切な質と量が確保されていた。また廻米の公定運賃の設定や処罰制度などもあり、仙台藩による廻船への管理・統制が行われており、膨大な廻米を実施する仙台藩にあって、強力な管理・統制が行われていたことを斎藤氏は指摘されている。

（二）東廻り航路の湊と内陸舟運の河岸場に所在する仙台藩関係者

斎藤氏は仙台藩の廻船の管理・統制のあり方を明らかにされたが、仙台藩の廻船が運航している間の日常的な管理はどのようにされていたのだろうか。これについては、東廻り航路の湊に派遣された仙台藩役人によって行われていた。

仙台藩は廻米を実施するにあたって、東廻り航路の拠点となる湊に役人を派遣していた。時代によって変更はあるものの、江戸中期以降に派遣が確認できるのは、常陸国平潟（常

州平潟穀役人）、常陸国潮来、下総国銚子（潮来・銚子御国穀横目）、伊豆国下田（豆州下田穀役人）、上総国奥津（総州奥津穀役人）、安房国館山（房州館山穀役人）の六か所である。[5] なお、内陸舟運への積替えが行われる、潮来・銚子の役人は穀横目という名称の役職であるが、それ以外は穀役人であった。また後述するが「ふなわたり日記」の中で、伊豆国網代にも仙台藩役人が派遣されていたことが記述されている。

穀横目や穀役人の職務の全容は明らかではないが、「穀」という文言から分かるように、仙台藩の廻米に関することが主な職務であり、仙台藩廻米船の監視や破船処理対応等を行っていた。[6]

また穀横目と穀役人は、仙台藩廻米船に関与するだけでなく、仙台藩領内の廻船運航全般についての管理も行っていた。これについては石巻の穀船船主の武山家文書の中で記録がある。[7] 仙台藩の国産仕法における、移出品の海上輸送に関する海上通判の文政六年（一八二三）の雛形が記録されているが、その宛所にはそれぞれ「津々浦々仙台御役人衆中」とあり、これは穀横目や穀役人のことを指しているのだろう。[8]

仙台藩領内の廻船は、仙台藩廻米や国産仕法に関する海上輸送だけでなく、幕府城米輸送に従事することもあった。この時には、仙台藩廻船の雇用主は幕府代官所や廻船雇用を担当する廻船差配人ということになるが、この時にも仙台藩による運航管理と無関係ではなかった。これについても武山家文書の記録であるが、城米輸送に従事する仙台藩廻船の海上通判の雛形が二点残されている。[9] 二点とも、差出は伊東彦左衛門、宛所は「津々浦々仙台御役人衆中」であり、国産仕法に関わる海上輸送の海上通判との共通点が見出せる。伊東彦左衛門の素性は不明だが、恐らく仙台藩の津方関係の役人だろう。この海上通判雛形には、廻船が城米輸送に従事するため、他領に出ることを希望したため、仙台藩からその許可を得ている旨が記載されている。海上通判の発行によって、廻船は運航を許され、東廻り航路の湊に到着した際に、穀横目や穀役人による改めを受けることになっていたと考えられよう。

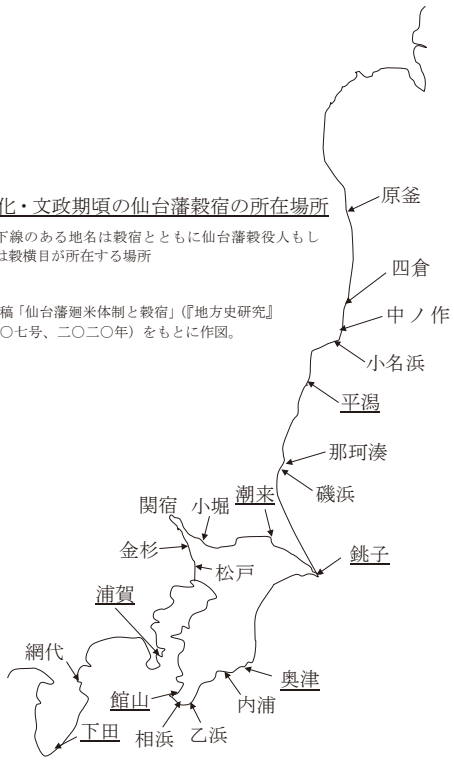
以上のように、穀横目と穀役人はそれぞれの派遣された湊において、仙台藩領内の廻船による海上輸送を監視し、運航について管理・統制していたといえるだろう。

なお、穀横目と穀役人の配下には足軽が配置されていた。足軽は仙台藩龍ヶ崎陣屋から派遣された者であり、龍ヶ崎領内の在地の者が雇用されていた。『茨城県史』では仙台藩と江戸を結ぶ航路中、船が立ち寄る諸湊において交代で廻船の対応を行う津方足軽についての記述があり、津方足軽は仙台藩役人の配下として、天和三年（一六八三）八月から安房国内浦と館山、常陸国潮来、下総国銚子の四か所に二人ずつ派遣されることになり、元禄年間まで六〇日で交代であったのが、その後は半年交替に変わったとしている。[10] 実際には、奥津などでも足軽の存在が確認されていることから、足軽の派遣については変遷があったものとみられるが、足軽は基本的には穀横目と穀役人の配下とされ、派遣された湊で仙台藩廻米船の船改めを行っていた。[11]

また足軽とは別に、湊の在地の者で穀宿と呼ばれる人物が存在した。彼らは、村役人を務める者や海運や流通に従事する者など、いわゆる地域の有力者である者が多かった。そういった在地の人物でありながら、仙台藩廻米に従事する穀宿として穀横目や穀役人の下で仙台藩廻米に関わっていた。仙台藩廻船は、湊に滞在した際に穀宿に対して二〇〇文から一分五〇〇文程度の穀宿料を支払っており、穀宿が仙台藩廻船の船宿の役割を担っていたことが判明している。[12] また、穀宿は仙台藩廻米船が破船した際の対応なども行っていた。

穀宿は、穀横目と穀役人の所在地にいた他、それ以外の湊や浜、また内陸舟運の河岸場にもいた。時代によって、穀宿の所在地にも変化があったとみられるが、文化・文政期頃には二一か所で所在が確認されている。[13] これらの中に、開成丸が立ち寄った下田・浦賀・奥津も含まれている。

以上のように東廻り航路上の主要な湊と内陸舟運の河岸場



には仙台藩関係者が所在しており、斎藤氏による運航管理に関する研究成果と合わせて考えると、仙台藩による運航管理の全体像が浮かび上がる。斎藤氏が明らかにした「名題」制度を通じて、廻船集団として仙台藩による管理・統制が行われるとともに、運航中には穀横目や穀役人、さらには足軽や穀宿によって廻船の運航への対応がなされることで、こうした湊にいる仙台藩関係者を通じた運航管理が行われていたと評価できよう。この点は、今後より多くの事例を検討する必要があるが、現時点では以上の通り理解できよう。

二　開成丸の滞在中の動向

ここでは、主に開成丸が立ち寄った下田・浦賀・奥津における滞在中の出来事に関する記録から、開成丸の船乗りと湊の人々との交流について確認していきたい。開成丸はすでに五回の調練航海と、三回の航海を経験していた。「ふなわたり日記」は万延元年（一八六〇）から翌年にかけての開成丸の四回目の航海に関する記録である。過去三回の航海時に、浦賀と奥津に滞在していることは確認できる。一方、下田には訪れた形跡がなく、初めての滞在であったとみられる。滞在中の動向について主要な出来事を中心に、下田・浦賀・奥津の順に検討していきたい。

（一）下田

伊豆国賀茂郡に所在する下田は、江戸の玄関口としての機能を果たす湊であった。下田には浦賀奉行所の前身にあたる下田奉行所があったが、享保五年（一七二〇）に浦賀奉行所ができたことにより、廃止されている。天保一三年（一八四二）に下田奉行所が復活するが、弘化元年（一八四四）に再び廃止されている。そしてペリー艦隊が下田に来航した安政元年（一八五四）に、三度目の下田奉行所の設置がなされるが、万延元年に、また廃止されている。開成丸が下田に立ち寄った時点では下田奉行所は存在していないが、浦賀奉行所の関係者が下田に派遣されていた。下田は外国への対応の最前線の一つであり、開国に関わる大きな変化の最中にあった。

下田は仙台藩と関わりの多い湊でもあった。いつの頃か定かではないが、仙台藩から下田に穀役人が派遣されており、

仙台藩の陣屋があった。ただし、天保一三年時点では、仙台藩陣屋はすでに無く、網代にある仙台藩の陣屋がその役割を担うようになっていたが、仙台藩廻船の運航において下田は寄港地の一つであり続けていた[14]。

開成丸の下田到着はもともと計画されていたものではなかった。一二月六日に寒風沢を出発し、浦賀を経て、江戸へ向かう予定であった。一一日ごろ安房国沖に差し掛かったあたりから、悪天候になり、破船は免れたものの、当初の予定の航路ではない伊豆半島沖に流されたため、下田に立ち寄ることになった。

下田に到着したのは一二日のことであったが、翌一三日には予定外の下田到着に関して、仙台の国元や江戸屋敷に告げるために、網代の仙台藩役人とみられる矢野目伊兵衛の下へ連絡をしている。また江戸へ向かうはずの船が下田に到着したことを、幕府関係者にも報告している。これを受けて、下田に駐在する浦賀奉行配下の与力同心封印役の福西啓蔵[15]と平同心直井彦七が開成丸まで確認に来ている[16]。

一四日には、下田の穀宿の案内によって、下田に近い蓮台寺村の温泉を訪れている。下田の穀宿の名前は記載されていないが、下田では廻船問屋の肥田家が世襲で務めており、この時も肥田家が務めていたとみられる[17]。穀宿の案内によって、複数名で蓮台寺村の温泉に赴き、そこで入浴し、食事をとっている。航海中には入浴ができなかったため、久しぶりの入浴を喜んでいる。一六日にも下田町のはずれの温泉に入浴している。

月日	下田滞在中の主な出来事
一二月一二日	下田に到着する。
一二月一三日	仙台の国元と江戸の藩邸に連絡するために、網代の矢野目伊兵衛に飛脚で連絡をする。また幕府関係者に報告し、浦賀奉行所配下の二名が開成丸まで来る。
一二月一四日	下田の穀宿の案内で、蓮台寺村の温泉に出掛ける。浦賀奉行所配下の二名とも合流し、酒食を共にする。
一二月一五日	海人がブダイとアワビを船に持参したため、それを食べる。
一二月一六日	下田町のはずれにある「不二の湯」に入浴する。
一二月一七日	出来事無し。
一二月一八日	風と波が激しく、開成丸が大きく揺れる。
一二月一九日	よい風が吹かないため、足止めされる。夜に「老人星」を見る。
一二月二〇日	下田を出発するために、湊口近くの和歌の浦に移動する。
一二月二一日	下田を出発し、浦賀に到着する。

一五日以降、下田を出発するために、風待ちをしている様子が見えるが、航海に適した追い風が吹かず、悪天候が続いた。その後、二〇日に下田湊の入り口に近い和歌の浦まで移動し、翌二一日に風の様子を窺いながら出発し、浦賀へ向かった。

（二）浦賀

浦賀は、浦賀奉行所による船改めが行われる江戸の玄関口であった。江戸に入る廻船は原則的に浦賀で船改めを受けなければならなかったため、開成丸も浦賀に立ち寄っている。ただしそれだけが浦賀訪問の目的という訳ではなく、もう一つの大きな目的があった。それは積荷の取引であり、仙台から輸送した米の引き渡しと、仙台に輸送する塩の積み込みが行われている。

浦賀には仙台藩役人は派遣されていなかったが、穀宿が三名いた他、仙台藩と取引のある商人等がおり、「ふなわたり日記」では主に彼らとの交流が記録されている。開成丸は一二月二一日に浦賀に到着し、翌二二日は浦賀奉行所による船改めが行われたのち、穀宿の松下吉兵衛、西郷理右衛門、鎌倉屋伝六等が開成丸に来て、無事に到着したことに喜びを述べた。そして高橋知誠に音信があることを伝え、松下吉兵衛がそれを開くと、仙台藩深川屋敷に来るよう指示が書かれていた。そのため、高橋はすぐに出発している。

浦賀では積荷である米の積み下ろし作業と仙台の国元へ運ぶ斎田塩の積み込み作業が行われたため、滞在期間は長かった。主に穀宿の家に行くか、積荷関係のやりとりを行っている。二四日には、鎌倉屋伝六の家に行き、そこで食事と飲酒をし、入浴している。約一年ぶりの再訪問を喜び、故郷のことを語るなど、くつろいでいる様子が窺える。二八日には、穀宿の松下吉兵衛が船に来て、天候のことなどを述べている。二九日には、江戸の米問屋丸屋勝次郎[18]に販売することになっていた積荷の米九四〇俵を丸屋勝次郎の手代の政吉の立ち会いのもとで積み下ろしている。

年が明けて、一月一日は正月の祝いの舟唄を歌い、新年を祝う浦賀の町を観察している。昼頃には松下吉兵衛、西郷理右衛門、鎌倉屋伝六、山田屋吉三郎、紀伊国屋伊兵衛等が続々と開成丸を訪ねてきて、新年の祝いを述べている。二日には積み残しの米をすべて積み下ろしている。夕方には知誠

月日	浦賀滞在中（一回目）の主な出来事
一二月二一日	下田を出発し、浦賀に到着する。
一二月二二日	船改めを受け、積荷の数量や乗員数について調べられる。その後、穀宿の松下吉兵衛、西郷理右衛門、鎌倉屋伝六等が来て、到着の喜びを述べるとともに、仙台藩深川屋敷から高橋知誠に音信が届けられていることが告げられ、知誠はすぐに江戸へ向かうことになる。
一二月二三日	出来事無し。
一二月二四日	浦賀の町を見物に出かけたところ、浦賀に入港していた外国船の件で、子供たちが騒がしく走り回っている。その後、鎌倉屋伝六の家に行って、酒食をとる。この日は節分の行事が行われており、叶神社付近が賑わっている。
一二月二五日	出来事無し。
一二月二六日	高橋知誠が浦賀に戻る。
一二月二七日	周辺の漁業について書き留めている。
一二月二八日	穀宿松下吉兵衛が来て、天候について述べる。
一二月二九日	積荷の米は、江戸商人の丸屋勝次郎に売却されるため、その手代の政吉が来て、積み下ろし作業を行う。降雨のため、九四〇俵完了したところで、この日の作業は終わる。
一二月三〇日	大晦日であるため作業は無く、正月の準備が行われる。穀宿松下吉兵衛が開成丸に来て、翌日に使う屠蘇白散を持参する。
一月一日	正月の儀式、船乗り初めの儀式などが行われる。昼頃から松下吉兵衛、西郷理右衛門、鎌倉屋伝六、山田屋吉三郎、紀伊国屋伊兵衛等、続々と年始の挨拶に来る。
一月二日	積荷の米の積み下ろし作業が行われ、すべて完了する。松下吉兵衛のもとへ新年の祝いのため訪問する。長州藩の平岡兵部が開成丸を見学するために来る。
一月三日	鮪を積んだ船が到着したことを告げるために、丸屋勝次郎の手代政吉が来て、関係者で刺身にして酒を楽しむ。
一月四日	出来事無し。
一月五日	高橋知誠は江戸へ船で向かう。斎田塩一五〇〇俵を開成丸に積み入れる。幕府の箱館丸の乗員で測量方の代嶋伝郎と木村卓平が開成丸に来る。
一月六日	斎田塩二五〇〇俵を開成丸に積み入れる。
一月七日	松下吉兵衛の家で入浴する。
一月八日	出来事無し。
一月九日	江戸へ向かうため、引船で湊口に移動する。
一月一〇日	浦賀を出発し、江戸へ向かう。

ともに松下吉兵衛のもとへ新年の祝いを述べに訪問した。三日には丸屋勝次郎の手代政吉と会っている。五日に斎田塩一五〇〇俵を、翌六日にさらに二五〇〇俵を船に積み込んでいる。なお、五日には幕府の洋式船箱館丸の乗員で測量方の代嶋伝郎と木村卓平が開成丸に来ている。七日に松下吉兵衛のもとへ入浴に行き、九日には江戸へ向かう準備をして、翌一〇日に開成丸は浦賀を出発し、江戸へ向かった。

江戸で用事を済まし、再び浦賀に戻ってきたのは一月二六日のことである。二七日には松下吉兵衛が開成丸を訪ねている。また同日夕方には入浴のために、松下吉兵衛のもとへ訪

ねている。二八日には、松下吉兵衛の親戚にあたる宮原吉三郎の宿へ行き、松下吉兵衛等と酒食を共にしている。二九日には、穀宿鎌倉屋伝六の宿に行き、酒を飲み、その後は別の場所で入浴している。二月一日には、浦賀で修復作業中であった幕府所有の蒸気船朝陽丸[19]の見学をしている。二日には、朝陽丸の関係者が開成丸に来て、双方で酒食の交流をしている。そして三日に浦賀を出発している。

浦賀では、穀宿や商人、幕府関係者と交流をしている。特に穀宿松下吉兵衛とは日常的な交流があった。またそれ以外の穀宿や商人についても交流が確認される。穀宿はもちろんのこと、これらの商人については、仙台藩と何らかの関係を有していたとみられる。穀宿三名のうち、松下吉兵衛は仙台藩廻米船の免米取引を行っていることが確認されている[20]。また穀宿ではないが、紀伊国屋伊兵衛も、仙台藩廻米船の免米や大豆などの取引を行っていることが確認されている[21]。同じく穀宿ではない山田屋吉三郎については、加藤晴美氏と千鳥絵里氏の研究によって、慶応元年（一八六五）時に仙台藩廻米船の附船小宿であり、廻米船の対応を年間三三回行っていたことが明らかにされている[22]。

月日	浦賀滞在中（二回目）の主な出来事
一月二六日	江戸を出発し、浦賀の湊口に到着する。
一月二七日	船改めを受け、それが終わると穀宿の松下吉兵衛が来る。松下吉兵衛の家で入浴する。
一月二八日	松下吉兵衛の親戚である宮原吉三郎の家に行き、そこで松下吉兵衛等と、酒食を共にする。
一月二九日	鎌倉屋伝六の家に行き、伊豆国加茂の温泉を移したとされる風呂で入浴する。
二月一日	幕府の蒸気船の朝陽丸が浦賀で修復中であったため、それを見に行く。
二月二日	幕府の蒸気船の朝陽丸の乗員で測量方の荒井郁之助と甲賀源吾等と酒食を共にする。
二月三日	浦賀を出発する。

以上のように「ふなわたり日記」で登場する浦賀の穀宿や他の商人は、仙台藩との取引関係が確認できる者であった。いずれも仙台藩廻米やそれに関連する免米取引などに関与しており、この時の開成丸の運航とも関係がある者たちであった。

（三）奥津

上総国夷隅郡に所在する奥津は、東廻り航路の避難湊として知られている。ここで風待ちをして、天候を見極めて出発

月日	奥津滞在中の主な出来事
二月九日	奥津に到着する。穀宿浦部孫左衛門から穀役人が交代になっている旨を伝えられる。浦部孫左衛門の家に行き、そこで穀役人の菊地七郎左衛門とも会う。
二月一〇日	去年会った人々と会う。浦部孫左衛門の家で入浴する。
二月一一日	内池行孝と従者の彦三郎がウラジロを採りに山へ行く。菊地七郎左衛門と浦部孫左衛門が開成丸に来る。
二月一二日	名主日置又五郎の家を訪ねる。その後浦部孫左衛門の家を訪ね、入浴する。
二月一三日	浦部孫左衛門に呼ばれ、風が吹いていることを確認し、出発の準備に取り掛かる。浦部孫左衛門の家に行き、入浴する。その後、奥津の仙台陣屋に行き、菊地七郎左衛門に出発する旨を告げて、開成丸に戻る。菊地も見送りに来て、出発を酒で祝っている。その後、奥津を出発する。
二月一四日	出発したものの、東風が強いため、奥津に戻る。
二月一五日	菊地七郎左衛門と浦部孫左衛門が開成丸に来る。砂子浦の穀宿源蔵が海老・九年母などを持って会いに来たため、酒食を共にしている。
二月一六日	日置睡鴎の家に行き、菊地七郎左衛門も合流して、酒食を共にしながら話をする。
二月一七日	菊地七郎左衛門配下の足軽権蔵から、初鰹と筍を入手したので来るようにと言われたため、菊地氏のもとへ向かい、酒食を共にする。
二月一八日	菊地七郎左衛門、浦部孫左衛門、日置睡鴎らとともに、開成丸で会席料理をする。日置睡鴎が取れ立ての鱸等を持参し、それを塩焼きにして食べている。日置の誘いで、日置の家に行き、入浴する。
二月一九日	会席料理が船乗りたちに振舞われる。浦部孫左衛門と足軽権蔵も来る。
二月二〇日	陸に上がって、根芋などを取る。浦部孫左衛門の家へ行き、入浴し、麦飯を食べ、酒を飲む。
二月二一日	行孝や船子が漁に行き、鮑・蛸・蟹などを取り、戻ったため、酒とともに食す。
二月二二日	荒天のため、開成丸も大きく揺れる。
二月二三日	強風が吹く。
二月二四日	出来事無し。
二月二五日	奥津を出発する。

する廻船が多かった。奥津の弁天山下には仙台藩の陣屋があり[23]、仙台藩から穀役人が派遣されるとともに、その配下として足軽も派遣されていた。また奥津の浦部家が仙台藩の穀宿を務めていた[24]。

開成丸は二月九日に奥津に到着する。奥津には前年の春にも訪れており、その時に仙台藩の穀役人であった斑目友之輔は前年の一二月に役目を終え、開成丸到着時には国元に帰っていた。その代わりに穀役人となったのが菊地七郎左衛門である。開成丸が奥津に到着すると、奥津穀宿の浦部孫左衛門が対応している。開成丸到着は菊地七郎左衛門のもとにも伝えられ、浦部の家に開成丸の乗員が行くと、菊地も訪ねてきている。一〇日には、前回の奥津滞在時に会った人々が開成

丸に来て、にぎやかであった。また同日には浦部家の家に行き、入浴している。

一一日には、菊地七郎左衛門と浦部孫左衛門が開成丸に来て、酒食をともにしている。一二日には、名主の日置又五郎の宿に行き、物語をしている。奥津滞在中には日置睡鴎という人物ともよく交流しているが、同姓の又五郎と睡鴎の関係は不明である。同一人物の可能性もあるが、親類という可能性もある。一三日には、穀宿浦部孫左衛門から追手の風が吹くと知らされて、急遽出発の準備をすることになった。奥津にある仙台藩陣屋に行き、菊地七郎左衛門に出発する旨を伝え、奥津を出発している。

いったん出発したものの、悪天候のため翌一四日には奥津に戻っている。一五日には、菊地七郎左衛門と浦部孫左衛門両名の他に、奥津に近い砂子浦の穀宿の源蔵[25]が海老や九年母を開成丸に持参している。この源蔵は前年夏に村田善次郎と交流があった。そのため源蔵は開成丸に手土産を持参したのであり、ここで酒食を共にしている。一六日以降は、主に菊地・浦部・日置睡鴎等と交流しているが、菊地の配下の足軽権蔵も登場している。彼らと一緒に、主に土地の食材を使った料理を食べている。また一九日には船子らの企画で会席料理が船乗りたちに振舞われている。二二日は悪天候のため、開成丸が大きく揺られているが、その後は大きな出来事もなく、二五日に奥津を出発している。

奥津では仙台藩穀役人をはじめ、穀宿や足軽、さらには名主の日置氏との交流が確認された。奥津の穀宿の浦部孫左衛門とは日常的な交流があり、浦部家に入浴や食事のために訪れるなど、穀宿の家が宿泊や休息の場所として機能していた。また砂子浜の穀宿の源蔵は、前年に村田善次郎と交流するなど、仙台藩関係者と穀宿との密接な関係を窺わせる。

また奥津村の名主とされる日置又五郎との交流も注目される。いわゆる村役人層に位置する日置氏とはどのような関係性があったのか詳細は不明である。しかしながら、穀宿の浦部孫左衛門家も、時代によって奥津村の名主[26]を務めているなど、開成丸の乗員が交流した浦部と日置は、地域社会の中でも上層部に位置する人物であった。浦部にしろ、日置にしろ、開成丸側と交流を持つことは、何かしらの利点があったことが想定されるが、加えて湊の構成員とは異なる来訪者への対応という意味合いがあったとも推察される。

おわりに

以上、「ふなわたり日記」をもとに、開成丸の下田・浦賀・奥津における滞在時の動向を検討した。浦賀・奥津に共通するが、停泊中は穀宿のもとに行き、入浴や食事をとるなど、滞在中の生活の拠点が穀宿の家を中心に行われていることが指摘できるだろう。また下田においても、穀宿の案内で温泉に行くなど、穀宿との交流が確認された。仙台藩廻米船が穀宿を船宿として利用していることはこれまでも知られていたが、それと同様に開成丸も穀宿を船宿のように利用していたのである。加えて奥津の出発時に穀宿が風の状況を知らせるなど、廻船の運航に関して、湊や航路に明るい穀宿の意見は重要なものであったのだろう。

このような穀宿との交流に関係して、開成丸と仙台藩の運航管理に関する事項について整理したい。下田・浦賀・奥津の中で仙台藩から役人が派遣されていたのは奥津だけであった。奥津では、開成丸到着後に穀役人が穀宿とともに対応している。「ふなわたり日記」の記述内容は、簡潔なものであるが、開成丸の到着について、穀役人と穀宿は把握しており、滞在中にたびたび交流を行っている。また一回目の滞在時には、奥津を出発する前日の二月一三日に出発することを穀役人に告げている。二回目の滞在の出発時の二月二五日には、慌ただしく出発しているが、穀役人や穀宿が開成丸の出発について把握していなかった訳ではないだろう。一方、穀役人がいない下田と浦賀においては、滞在の初期段階で穀宿が登場している。それぞれの滞在時には穀宿が周辺の案内や酒食の提供などをしており、開成丸の動向が把握されていた。

以上のことから、滞在中の開成丸の動向を穀役人と穀宿は把握していたと考えられよう。また開成丸の滞在中の動向とは別に考える必要はあるが、他の仙台藩廻船も湊滞在時に穀役人や穀宿によって、その動静の把握がされていたのだろう。

なお、開成丸の予定外の下田到着について、網代にいる仙台藩役人を通じて、国元や江戸屋敷に連絡していたが、情報の時間差はあるとしても、開成丸の運航状況が仙台藩の国元と江戸屋敷において把握できるようになっていたと考えられ

よう。現に江戸屋敷から知誠への音信が浦賀の穀宿にもとに届けられているなど、ある程度運航状況を把握できていたと推察される。

このように開成丸という新規事業の中でも、仙台藩による運航管理が行われていたと言えよう。他方、幕府による運航管理として、浦賀到着時の浦賀奉行所による船改め、そして予定外の下田滞在の際においても、浦賀奉行配下の同心による確認が行われていた。また浦賀では、幕府所有の箱館丸と朝陽丸の関係者との交流も確認されたが、これはお互いの艦船の見学や、意見交換などの意味合いが強い。幕末期において、このような幕府関係者との交流が行われていたことは注目される。

一方、仙台藩による運航管理とは表裏一体ではあるが、穀役人や穀宿、足軽との打ち解けた関係性も確認できた。それは、酒食を共にする、その土地特有の食材の提供、地域の名所の案内、年始の挨拶などである。これらを書き留めた村田善次郎をはじめとする開成丸の乗員にとって、思うように進まない開成丸の航海の憂さを晴らす楽しい出来事でもあったのだろう。開成丸の乗員に対する穀宿等による饗応についても村田は好意的に捉えているようである。

村田は、開成丸の航海が思い通りに進まない苛立ち、そして荒波や悪天候による転覆に対する恐怖などを、包み隠さず「ふなわたり日記」の中で表現している。開成丸の航海は想像以上に過酷なものだったとみられるが、それを支える上で湊の滞在中に人々と交流し、英気を養うことは重要なことであったのだろう。

注

（1）「ふなわたり日記」【史料31】。

（2）拙稿「仙台藩廻米体制と穀宿」（『地方史研究』四〇七号、二〇二〇年）。

（3）拙稿「常陸国平潟湊の仙台藩穀宿と米拝借運動」（『関東近世史研究』八三号、二〇一九年）。

（4）斎藤善之「仙台藩御穀船の運航管理と統制　東北地域における領主的流通機構の特質」（斎藤善之・菊池勇夫編『講座東北の歴史　第四巻　交流と環境』、清文堂出版、二〇一二年）。

（5）『仙台市史　通史編五　近世三』（仙台市、二〇〇四年）六〇一頁掲載の「江戸時代後期における仙台藩の職制」。史料上、「穀役人」と「穀役」と表記が若干違う場合があるが、

本稿では統一して「穀役人」と表記する。

（6）前掲拙稿「仙台藩廻米体制と穀宿」。

（7）斎藤善之編『陸奥国石巻湊・御穀船船主武山六右衛門家文書目録』（二〇〇六年）。

（8）「書上留帳（文政二年～文政十二年、竪帳くずれ）」（武山家文書一二四二―一三、前掲『陸奥国石巻湊・御穀船船主武山六右衛門家文書目録』六二九～六三〇頁）。

（9）「書上留帳（文政二年～文政十四年、竪帳くずれ）」（武山家文書一二四三―二、前掲『陸奥国石巻湊・御穀船船主武山六右衛門家文書目録』六三一～六三二頁）、「書上留帳（文政十三年カ、竪帳くずれ）」（武山家文書一二四六―六、前掲『陸奥国石巻湊・御穀船船主武山六右衛門家文書目録』六四一～六四二頁）。

（10）『茨城県史　近世編』（一九八五年）二一三頁。

（11）『龍ケ崎市史　近世史料編一』（一九九〇年）一六頁。

（12）前掲拙稿「仙台藩廻米体制と穀宿」。

（13）前掲拙稿「仙台藩廻米体制と穀宿」。

（14）下田の仙台藩穀宿肥田喜左衛門が韮山代官所からの問い合わせに回答した内容によれば、下田の仙台藩陣屋は火事で廃止となっている。これによってそれまで派遣されていた仙台藩の下田穀役人の派遣は停止されたものとみられる。詳しくは前掲拙稿「仙台藩廻米体制と穀宿」の中で触れている。

（15）ふなわたり日記では「慶蔵」とあるが、幕府の洋式帆船である鳳凰丸の乗組掛として名前が確認される浦賀奉行所役人の福西啓蔵と同一人物だろう。神谷大介「西洋軍事技術の担い手の形成過程と任用形態」（『幕末期軍事技術の基盤形成―砲術・海軍・地域―』、岩田書院、二〇一三年）によれば、福西は幕府所有の洋式帆船鳳凰丸の船内の火の番や船印の差配をしていたとされる。

（16）福西と平井は、嘉永六年（一八五三）のペリー来航時の浦賀奉行所役人であったことが確認されている。「浦賀史料　第三（嘉永六丑年六月アメリカ船四艘渡来、同年九月御褒美之控）」（『新横須賀市史　資料編　近世二』、二〇〇五年、二五四～二八一頁）。

（17）肥田実『肥田実著作集　幕末開港の町下田』（下田開国博物館、二〇〇七年）によれば、肥田家が世襲で仙台藩穀宿を務めていたとされている。

（18）国立国会図書館所蔵「諸問屋名前帳」によれば、小網町一丁目の家持で、下り米問屋、河岸八町米仲買、関東米穀三組問屋、雑穀為登組に所属する商人であった（田中康夫『江戸商家・商人名データ総覧　第五巻』、柊風舎、二〇一〇年、六〇九～六一一頁）。

(19) 浦賀に艦船の修復場が設置され、本格的に修復された初めての艦船が朝陽丸であった。これについては、神谷大介「幕末期における幕府艦船運用と寄港地整備 ― 相州浦賀湊を事例に ―」(『地方史研究』三三二号、二〇〇八年、のちに「幕府艦船の運用と「軍港」の整備過程」と改題されて前掲『幕末期軍事技術の基盤形成 ― 砲術・海軍・地域 ―』に所収)で詳述されている。

(20) 前掲拙稿「仙台藩廻米体制と穀宿」。なお、加藤晴美・千鳥絵里「浦賀湊の景観及び機能とその変容過程 ― 西浦賀を中心として ―」(『歴史地理学調査報告』一二号、二〇〇六年)によれば、松下吉兵衛は盛岡藩の穀宿も務めていた。

(21) 前掲『陸奥国石巻湊・御穀船船主武山六右衛門家文書目録』に収録される紀伊国屋伊兵衛関係文書(武山家文書七一一～七二二、同書二五四～二五八頁)。

(22) 前掲 加藤晴美・千鳥絵里「浦賀湊の景観及び機能とその変容過程 ― 西浦賀を中心として ―」。

(23) 『日本歴史地名大系第一二巻 千葉県の地名』(平凡社、一九九六年)八九四頁。

(24) 前掲拙稿「常陸国平潟湊の仙台藩穀宿と米拝借運動」の中で、穀宿浦部家が仙台藩廻米船の破船処理に関わっていたことなどを紹介した。また菅谷祐輔「上総奥津における仙台藩穀宿関係廻状について」(『千葉経済論叢』六四号、二〇二一年)によって、穀宿として浦部家が出した廻状についての史料紹介が行われている。

(25) 砂子浦穀宿の源蔵は、享和三年の仙台藩廻米船破船に関する柴代家文書「御用留」(千葉県立文書館所蔵柴代家文書ア四六八)の中でもその名が確認される。

(26) 前掲菅谷祐輔「上総奥津における仙台藩穀宿関係廻状について」。

幕末仙台藩政治社会史のなかの開成丸——「海洋国家」の夢への航跡

佐藤大介

はじめに

本稿では、幕末の仙台藩で建艦された洋式帆船・開成丸について、次の点を検討する。すなわち、①建艦事業の責任者であった、仙台藩校・養賢堂の学頭・大槻習斎（格次一八一一～六五）による艦隊構想の検討、②新史料（未公刊史料）を中心に、開成丸の運用実態を明らかにする。これを通じて、開成丸関連の史実について、幕末仙台藩の政治社会史の文脈から意義を考える。

開成丸は、仙台藩が安政三年（一八五六）一月に建艦を開始し、安政四年（一八五七）一一月に完成した洋式艦船である[1]。スクーナー型と呼ばれる、メインマスト二本を持つ帆船であった。

建艦の背景となった仙台藩の政治過程については、一九七〇年代の難波信雄氏による論考が、現時点でも唯一の研究成果である[2]。すなわち、嘉永二年（一八四九）一二月に江戸幕府から出された海防強化令に対応する、仙台藩による海防強化策の成果の一つという位置づけである。仙台藩主・伊達慶邦は嘉永三年（一八五〇）以降、蘭学者の登用や西洋砲術の普及を計った。安政二年（一八五五）四月、江戸幕府から蝦夷地警護を命じられた直後、慶邦は奉行・芝多対馬以下の役人や大槻習斎を、大銃（大砲）及び軍艦製造係に任命。「養賢堂派」とも称される人々により、軍備優先が政策基調となった安政期藩政の中で、開成丸が完成した。一方で、蔵元商人を務めた近江商人・中井家によって一年あたり二艘で一万両と試算された建艦費用などの資金確保は不調に終わった。中井家による藩札発行、江戸買米や特産品専売の強化は、領民の疲弊を背景に藩内での政争をもたらし、万延元年

（一八六〇）閏三月に奉行の芝多が罷免され、仙台藩の安政改革は頓挫したとされる。明記はされていないが、一艘にとどまった建艦は、改革を挫折させた領民たちによる運動の成果として位置づけらているとも見られる。その一方で、史料的制約もあってのことだが、当事者の建艦事業に込めた意識や、上述した仙台藩の政治・社会状況をも踏まえた開成丸の運用実態については考察されていない。難波論文の後は、政治史や社会史の文脈から、開成丸が取り上げられることはなかった。

一方で、開成丸と、それに関わった人々に関する史料と史実の掘り起こしが、産業史や科学史、郷土史の立場から続けられてきた。開成丸の建艦棟梁となった江戸の陶工・三浦乾也の足跡を明らかにした益井邦男[3]、伊達家文書や、戦前に刊行された『仙台叢書』所収史料から建艦と航海の基本的な事実を明らかにした荒井聡[4]、仙台藩天文史の解明という観点から、建艦と運用、関係した学者たちの足跡を明らかにした黒須潔、藩校・養賢堂で建艦を担当した小野寺鳳谷の足跡をまとめた黒川典雄[5]、運行に関わる触書を照会した大西恵美子[6]が挙げられる。黒須は自らのウェブサイト[7]を通じて、開成丸に関する調査成果や関連史料の情報を共有しており、本書はその成果に大きく依拠している。二〇〇〇年代後半からは、開成丸および関係史料の所蔵機関によるウェブ公開が進展している。これらの成果を通じて、一次史料にもとづき再検討することが可能な状況になっている。

また、難波信雄[8]や栗原伸一郎による幕末仙台藩の自己認識の解明[9]や、竹ヶ原康佑が明らかにした藩域を超えた海防体制の構想[10]など、二〇一〇年代において幕末仙台藩の政治史研究が進展している。開成丸の建艦についても、領内の諸勢力との関係に加え、仙台藩の政治的立場や、社会状況への位置づけという観点から考察する必要があるだろう。

以下、本書に所収した史料の検討を通じて、冒頭の課題に取り組んでいくこととしたい。

一　大槻習斎の海防構想と意識

開成丸建艦の、実務面での総指揮を執った大槻習斎は、文化年間に養賢堂の学制および財政基盤の改革を推進した大槻平泉（一七七三～一八五〇）の長男である。江戸の昌平黌で

古賀侗庵に学び、父の死後、嘉永三年（一八五〇）六月から学頭に就任。蘭学局を設置し、洋学科にロシア語を加えて西洋知識の習得環境を整備していた[11]。

習斎が、開成丸建造に関わると見られる「大銃及び軍艦製造係」に任ぜられたのは、前述したように安政二年（一八五五）四月である。一方で、大槻家に伝来した記録からは、習斎がペリー来航の直後より、海防策と経済政策を両立する形で、仙台藩による艦隊編成の推進を主張する意見書を記していた事がわかる。本書所収の史料から、具体的に見ていきたい。なお、引用は［史料○］の形で示す。

（一）艦隊による海防、そこからの改革

［史料1］は、二条目にある「このたびの公儀（江戸幕府）からの新令による兵制改革は、第一に船の問題である」といった趣旨の内容から、嘉永六年（一八五三）九月の大藩建造解禁令を受け、翌七年二月に執筆されたものだと考えられる。

冒頭の第一条目では、軍船が「皇国」を警備するための海防において、第一に位置づけられるべきであり、その配備によって「海内の疲弊」から立ち直ることが出来ると主張している。大槻習斎が諸外国との比較の中で日本を「皇国」だと位置づけていることがわかる。

第三条目では、西洋の国々は「船制」を通じて「国運」が開け、政体も一新しているということを、ロシア、イギリス、プロシア（墨夷）、オランダの名前を挙げて主張している。「船制」とはこれらの国々が推し進めていた、艦隊を基軸として展開した対外関係のありかた全体を含むものであろう。特にロシアについては、「酷寒不毛の地」でありながら、衣食や財力を十分備えた世界の強国（「世界之富強」）となっていると例示している。さらに第四条目では、仙台藩は「東海の際」にある「大藩」であり、長大な海岸線を有するため、砲台を構築（台場の建設）しても防御するのは難しいとしていた。「東海の大藩」という点は、仙台藩の自己認識にも関わる問題であるので後述する。

仙台藩は、一八世紀中頃からのロシアの太平洋進出に仙台藩は直接対峙する経験を重ねていた。文化五年（一八〇八）に長崎に来航したレザノフ使節団は、石巻の若宮丸漂流民を四名を同行しており、彼らへの調査記録「環海異聞」は、ロ

シアやヨーロッパに関する直接の情報をもたらしていた。日本を、皇帝が支配する「帝国」と見なす認識もその一つであった[12]。文化三年（一八〇六）から翌年にかけての、蝦夷地でのロシアとの衝突（「文化露寇」）後、仙台藩は幕府の名で蝦夷地警護に当たっている。習斎の父・平泉は、文化六年のロシア船来襲を念頭に、平時は捕鯨船として乗員を訓練しつつ、西洋式の火砲の研究を実施した上で、それらを積載した艦船での海防を主張している[13]。その後、平泉からその門人・小野寺丹元（一八〇〇～七六）へとロシア学の系譜が続いていた[14]。前述した通り、大槻習斎は養賢堂にロシア学科を設置したが、中心となっていたのは丹元であった。安政三年（一八五六）、習斎は丹元を蘭学局頭取に登用している。

もちろん仙台藩関係者のみならず、一九世紀前半の知識人層の海防論はロシアを念頭に置いたものであった。習斎が師事した、幕府昌平坂学問所儒者の古賀侗庵もその一人であった[15]。攘夷と、その対極としての積極貿易のいずれにも与せず、船舶改良による海戦への対応強化、武士と百姓（「上下」）が心を一つにし、欧州諸国との対立を避けつつ交易相手は選択するといった主張である。中国の古典（経書）解釈を踏まえ、徳川家による政治体制を前提に、時勢・時宜に応じた政策を構想し、為政者に改革の施行を求める「変通」の論理に基づくものだとされる。

習斎自身の海防論や、主張を生み出した背景についてはさらなる検討が必要であろう。一方で、習斎の意見書は簡素なものではあるが、建艦を通じた仙台藩の政治改革が視野に入っていると見られる点で、侗庵の論との共通点が見いだせるのかも知れない。日本を「皇国」と見なす認識、ロシアと同様、寒冷の地に広大な所領を持つという共通点を見いだし、艦隊を基軸とする海上交易によって振興できるという、「海洋国家」としての仙台藩という将来像を示したのであった。

（二）領内の事情――武士の疲弊と「民間」への依存

［史料1］の四条目を改めて読むと、広大な海岸線を砲台で防御することの困難と共に、藩が主導して建艦を行えば、追って藩の支出を待たずとも、船を作って献上する者などいくらでも現れる、という趣旨のことが述べられている。

仙台藩では嘉永三年六月に、伊具郡金山（宮城県丸森町）

を領する重臣・中島虎之助恒康を海岸方に命じ、西洋砲術の導入を軸に、文化の蝦夷地警護を念頭に他領の警護も視野に入れた海岸防備が進められていた[16]。習斎の建艦構想は、この動きへの否定的な見解にも見えるが、上述した大槻平泉や古賀侗庵ら、この時期の海防論一般としては、砲台建設と建艦はむしろ相互補完的に論じられている。砲台構築の困難の指摘は、地形の問題とともに、この時期の藩内の武士層の事情を背景にしたものだと考えられる。

沿岸防備を巡る中島虎之助の意見書では、天保八年（一八三七）の大凶作に際し、武士層が生存の危機に瀕し、その後も困窮して必要な武備が出来なくなっている旨の問題が指摘されていた。仙台藩士・別所万右衛門が残した天保飢饉時の記録にも、食糧を求めてさまよい歩く者がいたことが記されている[17]。天保の飢饉は、武士がささえる海防体制を築く上で深刻な影響を与えていた。習斎はこれを踏まえ、武士のみで海防を担うことの限界性を認識していたとも考えられる。

「船を献上する者」とは、武士のみならず、領民も想定されていたとと考えられる。それでは、民間が建艦に参入してくるということがあり得たのだろうか。少ない事例ではあるが、この時期の仙台藩領には、沿岸へのアメリカ捕鯨船の接近や対外情報に基づき、海防への参加を志向する地域有力者が現れていた。北上川河口の海村・桃生郡名振浜（宮城県石巻市）の永沼丈作は、水産物販売や廻船経営で得た利益を元に、藩への献金を通じて武士身分を獲得。天保八年（一八三七）には藩の国産方に、大砲を積み込んだ捕鯨の実施を献策、同十四年には大小銃一四丁を藩に献納していた。同じく桃生郡大須浜の阿部源左衛門も、永沼家に対抗する形で捕鯨事業に取り組んでいた[18]。一八世紀末以降、仙台藩領での社会事業においては、地域有力者からの献金が有力な財源となっていた[19]。その資金に依存し、藩が先導した建艦の技術を共有することで艦船を増備するという発想は、根拠のあるものだったと考えられる。

このことをふまえれば、習斎がこれに続いて、建艦によって領内の経済的な利益をもたらすことを主張する背景も理解しやすい。六条目では、建艦の拠点として想定していたと思われる塩竈（宮城県塩竈市）や石巻（宮城県石巻市）、気仙沼（宮城県気仙沼）など領内の港町に、以前より一〇倍もの金と米穀が流通して繁栄がもたらされるとする。七条目で

は、薬品（薬種）など他領からの仕入品の価格が下がること、八条目では領内の特産品（御国産）の開発が進むとしていた。

関連して、嘉永七年（一八五四）九月には、養賢堂が塩竈などしかるべき場所で外輪船（「車輪船」）を建造することを願い出ている［史料5］。一関田村家当主・田村右京大夫邦行と見られる人物が入手した「雛形」に基づくもので、海防の備えはもちろん、河川の運航に際しても風雨の影響がなくなり、迅速で飛ぶように往来が便利になること。平時（「平日」）にはには北上川など領内の河川で、仙台藩の年貢米（「御穀」）などの輸送に用いることで、藩はもちろん、領内の人々全体の利益（「民間之潤助」）となると主張している。帆船である開成丸の建造以前から、蒸気船の導入が前提とされていたこともわかる。

軍艦を商船として利用するという内容は、一八世紀以降の日本の領主や豪商による海防への意見書に多く見られるという[20]。習斎の見解もそのような事例の一つではあろう。一方で、海防体制の充実のためには藩領内の地域有力者に深く依存する必要があり、その人々が経済的な利益を得ることを不可欠の前提としたことは、この時期の仙台藩固有の政治社会状況をふまえたものであった。

（三）「東方の大藩」――大槻習斎の仙台藩認識

意見書の中では、習斎が仙台藩をどのような存在として位置づけようとしたのかをうかがえる文言が出てくる。［史料1］四条目では、仙台藩を東海の際にある東方の大藩として位置づけ、建艦を進めることで、「東海の御威風」を海外に示すことになる、と主張していた。

仙台藩の自己認識については、幕末政治史研究との関係で近年研究が大きく進んでいる。東方の大藩、奥州藤原氏を継ぐ「鎮守府将軍」として奥羽二州を率いる立場にある、との言説が散見され、藩内の諸勢力がそれに基づく政治行動を取っていたという[21]。習斎の意見書にも、そのような意識が共有されていたことがわかる。また開成丸の就航後となるが、安政五年（一八五八）夏の小野寺鳳谷による叙述［史料23］の冒頭にも、建艦事業の根拠として、仙台藩が「大東洋」に面する「北門の衡」、すなわち北にあって均衡を保つ役割であるという自己認識が示されている。養賢堂を中心とする知

識人層の間に、「東方の大藩」としての役割意識が共有され、建艦はそれを実現する核としてとらえられていたのである。

この点について、［史料4］の五条目では、さらに具体的な内容が見られる。開成丸に先立って、建艦や操船技術を習得することを目的としたとみられるバッテラ船、日新丸と天開丸の建造が進められていた。その帆の印として、習斎は幕府が定めた日本船の旗印である日の丸に加え、東方の守護神である青竜が天に昇る姿から取った鱗型の印を付けることを提案している。六条目では新造船のみならず藩の穀船にも付すことを願い出ていた。この時点では、藩上層部から伊達家の従来の旗印である九曜紋以外は不要として却下されている。しかし安政二年（一八五五）一〇月に、藩領沿岸の村々に対して仙台藩の洋式船を異国船と誤認しないように出された触書［史料11］には、帆の上端部に鱗をかたどった青い目印が付された帆の図が、養賢堂蘭学局から示されていた。さらに、明治年間の写本であるが、開成丸も青い帆印を付していたことを示唆する絵画が残されている[22]。習斎の提案は実現していたのである。

習斎にとって、青竜の鱗の印は、「東方の守護者」としての仙台藩の象徴であった。それを洋式船のみならず、和船が中心であった仙台藩の穀船にも掲げることで、藩領すべての人々が一致結束して、海防・海運から現状改革を推し進めるという姿を示そうとしたのである。

（四）開成丸の建艦をめぐって

安政四年（一八五七）に進水した開成丸の建艦過程については、本書の黒須論文で述べられており、詳細はそちらに譲るが、いくつかの点を指摘しておきたい。

①　大槻習斎の「海軍」構想

従来の研究でも指摘されていた、さらなる艦船増備の計画と関連すると考えられるのが［史料2］である。蒸気船三艘を含む一三艘の建艦計画が確認出来る。これについては、現時点では大船建造解禁に対する諸藩の届書がなされた嘉永六年（一八五三）一二月以降と推定している。幕府（「公辺」）への届出の下書という趣旨の記述があるが、実際に提出されたかは不明である。いずれにせよ習斎による仙台藩「海軍」構想の一端をうかがうことができる。幕末の西国諸藩が、欧米諸国からの購入で調達した隻数[23]を大きく上回っており、習

斎の危機意識や、「東方の大藩」としての仙台藩の潜在的な力量への期待もうかがうことができる。

表に、建造が構想された一三隻と、実際に建造された開成丸の各部寸法を示した。後に開成丸を建造した技術を持つ仙台藩であれば、条件が揃えば、艦隊が実現する可能性もあったのだろうか。

② 開成丸造艦を巡る政治状況

乗組員については、［史料3］から、塩竈周辺の漁夫（漁師）を徴集するとされており、実際にそのようになったと考えられる。本格的な艦船運用に向け、日新丸と天開丸での調練が繰り返されていたとみられる。［史料6］によれば、両船の完成は嘉永七年（一八五四）九月とみられる。その一か月後、一〇月二八日に塩釜浦での調練を観覧するよう藩重臣層に願い出ている［史料9］。

翌安政二年（一八五五）四月七日には、名取郡閖上での調練を藩主・伊達慶邦が観覧していた［史料10］。翌八日、奉行の芝多対馬や大槻習斎に「大銃および軍艦製造用係」を命じたのは、調練の結果を踏まえてのことでもあろう。

日新丸と天開丸については、不調に終わったとの見解もあるが[24]、順調な調練の様子をふまえれば、開成丸の船員養成にとっては確かな礎となっていたといえる。

この直前の三月二七日、仙台藩は幕府から蝦夷地警護を命じられる[25]。四月一〇日には、日本沿岸の測量に当たっていたアメリカ海軍のヴィンセンス号が石巻に来航した[26]。仙台藩は蝦夷地で、また自領の沿岸で欧米諸国と直接対峙することになり、まさに「東方の守護者」としての役割が求められる状況が訪れた。開成丸の建造はこの中で推し進められたのである。

③ 技術導入の背景――安政地震との関係

開成丸建艦開始までの経過を確認すると、大槻習斎の命を受けた養賢堂兵学主任の小野寺鳳谷は、安政二年（一八五五）冬、気仙沼の船大工・太七をともなって伊豆を訪問し、洋式帆船ヘダ号の造船を実見（［史料23］・［史料29］）。浦賀や江戸でも幕府の洋式船を視察した。その後、江戸にて陶工出身の技術者・三浦乾也（陶蔵）と出会い、安政三年（一八五六）一月に仙台に招聘。同年一月二八日の造艦指令を受け、寒風沢島での建艦が始まったのである［史料23］。

造艦の経過については本書の黒須論文に譲るが、造艦技術

車径（外輪直径）	表檣（フォアマスト）	艦檣（メインマスト）	艫帆柱（ミズンマスト）	砲門
	14 間 2 尺 4 寸（25.9m）	14 間 1 尺 6 寸（25.7m）		
	16 間 3 尺（29.3m）	17 間 3 尺（31.5m）		6 か所
	19 間 3 尺（35.1m）	21 間 3 尺 6 寸（38.9m）	17 間 4 尺（31.8m）	8 か所
	18 間 1 尺 8 寸（32.9m）	20 間 5 尺 4 寸（37.6m）	17 間（30.6m）	8 ヶ所
	22 間 4 尺 5 寸（40.95m）	25 間 1 尺 2 寸（45.36m）	20 間 1 尺 9 寸（36.54m）	14 ヶ所
	24 間 1 尺 2 寸（43.56m）	27 間（48m）	21 間 1 尺 8 寸（38.9m）	16 ヶ所
	27 間 5 尺 6 寸（50.3m）	31 間 6 寸（57.6m）	25 間（45m）	20 ヶ所
	36 間 3 尺（65.7m）	36 間（64.8m）	29 間 3 尺（53.1m）	66 か所
1 間 3 尺（2.7m）	13 間 3 尺（24.3m）	13 間 2 尺 8 寸（24.2m）	11 間 2 尺（20.4m）	6 ヶ所
	14 間 4 尺 2 寸（26.5m）	16 間 3 寸（29.7m）	13 間（23.4m）	6 ヶ所
2 間 1 尺□□（3.9m）	14 間 4 勺 2 寸（26.5m）	16 間 1 寸（29.1m）	13 間 4 尺 2 寸（16.9m）	10 ヶ所
	10 丈 5 寸（30.2m）	10 丈 5 尺（31.5m）		

の習得や技術者の移転については、嘉永七年から日本列島を襲った大地震との関係がうかがえる。伊豆のヘダ号は、嘉永七年一一月四日に起こった、いわゆる安政東海地震で被災したロシア船ディアナ号に代わる船舶で、その建造をきっかけに、日本各地に洋式船の建造技術が伝播したことが知られる。また三浦の足跡に触れた開成丸建艦碑［史料18］からは、小野寺と三浦の出会いが、安政二年一〇月二日に起こった安政江戸地震後の混乱の中でのことだったと記される。三浦の仙台移転は、江戸からの避難という目的もあったのかも知れない。

むろん、天災がなくとも、西洋知識と技術者が求められる状況の中、いずれは仙台藩にも建艦の技術と知識はもたらされただろう。とはいえ、そのような政治社会状況の中で偶然起こった大地震が、その時期をより早めた、ということにはなるのかもしれない。いずれ、日本の近代移行期に江戸や大坂といった大都市を襲った大地震にともなう、人や技術、知識の移動の実態について再検討する必要を感じる。

④　開成丸の進水をめぐって

開成丸の進水は、建艦から一年後の安政四年（一八五七）

（表）　大槻習斎による建艦届け下書き

番号	（船級）	隻数	水際長さ（喫水線）	上口（甲板長）	最広所（甲板最大幅）	惣高（船高）
1	スクネール造 （スクーナー）	2	12 間（21.6m）	14 間（25.2m）	3 間 4 尺 6 寸（6.2m）	1 丈 3 尺（3.9m）
2	フレガット造 （フリゲート）	2	15 間（27m）	17 間（30.6m）	4 間 1 尺（7.38m）	3 間 3 尺（5.94m）
3	コルヘット （コルベット）	1	18 間（32.4m）	20 間 1 尺 8 寸（36.5m）	5 間 1 尺（9.3m）	4 間 1 尺 2 寸（7.6m）
4	フレガット造	1	18 間（32.4m）	20 間 2 尺 4 寸（36.72m）	5 間（9m）	4 間 1 尺 2 寸（7.56m）
5	コルヘット造	1	21 間（37.8m）	23 間 4 尺（42.6m）	6 間 1 尺 1 寸（11.1m）	5 間 4 寸 5 分（10.35m）
6	フレガット造	1	24 間（43.2m）	15 間 2 尺 5 寸（27.8m）	6 間（10.8m）	4 間 2 尺（7.8m）
7	フレガット造	1	27 間（48m）	28 間 3 尺 6 寸（51.5m）	6 間 4 尺 5 寸（12.15m）	5 間 1 尺 3 寸（9.4m）
8	リニー造（砲列艦）	1	24 間（43.2m）	33 間 5 尺（60.9m）	8 間 5 尺（15.9m）	7 間 1 尺 5 寸（42.6m）
9	蒸気フレガット造 車仕掛	1	15 間（27m）	16 間（28.8m）	3 間 1 尺 6 寸（5.9m）	6 間（10.8m）
10	蒸気フレガット造 造稔仕掛	1	18 間（32.4m）	19 間（34.2m）	3 間 5 尺 5 寸（7.1m）	3 間（5.4m）
11	蒸気フレガット造 車仕掛	1	21 間（37.8m）	22 間 1 尺（39.9m）	4 間 3 尺 5 寸（8.25m）	3 間 3 尺 6 寸（6.5m）
	【参考】開成丸		9 丈（27m）	11 丈（33m）	2 丈 5 尺（7.5m）	17 丈 3 尺（5.19m）

（典拠）　1 ～ 11 「大槻習斎洋艦建造書類」（早稲田大学）　開成丸　荒井 1993 所収の「開成丸調練帰帆図」寸法より。「惣高」は同図「内法」数値の総計。
（備考）　メートル換算は 1 尺＝ 30 センチで行った目安の数値である

六月二八日であった。同年一二月に寒風沢近海で最初の航海。翌年二月晦日には、伊達慶邦が観覧する中で奉行の芝多対馬らを乗せた試験航海が実施［史料23］。さらに一二月から翌年一月にかけて、仙台領北部沿岸での試験航海が実施されている［史料23、29］。

その様子を記した「開成丸航海日記」［史料29］の冒頭には、乗組員の身分と名前が明記されている。また養賢堂関係者も、大槻礼助（平泉）のような代々伊達家の直臣だったもの、江戸の陶工出身で技術者として登用され惣棟梁となった三浦陶蔵（乾也）のような出自の違いがあった。また三浦を招聘した小野寺鳳谷（謙治）は、自らの身分を伊達家重臣の茂庭家の家臣として、つまり陪臣（伊達家家臣の家臣）として記している。また苗字が記載されていない者たちは、組士や松島の水主、さらに漁夫たちだと考えられる。

西洋軍制の導入に際して、武士による軍団の再編や、銃砲を足軽の武器として低く見なす意識からの摩擦が生じたことが指摘されている。開成丸の建艦にあたっても、「開成丸建艦碑」や、寒風沢島の建艦施設とみられる「雨舎」[28]が倒壊した際の、人心に障らないようにすべしという大槻習斎の反応

［史料16］から、批判的な勢力の存在がうかがえる。

開成丸を建造し運用する組織は、学者や陪臣、漁夫などの多様な属性を持つ人々によって組織されていた。従来の身分制に基づく仙台藩の武士団とは別に、新しい技術と知識に基づく艦船が併存することになった[29]。建艦を通じた改革を志向していた習斎の構想が現実のものとなるには、まだ遠い道のりがあった。

黒須論文で指摘されるように、天測に基づく運行を主張する天文学者たちと、陸地の目印を頼りとする水主たちとの意見の衝突もあった。その一方で、乗組員は操船技術を着実に身につけていたようであり、安政六年一月の藩役人による近海航海の見分［史料28］では、江戸への航海も可能だと評価を得るまでに至ったのである。

⑤　船名

開成丸の船名［史料17］が、中国の古典「易経」の一節、「開物成務」に由来することはすでに知られている。人知・事物を開発して事業を成就するという意味は、父・平泉の学制改革以来、実学を重視したとされる養賢堂の思想[30]を体現したものだともいえる。

ところで習斎は、学問を藩領の殖産興業に生かすことを意図して養賢堂に「開物方」を設置し、製塩や織物、陶器生産などの開発につとめたとされている[31]。「開物方」に関しては、文久元年（一八六一）からの本吉郡内ノ脇（宮城県気仙沼市）での塩田開発が「養賢堂開物方」によって実施されていた[32]。「開物方」の設置された時期が、さらにさかのぼるかどうかは明らかに出来ないが、もちろん「開物方」の名称もまた、開成丸の名称と同様、「開物成務」に由来することは明らかである。

習斎が試作船の帆印に、人心が一致した「東方の守護者」としての仙台藩という意味を込めたことは先に述べた。新たに建造した洋式帆船の名前には、その仙台藩が、養賢堂を拠点として生み出される知識や技術に基づいて繁栄していくという理想像を現実のものとする期待を込めたのであろう。

2　開成丸の江戸航海―目的と意義

仙台藩領近海での航海を重ねた開成丸は、安政六年（一八五九）二月以降、江戸方面への遠路の航海を行っていった。

実施された期日については諸説あったが、小野寺鳳谷の叙述［史料23、29］や、黒須が掘り起こした、開成丸航海係を務めた仙台藩の天文学者・志村将輔恒憲（一八二五～九八）の記録［史料28］および日記［史料30］、おなじく天文学者で、軍艦測量指南役を務めた村田善次郎明哲（一八一六～七八）が記した開成丸乗船の紀行文「ふなわたり日記」［史料31］の検討によって、次のとおりだと考えられる。

① 安政六年（一八五九）二月一二日～四月二一日［史料23］

② 安政六年（一八五九）一二月～七年（一八六〇）一月（帰港日不明）［史料29］［史料31］

③ 万延元年（一八六〇）夏［史料31］に記される。帰路、犬吠埼で船体損傷。

④ 万延元年（一八六〇）一二月六日～文久元年（一八六一）三月七日［史料31］

さらに今回、仙台城下町の中心部、大町四丁目の商人・小西屋久左衛門の古文書に、開成丸による商品輸送に関する記録が確認された［史料32～40］。詳細な期日は定かではないが、以下の二回が追加される可能性がある。

⑤文久元年（一八六一）七月以降に一回

⑥文久二年（一八六二）一〇月前後に一回

夏に一回、冬に一回、という航海の周期を読み取ることも出来るだろうか。本稿では航海自体の詳細な記録が残る①と④、および⑤・⑥を対象に検討する。なお実際の航海の様子や、航海を支えたと見られる仙台藩の東回り海運の動向については、それぞれ本書の黒須論文、井上拓巳論文に譲り、航海の目的および政治社会的な背景を確認することとしたい。

（一）商船か、軍艦か――安政六年春の江戸航海

航海①については、関連の史料が早くから公刊されていたこともあり、開成丸の江戸航海の事例として言及されてきた。開成丸の建艦成就の功により、習斎に対して、養賢堂の学田米五二〇石を開成丸にて江戸へ回漕する許可が出された［史料23、29］。習斎が構想した、艦船による仙台藩再生の第一歩が踏み出されたのである。

「開成丸航海日記」には、安政六年一二月二八日条に、牡鹿郡石巻（宮城県石巻市）沖に停泊した開成丸に、湊御蔵（同前）から船で米八〇〇俵を積み入れたとある。一万二〇

○○石だったという養賢堂学田[33]の所在や農地経営の全容についての研究はないが、北上川流域に所在していた養賢堂の田地[34]から回漕されたか、藩の年貢米の中から養賢堂分として充当したものであろうか。

その後の航海も順調に進んだとして、翌年正月朔日付で、三浦陶蔵と村田善次郎から江戸航海が出願された［史料25］。一旦寒風沢へ帰港したが、二月一六日には再度の調練を命じられ［史料30］、藩役人の境野吉之助らが乗船して調練を実施し、江戸航海も問題なしとなった［史料28］。航海の経験を積み重ねた乗員と、それでも従来の技術と異なる新しい艦船に対して慎重な姿勢を示す藩役人との間で、意見の相違がみられたということになるのだろう。

さらに江戸出航の直前には、「御物置御備米」を積み込むため、開成丸の武器をすべて下ろして荷船に仕立てるという指示に対し、習斎が奉行の大町因幡に対して強く抗議していた［史料27］。軍艦から武器を降ろすのは不吉の兆しであり、幕府の海軍創設の趣旨にもそぐわない。戦艦にとっての大小砲や弾薬は、武士にとっての刀と同じで、寝食の時にも手放すべきではないこと。砲声は乗組員に勇気を与えて、「邪気悪魔」を一新するもので、外国では商船であっても弾薬を装備している、という内容であった。幕令への対応、海外の知識、さらには精神論ともいえる論理を繰り出して、藩の重臣層の翻意を促そうとしたのである。

問題となった「御物置御備米」については、仙台藩安政改革において、奉行・芝多周防が設置した新たな組織「御直行方」が所轄していた「非常粮米」のことだと考えられる[35]。それまで領内の特産品奨励に当たっていた「国産方」とは別に、「御直行」と称して「国産取立の模範」を示すため商人に払い下げ「勘定上一心面目を開く」とともに、仙台城内の北廓に倉庫を設け、「非常粮米」三〇〇〇俵を貯え、新穀への詰め替えや、米価を見つつ取引を行って価格の安定を図るというものであったという。天保飢饉後、仙台藩の中では、このような米価を調整する役割を果たす「常平倉」の設置を模索する動きも見られた[36]。仙台藩の安政改革において、それが一部ではあっても実現していたということでもあるだろう。その中心にあった奉行・芝多対馬は、自らも開成丸に乗船していた。好調な運用の状況を踏まえ、開成丸に藩御直行方の活動を担わせようとしたのであろう。

習斎は、開成丸で御直行方が所轄する米穀の輸送を行うこと自体には異論は無かったと考えられる。後述する万延二年の航海でも、御物置御備米が積み込まれていた。問題は、「軍艦」開成丸を、単なる商船として扱おうとすることであった。前述したように、習斎が構想していたのは、軍艦や艦隊を基軸とする「東方の大藩」としての仙台藩であった。その姿とは異なる形で軍艦が運用されることは、決して受け入れられなかったのである。

結果については不詳だが、小野寺鳳谷の叙述［史料23］から判断すれば、この時には養賢堂米のみの輸送になり、大砲や弾薬が船から下ろされることはなかったとも考えられる。

（二）「国民」の救済――万延元年から二年の航海

③の航海については、前述したように、開成丸の「航海測量指南頭取役」村田善次郎明哲の手による約二万三〇〇〇字の紀行文「ふなわたり日記」［史料31］が、その詳細な様子を伝えてくれる。

この航海が行われた万延元年（一八六〇）、仙台藩では重大な政変が起こっていた。開成丸の建艦など安政改革を主導していた奉行・芝多対馬が、失政と不品行を理由に、同年四月一三日に罷免されたのである。[37] 後任となった但木土佐成行（一八一一～六九）は財政の均衡や内政を重視し、軍制改革の路線は転換されたとされる。

開成丸はこの年の夏、江戸への航海を実施していた。政変との前後関係は不詳であるが、芝多の失脚という事態になっても、開成丸の運用は続けられていたことがわかる。

万延元年冬の航海では、開成丸に「御物置御備のよね（米）」が積み込まれた。「ふなわたり日記」一一月一五日条から、積載量は六五〇俵であった。物置米が、芝多が設置した直行方の管轄だったことを述べたが、失脚後の管理がどのようになっていたかはよくわからない。後述する出航の背景を踏まえれば、藩主みずからの所轄となっていた可能性もあるだろう。一一月一一日には但木土佐へ出航の報告がおこなわれ、御用を承っていた。

一二月六日の寒風沢出港後は、荒天により漂流を覚悟する状況にまで陥ったが、伊豆下田に無事入港。目的地の一つである浦賀に入港したのは同月二一日の事であった。

年が明けて一月五日の記事に、この航海の目的が記されて

いる。前年の春、仙台藩領では雨が降り続いた。さらにこの年の五月一〇日（西暦一八六〇年六月二八日）、六月一一日（同七月二八日）の「大時化雨」によって藩領の塩田が被災し、塩不足となった。「国民」は塩に飢え、秋が深まるにつれて、漬物を作るための塩の蓄えがなくなり、苦しんだ。そこで、「君」である仙台藩主・伊達慶邦から、多額の費用を出し、浦賀で塩を買い求めて国許に下し、「国民」に分かち与えるので、買い求めてくるよう命じられた。浦賀では阿波（徳島県）産の「新才田塩」を、金一両あたり八俵四分のの直段で買い取り、合計三五〇〇俵を開成丸に積み入れた。この年は諸国でも塩が不足しており、日に日に値上がりしていたが、自分（村田）は去年の内に価格を定めていた（取引をしていた）ので、この値段で買い取って積み入れた。このような要旨である。

万延元年夏の仙台領内での風水害とそれにともなう塩不足の状況については、磐井郡藤沢町（岩手県一関市）の有力な商家だった丸吉皆川家の記録[38]から確認できる。五月一〇日については原本を欠くが、五月一九日に「先日の嵐」で農作物に被害がでたことが記され、同月下旬の記事に、長雨に加えて（旧暦）五月に嵐が吹くのは前代未聞だとしている。六月一〇日夜からは大雨と大嵐となり、藤沢町も含めた藩領北部で洪水により大きな被害が出ていた。七月中旬から塩不足に関する記事が散見されるようになり、秋から冬にかけて状況が悪化していった。一〇月下旬には、仙台城下町近辺の塩需要に対応するため、藩が他領から塩を購入して配給しはじめたこと、さらに夏と秋の大嵐によって塩場（塩田）が被災し、貯えられていた塩や、原料となる塩水が失われたとの情報を記している。一一月下旬には隣接する盛岡藩領から塩を買い付けたともある。仙台藩が実施していた塩の専売から外れる形で塩の密売が起こっていたという。この年は全国的に風水害による塩不足が起こったようで、六月一一日付の江戸からの書状に、製塩地帯である中国筋（瀬戸内地方）の「大風雨、大嵐」が記され、一一月下旬には、播州（兵庫県）や四国から大坂に移入する塩が不足し、他領でも塩が高直になったと記していた。

文中に出てきた野菜の漬物、さらに海産物の塩蔵品は、領民の生存に必須であった。仙台藩は公的な事業「御救」として塩の確保をすすめ、人々の救済にあたった。その一環とし

て、藩直行方の備蓄米が原資とされ、最新鋭の戦艦・開成丸が出動していたのである。[39]

救済の対象は、「国民」だと記されている。仙台藩では一八世紀末の藩士の意見書のなかに、領民を「国民」と位置づける考え方が芽生えたとする。ここでの「国」は、単に所領の範囲ではなく、固有の歴史的紐帯によって支配者と被支配者が結ばれる「上下一体」の運命共同体を意味する。[40]開成丸の航海が「国民」への対応だとされていたことは、幕末の仙台藩において、藩主を筆頭とする武士層、養賢堂の学者ら知識層の間で、仙台藩を運命共同体としての「国」として認識し、そこに暮らす「国民」の為政者の責務とする考え方が、もはや所与の前提となっていた可能性をうかがわせる。

「ふなわたり日記」冒頭、筆者の村田善次郎は、前年夏の航海で開成丸が船体を損傷しながら帰還した事もふまえて心配する母親に、「かしこき君」（伊達慶邦）に仕える身として航海の危険はいとわない、といった主旨の言葉をかけている。主君への忠誠という武士の上下関係にくわえて、「国への務め」という高揚感までも読み取ることもできよう。いずれ、「国」、「国民」のとらえ方は、建艦を通じた「上下一致」の実現を構想していた習斎の考え方とも親和的なものであった。災害に苦しむ「国民」を救済するための開成丸の出動は、習斎が描いた理想の体現であり、養賢堂関係者にとって積極的な任務として受け入れられていたのである。

（三）「御軍艦御直行方」による商品輸送

開成丸が、西国の塩を積み込んで寒風沢に帰還したのは、万延から文久と改まった年（一八六一）の三月七日であった。その後も、開成丸が江戸への航海を行った可能性がある。以下、仙台城下町商人・小西家の文書から検討する。小西家は城下町中心の大町四丁目に店を置き、薬種や紙を扱っていたとみられる。なお江戸時代の仙台城下町での小西姓の商人としては、特産品だった柳生和紙の再興を行ったことで知られる小西九兵衛がいるが、関係は不明である。

文久元年（一八六一）六月、小西家から「開成丸直行方」に対し、御用金一〇〇両の拝借願いが出された［史料32］。次の江戸下りの船で、武士や百姓たちが望む商品を江戸で買い付けた商品を、手数料と運賃を差し引き、仕入代金に一割の利潤金を付けて販売することになったため、砂糖を注文す

る代金として拝借するというものであった。

「開成丸直行方」がどのような組織であったのか、今のところ明らかに出来ない。ただし「直行方」という名称は、前述した安政改革期に設置された部署と同じである。芝多の失脚後、組織が養賢堂に移されたということかもしれない。養賢堂には、この年までには開物方も設置されている。商業や流通を担う「直行方」と、藩内の生産向上にあたったという「開物方」が、養賢堂の中に並び立っていた、という可能性もあるだろう。

小西久兵衛は、同年六月二一日に、江戸だと思われる小西利八店に書状を送っている［史料33］。開成丸で江戸に仙台藩の年貢米を輸送し、その帰りに砂糖や綿などの商品を積んで、「仲間商人」に限って払い下げることになり、久兵衛が「差配人」を仰せ付けられたという。「仲間商人」とは、仙台城下町で藩から独占的な商品の取り扱いを認められていた商人の集団[36]とみられる[41]。開成丸で取引する砂糖は薬種、綿は木綿仲間に加入している商人が対象となったということだろう。久兵衛は、開成丸を核とする事業の規模が拡大されていく（「往々大行に相成」）という見通しを示し、利八に送金して白砂糖などの仕入れを検討させている。

一方、藩側の担当者は「御軍艦御直行方」の役人衆であり、江戸では戦艦（開成丸）に乗り込む古山誠之丞と橋本清太夫（貞恒）が対応すると伝えている。この両名、さらには「開成丸直行方」役人の名前の書上とみられる記録［史料33］にも、は、開成丸に建艦から関わっていた仙台藩の天文学者たちの名前が列記されている。建艦や天測の専門家たちが、「直行方」の名前を引き継いだ部署で、藩による商品取引を担当していたのであった。これに対し久兵衛は、「役人衆は、商道の事は、つゆ不心得である」と、手厳しい表現で江戸店に注意を促している。「直行方」の名義は引き継がれたが、藩校である養賢堂の一機関に、経済に明るい藩官僚が配されたわけではなかった。

その後の書簡のやりとりからは、主な仕入れ品が、（奄美）大島や喜界島、徳之島（いずれも鹿児島県）で取れる黒砂糖、および白砂糖であったことがわかる。同年一〇月五日の書状では、直行方からの拝借金百両で、大島喜界産の黒砂糖六〇挟（箱）、三種類の白砂糖あわせて四〇樽が買い付けられ、開成丸で仙台に運ばれていた事がわかる。あわせて、砂

糖のほかに蝋燭、紙、「琉球荷物」［史料38、39］、醤油［史料40］も取引されていたらしい。

天文学者たちにとっては不得手な業務だったであろうが、習斎の当初の構想通り、開成丸が商船として機能していた時期が、間違いなくあったのである。

文久二年（一八六二）一一月、小西屋久左衛門と同久兵衛から、「御軍艦方御役所」の古山誠之丞と佐藤久馬に対し、注文品である黒砂糖と白砂糖の代金および経費の決済に関する書面が出されている［史料40］。商品は江戸と浦賀で仕入れたものであった。これらの荷物は、開成丸で輸送されたということになるだろう。だとすれば、開成丸が航行していたことを示す、現時点ではもっとも新しい年代の記録だということになる。

四　開成丸はいつ失われたのか

最後に、開成丸の喪失をめぐる状況について検討したい。

（一）仙台藩士たちの回想

開成丸は、文久年間に喪失したと伝えられているが、これまでの研究でも、はっきりした年代・月日は特定できていない。本書の編集に当たっても、可能な範囲で捜索したが、確実な記録を見つけることは出来なかった。

開成丸喪失に関する記録としては、慶応二年（一八六六）に養賢堂指南役を務めた仙台藩士・岡鹿門（一八三三～一九一四）が明治四〇年（一九〇七）からまとめた随筆「在臆話記」での叙述が知られる[42]。乗組員の一人で、鹿門とも親しかった古山誠之丞が江戸に来た折、航海の話を聞いたが、帰港の才に風波のため暗礁に乗り上げて損壊。船具は明治維新まで石巻の仙台藩の倉庫に収められていたが、新政府の役人に没収されたという内容である。鹿門は、巨費を投じて建艦した戦艦がわずかな利用で失われたとして批判的にとらえていた。

この六年前の明治三三年（一九〇一）九月七日、開成丸惣棟梁の三浦（陶蔵）乾也の一三回忌に際して事績を調査していた大槻如電（一八四五～一九三一）は、仙台藩の出入司を務め、戊辰戦争直前の洋式軍制整備にもかかった松倉恂（一

八二七～一九〇四）に、書簡を送っている。ここでは開成丸の喪失は「文久初年なるべし」としつつ、開成丸の建艦と運行について質問している。松倉は、当時の記録は戊辰戦争後にすべて散逸し、記憶も定かではないと前置きしつつ逸話を紹介しているが、喪失の時期についての言及はない[43]。開成丸の建艦から三〇年以上が過ぎた段階で、事実が曖昧になっていた（されていた）ことをうかがわせる。

なお、「在臆話記」にある、石巻で開成丸の船具が保管されていた、ということが事実なら、その近海で座礁した際の処理について、藩や海辺の村々で記録していた可能性もある。ただし、松倉の談によれば、藩庁の文書は散逸。沿岸部についても二〇一一年三月一一日の大津波で大きな被害を受け、地元で保管されていた文書の大半は失われた可能性が高い。開成丸に関する史実の確定はもちろん、沿岸部の歴史を再生するという観点からも、仙台藩沿岸部に関係する史料を引き続き捜索していくことは、今後の大きな課題である。

（二）文久三年六月・伊達慶邦の書状

同時代の記録として、文久三年の前半に喪失していた可能性をうかがわせるのが、同年六月一八日付の、藩主・伊達慶邦から奉行・大内縫殿への書簡である[44]。奉行の但木土佐（一八一七～六九）に対して、時下の形勢においては、軍艦が無ければ江戸への米輸送をはじめとして何も出来なくなると、ごく内々に伝えた。三浦陶蔵の発案であり大條監物に確認したが、土佐はそのことに不同意で、幕府から借用する手続きもあるとしていた。慶邦は但木の対応に失望していたというものである。

文久三年二月、慶邦は将軍・徳川家茂の上洛へ供奉するが、自国および蝦夷地防備を理由に四月に帰国していた。一方で、前年に起こった生麦事件の報復としてイギリスなど四か国の艦隊が横浜に接近。磐井郡藤沢町には、三月二〇日頃、江戸の近海沖合で仙台船の御穀船一艘が盛岡藩の船二艘とともに異国船に拿捕（「追取られ」）されたため、他の船は引き返し、江戸への米輸送が出来なくなったとの風聞が伝わっている[45]。まさに軍事力としての戦艦が必要とされる状況になっていた。

この年の六月上旬、一門の登米伊達家当主・邦成（一八四一～六九）が本吉郡以北の、但木土佐自身は藩領南部の海岸

で、台場建設のための調査を行っていたという[46]。仙台藩の海防体制は、陸上での砲台による迎撃に軸を移しつつあった。三浦ら藩内の軍艦派が巻き返しを図り、慶邦もその意見に傾いていたが、但木が拒否したということであろうか。だとすれば、緊縮財政をとったという但木が、藩主の意志をも退けていたということになる。一方で、このとき開成丸が健在だったとするならば、あらためて慶邦が軍艦の整備を求めたことには、やや違和感も感じる。開成丸が失われたことを前提とする仙台藩の海防体制の再編にともなう議論だったのかもしれない。今後の検討に待ちたい。

おわりに

仙台藩の洋式戦艦・開成丸について、その建艦をめぐる構想、政治社会的な背景、運用の実態について、本書所収の史料に基づき考察してきた。最後に、開成丸喪失後の関係者の動向について紹介し、本稿の結びとしたい。

慶応四年（一八六八）二月一二日早暁、仙台藩天文方の古山誠之丞と、手伝の山田英四郎らは、天文方御用および測量方御用として、蒸気船への乗務を命じられた［史料41］。目的地は京都。仙台藩奉行・大條孫三郎道徳が、鳥羽・伏見の戦いに勝利し、会津追討令を発した朝廷に、和平を求める建白書を持参するためであった。

この蒸気船は、同年一月五日に仙台藩が一二万ドルで買い入れられたアメリカ製の蒸気船「宮城丸」である[37]。帆船から古山が乗員として選ばれたのは、天測の知識はもちろん、開成丸への乗り組み経験を踏まえたものかもしれない。

さかのぼって、万延二年（一八六一）二月七日。塩を積んだ開成丸は、房総半島での荒天と無風で航海が難航していた［史料31］。風が凪いだ海に浮かぶ開成丸の横を、国籍不明の蒸気船が煙を吐きながら走り去っていった。「飛ぶ鳥よりも速い」という乗組員たちの驚きが記録されている。帆船の開成丸が航行に難儀する条件の中でも、夜間でも灯火を付けつつ、煙を吐きつつ疾走する「えみし船」。開成丸の乗組員たちは、彼我の差を見せつけられる経験をしていたのであった。

日本の洋式船舶は、急展開する幕末情勢の中で、帆船から急速に蒸気船へと移行していく。そのほとんどは、欧米諸国

からの購入であった。仙台藩でも、大槻習斎が当初構想していた藩領浦々の建造ではなく、慶応三年以降は外国艦船の購入を進めていく。習斎はその転換を見ることなく、慶応元年（一八六五）に五四歳で没していた。

一方で、蒸気船の運行には、開成丸を運用した天文学者たちが関わっていた。艦隊を通じた新たな仙台藩を目指す一環としての開成丸の経験は、仙台藩における蒸気船の時代へとつながっていった。そのように考えておきたい。

注

（1）「開成丸造艦碑」［史料18］、荒井聡「洋式帆船開成丸について」（『仙台市博物館調査研究報告』一四、一九九三年）。

（2）以下の経過の叙述は、難波信雄「幕末仙台藩の経済構造」（石井孝編『幕末維新期の研究』吉川弘文館　一九七四年所収）による。

（3）益井邦夫「天禄堂三浦乾也の事蹟考察」（『国学院大学紀要』二四、一九八六年）および同著『三浦乾也　幕末の鬼才』（里文出版　一九九二年）。

（4）前掲注（1）論文

（5）黒川典雄「評伝　小野寺鳳谷」（『仙台郷土研究』二六―二、二〇〇一年）。

（6）大西恵美子「養賢堂の軍艦『吉田大肝入文書』より」（『仙台郷土研究』二九五号、二〇一七年）

（7）「仙台藩の天文史」 https://mdonchan.web.fc2.com/ の「その他」→「開成丸」

（8）難波信雄「大藩の選択―仙台藩の明治維新」（『東北学院大学東北文化研究所紀要』三七　二〇〇五年）。

（9）栗原伸一郎『戊辰戦争と「奥羽越」列藩同盟』（清文堂出版二〇一七年）、第二章。

（10）竹ヶ原康佑「嘉永期における仙台藩重臣・中嶋恒康の海防政策と砲術攻究―「島崎家文書」・「中嶋家文書」にみる軍制改革の展開―」（『明治大学博物館研究報告』二〇、二〇一五年）。

（11）菊池勝之助「仙台の教育」および重久徳太郎「仙台の洋学」（いずれも『仙台市史』（旧版）四　別編二　一九五一年）、鵜飼幸子「大槻家の人々」（『宮城の研究』五　清文堂出版一九八三年）。

（12）平川新『開国への道』（全集日本の歴史一二巻　小学館二〇〇八年）、第一章。

（13）「経世大要」『仙台叢書』二、一九二五年（復刻版・宝文堂一九七一年）を利用。なお平泉は文化五年（一八〇八）に著

述した『鯨史稿』（『江戸科学古典叢書』二　恒和出版一九七六年）の中で、大砲による捕鯨の困難を説いている。

（14）岩井憲幸「幕末仙台藩におけるロシア学研究の開始とその展開」（『明治大学人文科学研究所紀要』八一　二〇一七年）。

（15）古賀の海防論、思想については眞壁仁『徳川期の学問と政治』昌平坂学問所儒者と幕末外交変容』（名古屋大学出版会二〇〇七年）、第六章「変通論」を参照した。

（16）中嶋家文書「海岸方自筆留」（個人蔵・宮城県白石市寄託。本稿ではＮＰＯ法人宮城歴史資料保全ネットワーク収集画像を利用）。

（17）「天保凶歳日記」、佐藤大介編著『一八～一九世紀仙台藩の災害と社会　別所万右衛門記録』（東北大学東北アジアセンター二〇一〇年所収）、天保九年九月下旬の記事に、「世間新流民甚多し、帯刀之流民も相見得申、可恐々々」とある。

（18）拙稿「「海の郷士」と地域社会　仙台領桃生郡名振浜・永沼丈作の軌跡」齋藤善之・高橋美貴編『近世南三陸の海村社会と海商』清文堂出版　二〇一〇年）。

（19）「拙稿「仙台藩の献金百姓と地域社会」『東北アジア研究』一三、二〇〇九年。なお注（18）拙稿では、永沼丈作が文政末年に、養賢堂医学所への献金を行っていた事を言及した。献金や、武士身分を獲得した地域有力者層の通学といった形での、藩校と地域社会についてさらなる検討が求められる。

（20）金澤裕之『幕府海軍の興亡　幕末期における日本の海軍建設』（慶應義塾大学出版会　二〇一七年）、第一章。

（21）前掲注（8）難波論文。注（9）栗原著書、第一章。

（22）「寒風澤（寒風沢島）嶼造艦艦碑その他」（東京国立博物館所蔵、同館画像検索 https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0025957 二〇二一年一二月三一日閲覧）所収の「開成丸真形百廿一分之図」（口絵4）および「三月朔開成丸初度航海帰帆之図」（口絵6）。前者は開成丸の側面図、後者は安政四年（一八五六）の初航海に関する絵画である。同史料にはほかに進水の様子を示した「開成丸下海図」（口絵5）、寒風沢島および建艦施設を描いた絵図二点、安政四年および五年末から六年に掛けての航海の航路図二点が含まれる。

（23）神谷大介『幕末の海軍　明治維新への軌跡』（吉川弘文館二〇一八年）一四〇～一四四頁に、明治二〇年代の記録からまとめた表による。なおこの表では、開成丸が英国からの購入とされているが、いうまでもなく仙台藩が自力で建造したものである。

（24）前掲注（1）荒井論文。［史料23］に見える「然得未良法」が典拠とみられるが、「小型船は作れても、開成丸のような大船を建艦するための良法を得られない」との意と解釈して

おく。

(25) 『仙台市史』通史編五近世三（仙台市　二〇〇四年）、四五〇頁。

(26) ヴィンセンス号の来航については前掲注(25)書、四六〇ページおよび注(18)拙稿を参照。なお背景となったアメリカ太平洋艦隊による日本沿岸測量の歴史的位置づけについては、後藤淳史『忘れられた黒船　アメリカ北太平洋戦略と日本開国』（講談社選書メチエ　二〇一七年）を参照。

(27) 前掲注（8）難波論文。

(28) 前掲注（22）史料「開成丸下海図」には、ドックに大きな屋根が掛けられているのが描かれており、これを指すか。

(29) 金澤裕之氏によれば、洋式艦船の配備が即「海軍」の結成を意味するのではなく、①軍隊の編成原理が江戸時代の「家」単位での編成を脱却し、個人単位・近代的な官僚制に基づいていること。②一元的な指揮系統と規律に基づく軍艦運用能力、②複数の軍艦を有機的に運用する「フリート・アクション」の概念、④補給や修理態勢の整備といった要素が求められるという〔前掲注(20)金沢著書、序章〕。習斎ら仙台藩の造艦にかかわった人々の認識について、さらなる史料の掘り起こしが必要であろう。

(30) 前掲注（11）鵜飼論文、前掲注(25)書、三八三頁。

(31) 前掲注（11）重久徳太郎「仙台の洋学」。

(32) 「横田屋文書」（『気仙沼町誌』一九五三年）、『日本塩業体系』史料編　近世三（日本専売公社　一九七〇年）に転載。

(33) 「養賢堂惣調」『仙台市史』史料編2近世1（仙台市　一九九二年）所収

(34) 北上川（追波川）の河口に位置する桃生郡橋浦村（宮城県石巻市）では、文政五年から六年にかけて、養賢堂が北上川沿いの氾濫原に位置する「平形なめし」で約八貫文（八〇石）の田地の再開発を行っていた〔『北上町史』通史編（北上町　二〇〇四年）二七五～六頁〕。

(35) 藤原相之助『仙台戊辰史』一（復刻版　東京大学出版会　一九八〇年）、八九頁。原著は一九一一年刊行。

(36) 拙稿「天保飢饉からの復興と藩官僚―仙台藩士荒井東吾「民間盛衰記」の分析から―」（『東北アジア研究』一四、二〇一〇年）。

(37) 前掲注（8）難波論文、前掲注（22）書、一七七頁。

(38) 「丸吉皆川家日誌」（皆川龍一氏所蔵）。なお本日誌については全文解読の作業を続けており、後日の公刊を予定している。

(39) 他領塩の移入については開成丸の出航のみで対応したのではなく、藩の海運力全体を動員したと考えられる。全容の解明は今後の課題である。あわせて、冬期の荒天に見舞われたと

はいえ、帰港に三か月弱を要している。開成丸出動の政策的な効果についても検討課題となるだろう。

（40）J・F・モリス『近世武士の「公」と「私」　仙台藩士玉虫十蔵のキャリアと挫折』（清文堂出版　二〇〇九年）、第一章（初出二〇〇六年）。

（41）『仙台市史』通史編四近世二（仙台市　二〇〇三年）、二四二頁。

（42）「在臆話記」（『随筆百花園』一、中央公論社　一九七四年）。

（43）「三浦乾也に関する一資料　大槻如電・松倉恂往復書簡」（『伊達資料と三浦乾也展』昭和三十七年度春季特別展図録　仙台市博物館　一九六二年所収）。

（44）『大日本古記録　伊達家文書　十』、資料番号三四六九。参考に全文を挙げる。

此比ニ成、土佐、何分此形勢ニ至、是非軍艦無之而は難成候ニてハ、江戸江運送米之為を初、何義ニ付無之、不叶趣、極内々御申聞、夫ハ三陶（三浦陶蔵）より出候事ニ相見得、監物ニ種々承候へハ、不同意至極ニ有之、右軍艦者公辺迄拝借之手続と迄土佐申聞、とにかく国益方之念不止、此ニハよわり居候、其段其方厚含可申事、

なおこの記録は荒井前掲注（1）論文でも言及されているが、三浦陶蔵の記述については紹介が割愛されている。

（45）前掲注（38）「丸吉皆川家日誌」。

（46）前掲注（38）「丸吉皆川家日誌」

（47）前掲注（25）書、五〇一頁。

本稿は、二〇二一年度東北史学会大会日本近世・近代史部会での発表を基に加除修正を加えたものである。史料調査や執筆に際しては、黒須潔、井上拓巳、栗原伸一郎、相澤秀太郎の各氏にお世話になった。記してお礼申し上げたい。なお本稿は科研費基盤研究（B）課題番号 19H01293、基盤研究（C）20K00978 および歴史文化資料保全ネットワーク東北大学拠点における成果の一部である。

史料編

史料編　凡例

一、凡例は、史料編のうち史料番号29「開成丸航海日記」と31「ふなわたり日記」を除く収録資料についての凡例である。29および31の凡例については、それぞれの冒頭部分に記した。

一、収録した史料原本の所蔵先、刊行物からの引用については、それぞれ所蔵機関名、出典を、史料の末尾にカッコ書きで記した。

一、漢字は原則として常用漢字を用いた。ただし、人名や地名など、原史料の標記通りとした部分もある。

一、助詞として用いられている「与（と）」、「者（は）」、「江（え・へ）」、「而（て）」、「ニ而（にて）」「而已（のみ）」、「茂（も）」および「并（ならび）」は、原史料の表記のまま、文字の級数を小さくした。

一、「ハ、（はば）」、「ツ、（ずつ）」、については原表記通りとした。

一、「〆」については、銭の単位や重さを示す場合には「貫」に改めた。

一、合字「𠮟（より）」については「より」に改めた。

一、史料本文には適宜句点「。」、読点「、」および並列点「・」を付した。なお刊行物からの引用史料についても、編者（佐藤）の判断で句読点を振り直している。

一、原史料中の欠字は一文字あけた。平出・台頭は史料に応じて、原史料の表記に従ったものと、二文字空けで処理したものがある。

一、史料の文中、当て字で記している部分や、明らかな誤記については、適宜その

右側に（　）内で正しい標記を記した。

一、文意の通じない部分には、その右側に（ママ）を付した。また難読や疑問が残る文字・表現については右側に「（ヵ）」とした。

一、原史料の破損により判読出来ない文字は、字数に応じて□□で示した。字数の不明な部分については［　］で示した。

一、原本での文字の抹消については、字数に応じて■■で示した。抹消部分が読み取れる場合は、抹消線の下に文字を示した。また、追記については原史料での表記にあわせて、本文より文字を級下げして行間に記したが、短いものは本文に挿入した場合もある。

一、史料中、現在の人権意識から見て不適当な語句が使用されている場合があるが、事実に基づく客観的な研究を進める史料として、そのまま掲載した。利用者にはその趣旨を理解されたい。

一、史料の翻刻・入力の担当者は次の通りである。

史料番号1～11、13参考史料、21、24、25、27、29　佐藤大介
史料番号12、13、16、18～20、22、23　26、28　黒須潔
史料番号30　黒須潔・佐藤大介（原本校訂）
史料番号31　佐藤大介
史料番号32～41　佐藤大介・井上拓巳

一、全体の構成・編集は、佐藤大介による。

一　養賢堂学頭・大槻習斎の海防構想

1　大槻習斎意見書下書
（造艦の推進につき）

嘉永七年（一八五四）カ

（前欠）

壱条覚書左ニ、

一軍船之義ハ、海防第一之要器ニ而（皇国警衛）、無窮自然ニ御備相立為無窮之利益、海内之疲弊も、自今相直リ可申大ヶ条ニ御座候事、

一此度公儀御新令、兵制御改革と申内、船ハ第一、砲術ハ第二、騎戦馬術ハ第三と奉存候事、

一西洋ニ而も、船制一変仕候へハ、国運相開ケ、政体一新仕候義、段々相聞へ、指当りヲロシヤ之如キハ、極寒不毛之地ニ御座候得共、衣食財用相足リ、文事武備（相備）十分相立り、当時ハ世界最大之富強と相聞得（唱）申候、其他英夷、墨夷、阿蘭陀等国々も、便利之船造リ立、莫大之国益を得候義相聞得候事、

一御国許之義ハ、東海際と申■御大藩ニ而、海防御備、一々砲台御築立と申義、甚不容易御儀ニ有之、先以軍船さへ相開ヶ候得ハ、追々　上之御入料計不奉待造方仕、指上候者共、何程も可有之、自然御備相立候而已ならす、東海之御威風、海外迄も相及候御勢之事、

一塩釜浦始、石巻、気仙沼等之湊々、是迄より（ナシママ）者十倍金穀融通、繁華可仕事、

一商人他所仕入之諸品（分）、薬品等を始、諸物価（自然）下直ニ相成候根元之事、

一御国産相開ケ候基ヒ之事相成り（ニも）、可然■之事、

以上

二月　　大槻格次

（「大槻習斎洋艇建造書類」　早稲田大学図書館洋学文庫）

［解説］

仙台藩校・養賢堂の学頭・大槻習斎による艦隊建設の意見書。習斎は、養賢堂改革を推進した大槻平泉の子で、嘉永三年（一八五〇）に学頭に就任、養賢堂蘭学局へのロシア学科の設置などの改革ともに、開成丸建造も含めた仙台藩洋式軍制の推進者の一人となった。

史料は年不詳だが、「公儀御新例」は、嘉永六年（一八五三）一〇月の江戸幕府による大船建造解禁を指すか。よって嘉永七年（一八五四）二月と推定した。ヨーロッパの列強、特に「極寒不毛の地」ロシアに範を取った艦船・艦隊を基軸とする「国益」の増大、長大な海岸線を持つ藩領防備への有効性、仙台藩領港町の繁栄と商品流通の活発化といった意義を主張している。

2 軍艦調書（下書）

年不詳

（朱書）「下書」

（朱書）「公辺御届」

軍艦調書

スクネール造

一弐艘　絵図一枚添

長サ水際ニテ十二間

上口ニテ十四間

最広所ニテ三間四尺六寸

惣高一丈三尺

一表檣十四間二尺四寸

一艦檣十四間壱尺六寸

フレガット造

一弐艘　絵図一枚添

長サ水際ニテ十五間

上口ニテ十七間

最広所ニテ四間一尺

惣高三間三尺　表帆柱十六間三尺

（朱書）「砲門」　六ヶ所　艦檣十七間三尺

フレガット造并コルヘット造

壱

一弐艘　絵図壱枚添

長サ水際ニテ拾八間　表帆柱十八間一尺八寸

上口ニテ二十間弐尺四寸　中帆柱弐十間五尺四寸

最広所ニテ五間　艫帆柱十七間
惣高四間一尺弐寸　砲門八ヶ所

（朱書・追記）
「
コルヘット
一壱艘　絵図壱枚添　長サ水際ニテ十八間
上口ニ而二十間一尺八寸
最広所ニ而五間一尺
惣高四間一尺弐寸
表帆柱十九間三尺
中帆柱弐十一間三尺六寸
艫帆柱十七間四尺
砲門八ヶ所
」

コルヘット造
一壱艘　絵図壱枚添
長サ水際ニテ弐拾壱間
上口ニテ二十三間四尺
最広所ニテ六間壱尺一寸
惣高五間四寸五分　表帆柱二十二間四尺五寸
砲門十四ヶ所　中帆柱二十五間一尺二寸
艫帆柱二十間壱尺九寸

フレガット造
一壱艘　絵図壱枚添
長サ水際ニテ弐拾四間
上口ニテ二十五間二尺五寸
最広所ニテ六間　表帆柱二十四間一尺二寸
惣高四間弐尺　中帆柱二十七間
艫帆柱二十一間一尺八寸
砲門十六ヶ所

フレガット造
一壱艘　絵図壱枚添
長サ水際ニテ弐拾七間
上口ニテ弐拾八間三尺六寸　表帆柱二十七間
五尺四寸
最広所ニテ六間四尺五寸　中帆柱三十一間六寸
惣高壱丈五間一尺三寸　艫帆柱二十五間
砲門二十ヶ所

リニー造
一壱艘　絵図壱枚添
長サ水際ニテ弐拾四間　表帆柱三十六間三尺
上口ニテ三拾三間五尺　中帆柱三十六間
最広所ニテ八間五尺　艫帆柱二十九間三尺
惣高四丈壱尺七間一尺五寸　砲門六十六ヶ所

蒸気フレガット造　車仕掛
一壱艘　絵図壱枚添
長サ水際ニテ拾五間　表帆柱十三間三尺
上口ニテ十六間　中帆柱十三間弐勺八寸
最広所ニテ六間　艫帆柱十一間三尺
惣高三間壱尺六寸　車径一間三尺
砲門六ヶ所

蒸気フレガット造　造鉸仕掛
一壱艘　絵図壱枚添
長サ水際ニテ拾八間　中帆柱十六間三寸
上口ニテ十九間　艫帆柱十三間
最広所三間五尺五寸　砲門六ヶ所
惣高三間
表帆柱十四間四勺二寸

蒸気フレガット造　車仕掛
一壱艘　絵図壱枚添
長サ水際ニテ弐拾壱間　表帆柱十四間四勺二寸
上口ニテ弐拾弐間一尺　砲門十ヶ所
最広所四間三尺五寸　中帆柱十六間一寸
惣高三間三尺六寸　艫十三間四尺二寸
車径二間一尺□□
都合拾五艘
内　蒸気船三艘
絵図拾弐枚（三）
以上

（「大槻習斎洋艇建造書類」　早稲田大学図書館洋学文庫）

［解説］

大槻習斎による、仙台藩の洋式艦船の建艦計画。合計一三艘で、帆船に加え「造捻」（スクリュー船）および外輪で駆動する蒸気船が含まれる。「公辺御届（下書）」とあることから、江戸幕府への提出を意図したものであるが、実際に提出されたかは不明。史料1と同じく嘉永七年（一八五三）二月頃か。

二　小型洋式船の建造

3　大槻習斎より達（バッテーラ船の帆印）

嘉永七年（一八五四）

「　勘解由様　　大槻格次　　自筆

（後筆カ）「安政元年七月廿七日」　」

此度於塩釜浦バッテーラ御造船罷成候得ハ、引続御軍船御作方罷成可然奉存候所、右ニ付、日本惣印之幟、并　御家帆印、早速御吟味罷成被相渡候様仕度、此度於公儀、船印、幟印等被相定、御触出シ有之事ニ承知仕、弥右様ニ御座候へハ、帆印早速御吟味不罷成候へハ、御手後レニ罷成り、如何之様奉存、尤軍船ニ付而ハ、先々　御先代様より之御格も可被為有、尚御吟味罷成、船印等寸法并染色等も被仰渡候様、此度印符を以、此段相達申候、以上、

七月廿七日

（「大槻習斎洋艇建造書類」早稲田大学図書館洋学文庫）

［解説］

仙台藩の艦船に掲げる旗印の模様、寸法、色について定めるよう求める大槻習斎の意見書。「勘解由」は仙台藩奉行・石母田勘解由の事。

4　大槻習斎意見書（バッテーラ船調練・旗印・船員取立の件）

嘉永七年（一八五四）

「　大槻格次様　　日向（中村）　」

右之通り申聞、令承知、船印之儀者赤丸曜御紋相附候小旗相用、外御手前御味之通ニ而可然と相伺候処、無御異儀旨被仰出候間、其心得夫々首尾可有之候、以上、

十月廿九日

「　勘ケ（石母田）由様　　大槻格次　」

此度バッテーラ御制造被成候ニ付、兼ノ通御吟味被成下度ヶ條、左ニ、

一日本惣印之幟大小、軍艦壱艘ニ付壱ツ、被相備置候様被成下度候、

右幟、此度バッテーラ御制造ニ付而者、第一御拵被成度、尤寸法等之儀者、船之大小ニ寄、不同有之訳ニ御座候、只今と被成候而者、公儀御始、御諸家一体之御振合も被為有候御儀と奉存候得共、御家者　御家ニて御先格御引合、御吟味罷成可然哉ニ奉存候、私愚慮之程者、別紙図面之通吟味仕候間、尚又精々御吟味罷成候様仕度、図面指添指出申候、

一右幟、平日被相拵置、調練等之節者相建候様仕度、左候得者、浦々人目一心仕、女童ニ至迄、日本之惣印と相心得ニ付候様罷成、可然訳と奉存候、

一御船印之儀者、別而御吟味被相渡候様仕度、先以惣印さへ被相渡候得者、当分者御船印と御兼用之姿ニ而可然と奉存候、

一右幟被相渡置候節、取扱振之義者、至而相達候様可仕候、

一御家大小軍艦帆印、御吟味被相渡候様仕度候、

此度バッテーラ御制造ニ付而者、早速より帆印無之候而者、御制造指支、尤此度公儀御触出之趣ニ而も、白帆者御遠慮之訳と奉存候、依而私愚慮之程、是又別紙図面之通吟味仕候間、夫々御吟味罷成候様仕度候、

一帆印之儀者、尤肝要之義と奉存候、別紙図面鱗形之儀者、東方青龍ニ象り、升龍之鱗之訳ニ而、且青ハ東方之色ニ御座候、御国之儀者、東方之御大藩ニ被為有、日ノ丸之印江も御相応之訳と、旁存付吟味仕候、

一上意と唱候御穀船、船帆印之義者、御家御規模之様承知仕候処、直々右帆印ニ御用置罷成候而も可然哉ニ奉存候、為御吟味之此段も申上候、

一バッテーラ調練ニ付、水主主立針役相兼両人、水主拾六人、炊両人、都合弐拾人、塩釜等浦々漁夫等可然者、当分御雇同様被召仕候様被成下度候、

右水主共等御雇振之儀者、当分養賢堂水ノ手人足被召仕振合を以、何分御宛行物等者、御入料相懸リ不申様取扱候訳ニ御座候間、此段者為御吟味之申上候、

一右水主主立等、調練等之節相用候法被之儀者、別紙図面之通ニて可然と吟味仕候間、尚御吟味被成度候、

右法被相備置候得者、万一異国船到来之節迚も、当分ハ直々右御用立候訳ニ御座候節ありと申上候、

一バッテーラ壱艘ニ付、日ノ丸高張桃灯壱ツ、日ノ丸弓張提灯弐ツ被相備置候様被成下度候、

右ヶ条之通、急速御吟味被成下度、図面指添相達申候、已上、

閏七月十八日

尚以、右惣印等弥被相渡候節者、同所御入料を以夫々御拵罷成候訳ニ御座候間、為御承知と此段も相達候、以上、

（「大槻習斎洋艇建造書類」　早稲田大学図書館洋学文庫）

［解説］

「バッテーラ」（バッテラ）船の船印、乗組員の取り立てに関する意見書。幕府が定める「日本惣印」とともに、仙台藩独自の帆印を定めることを説く。「東方の大藩」たる仙台藩として、東方の守護神である青竜の鱗とする、という内容から、習斎が抱く仙台藩の政治的・軍事的役割のあるべき姿がうかがえる。調練には塩竈など海村から二〇名ほどを雇用し、揃いの柄の半被を着せるとしている。奉行・中村日向からの回答では、この段階では仙台藩独自の船印を用いることにはならなかったが、史料11から、翌年に外国船と識別するために採用されたことがわかる。

5　大槻習斎意見書（車輪船配備につき）

嘉永七年（一八五四）

海岸方為御備之、車輪船一艘、先以宮城郡塩釜浦等、可然場所ニ而御造立罷成候様仕度奉存候、右船之儀者、当閏七月中田村右大夫様より雛形被指上、養賢堂江被相渡置旨　思召を以被相渡置候ニ付、篤ト拝見仕、衆評仕候処、海岸御備向ハ勿論ニ而、川々運漕ニも、風雨等之障り無之、迅速、如飛便利ニ往来可相成、追々御領内北上川筋ヲ始、川々湊々江被相備置、平日御穀等運漕罷成義ニ御座候へハ、

上之御為メハ申ニ不及、民間之潤助、是迄之運漕船トハ雲泥之違ひニ可有之、仍而全体之為メ、前条之通勘弁仕候、尚御吟味罷成、無御異儀御座候ハヽ、前以夫々都合も御座候間、早速御指図被成下度、以印符相達申候、以上、

九月十七日

尚以、本文之義弥無御異義被仰渡節ハ、養賢堂御入料を以、御作方罷成候訳ニ御座候、尤右船内通リ之車ハ、鉄或ハ木ニ仕、一本柱ハ弐本柱ニ仕、其外舟之形も精々吟味為仕候訳ニ御座候、先以来早春迄ニ一艘も出来仕、調練為仕、

追々蒸気船之稽古ニ而可然訳と、彼是も勘弁仕候間、御吟味之如此も相達申候、以上、

（「大槻習斎洋艇建造書類」　早稲田大学図書館洋学文庫）

［解説］

「車輪船」（外輪船）を、塩竈などの浦々にて、養賢堂の経費で造船することを提言。海岸防備はもとより、平時には北上川など領内の河川舟運に用いることで、領内経済の振興につながると主張している。

6　片倉小十郎より下知（バッテーラ船落成につき祈祷の件）　嘉永七年（一八五四）

「　大槻格次様　　片　小十郎　」

（後筆か）「安政元年九月廿六日」

此度、養賢堂ニ而御造作之バッテーラ御造畢之御祈祷一宮社家中へ、御用達共より頼入候被仰付候方可然訳ニハ無之哉、右吟味首尾可有之候、以上、

九月廿六日

（「大槻習斎洋艇建造書類」　早稲田大学図書館洋学文庫）

［解説］

バッテラ船の完成に際して、仙台藩奉行・片倉小十郎（宗景）より大槻習斎へ、塩竈神社の社家へ祈願を依頼することについての可否の打診。

7　大槻習斎より達（造船落成につき祈祷の件）　嘉永七年（一八五四）

「　小十郎様　　大槻格次　　自筆

（後筆カ）「安政元年九月廿六日」　」

此度於宮城塩釜浦、バッテーラ御制造相成、御船祭之儀ニ付、法蓮寺被相達、御祈祷之義ハ、寺院ニ而修行可仕部ニ而、同寺江被　仰付方可然訳ニ而有之間敷哉、尚吟味首尾仕候様被仰渡趣、承知仕候、御船祭之義ハ、万一軽キ者ニ御座候得とも、御船大工ニハ大工之式有之事ニ相聞得、如此度之軍船御

用、私ニ被相任候得ハ、私方ニ而茂先々御船祭仕候儀ニ御座候間、法蓮寺被相達御書面之大意ハ、同寺江御祈祷被　仰付方、重キ軍艦ニ付、可然品々為御吟味之被相達置候事ニ相見得申候処、根元御祈祷之義ハ、全ク　上之御吟味次第之義ニ有之、於養賢堂御指支之筋も無御座、尤私職分ニおいてハ、吟味仕候義遠慮仕義ニ御座候、扨又此度同所浦御用達之者共取計を以、同所社家中一統御船祭仕上申度趣、右御用達共申出、其節向後より於此方てハ指支無之段返答ニ為及候趣ニ而、外ニ品物迚も無御座候、全体、寺院等江地祭、御船祭等、養賢堂より頼入不申迚、御船祭ニ指支候義無御座、此方ニ而ハ此方之御祭仕候訳ニ御座候、乍然、御用達之者共親切心付を以、社家中江相願、社家一統吟味納得之上、初而之軍艦に付、御祭仕上申度との義ハ、於情義も可然訳ニ而、敢而指支相断リ候節ハ無之義と勘弁仕候、右ニ付、法蓮寺旧式等江指障リ候義ハ、於上御吟味罷成候様仕度、詰ル所、私義寺院御祈祷向江ハ一円相拘リ不申、弥明後廿六日御船祭仕度ト吟味仕候、先ツ御不分之義も御座候ハヽ、私始添役等、御当日早天出立罷下リ候義、相扣居申候間、明廿六日晩迄ニ被仰下候様仕度、被相渡一巻指添、以印符相達申候、以上、

九月廿六日

尚以、本文之義一応添役并指筆院宛ニも吟味為仕義ニ御座候得とも、指懸り候義ニ付、私勘弁之程、直々相達申候間、此段も相達申候、以上、

（「大槻習斎洋艇建造書類」　早稲田大学図書館洋学文庫）

［解説］

史料7への、大槻習斎の回答。軍船の落成にあたっての祈祷を、塩竈神社の社家が行うか（神式）、法蓮寺（仏教の僧侶）が行うか（仏式）は、自身が務める養賢堂の関知するところではないとする。藩上層部では法連寺の僧侶と塩竈神社の社家へ双方に配慮し、その間で習斎・養賢堂が当惑していることがわかる。

8　大槻習斎願書

（造船御用達の養賢堂蘭学方登用につき）

安政二年（一八五五）カ

倍御安泰被成御座、大慶奉存候、然ハ、此度塩釜浦御造船方御用達三人之者共、蘭学方手附御用申渡候様仕度、委曲自筆

を以、別而相達申候処、何分御吟味被成下度奉存候、此度
御覧も相済、御船印迄御全備之姿ニ罷成、此上ハ■外海調
練も為仕度、仍而右御用達之者共別而相達候通被成下候義ニ
御座候へハ、同所居か、り（御用達共）ニ而、御用も勇儀ニ而、諸事相弁
シ、御手軽ニ相成リ、此節柄（調練度毎）御入料響ニ不罷成訳ニ御座候勘
弁仕義候様無御座候へ小御役人下役等被相下、御取締り不仕
不叶訳ニ相成、旁御引立被召仕候ニも不及程被成下、相達
候訳ニ御座候、尤右三人之者共、去秋御造船（御取立）之節より粉骨相
勤、実ニ　上之御為メ、所之為メよろし、奇特之義共相聞得、
旁御引立も被成下候義ニ御座候へも、追々御造船御成就、無
程■■勢ヒニ御座候、彼是且同所之義、　肯山様思召も被
為有候御場所柄、彼是出格之御吟味被成下度、手前奉嘆願
候、御内々為御吟味之、不顧遠慮申上置候、以上、

（「大槻習斎洋艇建造書類」　早稲田大学図書館洋学文庫）

［解説］

習斎が、塩釜浦造船方御用達の三名に、養賢堂蘭学方の「手附御用」を仰せつけるよう願い出ている。日新丸・天開丸の建造直後か。両船の建造や、今後の調練費用の調達に資することを、四代藩主伊達綱村による塩竈の振興にかかわる「貞享特例」も根拠に述べている。

9　大槻習斎より達（調練内覧の願い）

嘉永七年（一八五四）

「　日向様　　大槻格次
　　（後筆カ）
「安政元年十月廿六日」　　自筆　」

此度於宮城塩釜浦御制造相成候日新丸并天開丸、追々調練可
也相熟シ候事ニ相聞得、仍而来ル廿八日、廿九日調練、并大
筒為討試之、役々相下シ候方ト、別而吟味相達、無御異儀旨
被仰付候通御座候所、右ニ付於可相成者、各様　一ノ宮御
参詣之御序、法蓮寺より御内覧被成下候義ニ御座候得ハ、私
始難有仕合奉存候、尤同寺より御一覧罷成候方、海面障リ無
之、地形もよろしく、諸事御手軽ニ而可然哉と勘弁仕候上、
如斯申上候、弥御内覧も被成下候ハヽ、先々都合も御座候へ
共、御含御吟味被成下度、遠慮至極ニ御座候得とも、御印符
相達申候、以上、

十月廿六日

尚以、右両日御指支も被為有候ハヽ、来月朔日二日頃ニ而も宜御座候間、為御吟味之如此も申上候、以上、

（「大槻習斎洋艇建造書類」　早稲田大学図書館洋学文庫）

［解説］

嘉永七年秋、二隻の小型船は完成し、「天開丸」・「日新丸」と命名された。大槻習斎は奉行・中村日向（宣景）を通じて、一〇月二八日、二九日に予定されている調練と大砲の試射を、塩竈神社参拝に合わせて法連寺などから内覧するよう願い出ている。法連寺は塩竈神社に隣接する掛け作りの建物で、眼下に松島湾を一望できた。

10 大槻習斎より達（調練に付き馬借用願）

安政二年（一八五五）

（端裏書）「安政二年四月■■　」

来ル七日、於名取閖上、御新造之日新丸并天開丸被遊　御覧旨被　仰出候ニ付、私義御当日明七ツ時出立、右同所江出役仕候処、御馬壱疋被貸下度、此段相達申候、以上、

四月三日　　大槻格次

（「大槻習斎洋艇建造書類」　早稲田大学図書館洋学文庫）

［解説］

安政二年四月、日新丸と天開丸が松島湾を出て、名取閖上（宮城県名取市）で訓練を行うこととなり、藩主・伊達慶邦が視察することとなった。大槻習斎は現地に赴くため、馬一匹の利用を願い出ている。

なお調練翌日の八日、伊達慶邦は仙台城にて、大槻習斎らに、軍艦製造用係を命じている。

［参考］**「楽山公治家記録」安政二年四月八日条**

○八日　座ノ間ニテ、公義使・目付・武頭・勘定奉行ヲ召シ密議アリ、奉行芝多周防、出入司熊谷文之允・笠原一学、養賢堂学頭大槻格次へ、大銃及ヒ軍艦制造用係ヲ命ス

（写本・宮城県図書館所蔵）

11 軍艦目印につき触書

安政二年（一八五五）

九拾壱

養賢堂ニ而御造立之軍艦（船）、海上乗廻之節ハ、夫々首尾合も有之、申渡置候通ニ候処、兎角右船形等見慣不申故ニも可有之哉、異国船と見違、取騒候向も有之候ニ付、海岸筋之者共、右軍艦

御家帆印等為心得、図面を以被相渡置候方と、養賢堂ニ而御写方之上、同所学員より打合、別而相廻来候間、別紙弐拾八枚相渡候条、各々一覧之上、別紙覚書之ヶ所々々江ハ、壱枚ツヽ、留置、兼而為心得置、帆印等之見定も無之様ニ不取騒様、各其心得首尾可有之候、尤右軍艦、此末所々乗廻し調練も可有之由ニ候間、実事異国船渡来之節、万一も相紛候様ニ而ハ不相済事ニ候条、唐船番所等ニ而、何分見計方不怠様之義ニ段々申渡置候趣を以、尚又吟味首尾可有之候、以上、

九月晦日

中地多利之丞　判

奥・中奥海岸付

御郡

御代官衆　御郡方横目衆

唐船横目衆　御穀改役衆

尚以、島浜ニ而者、為心得之、向寄御番所等被相渡候図面より為写取候様、首尾可有之順達、留より可被指戻候、

御石改所

一本吉南方折立　一同　志津川　一同　追波

一牡鹿小竹　一同　小渕　一同　川口　一同　遠島

一同　渡波　一桃生拾五浜　一気仙長部　一同大船渡

一本吉北方気仙沼　一同　波路上　一同　名足浜　一鮪立

一気仙唐丹

〆拾六ヶ所

唐船番所

一桃生大須浜　一本吉南方小滝浜　一同北方唐桑松ヶ森

一同歌津村之内千才　一同赤崎村之内丈丸

一牡鹿鮎川浜

〆八ヶ所

一大肝入八ヶ所

三口合三拾弐枚

右江弐拾八枚相渡候間、不足之分ハ大肝入手前江相渡置候分写取首尾可有之候事、

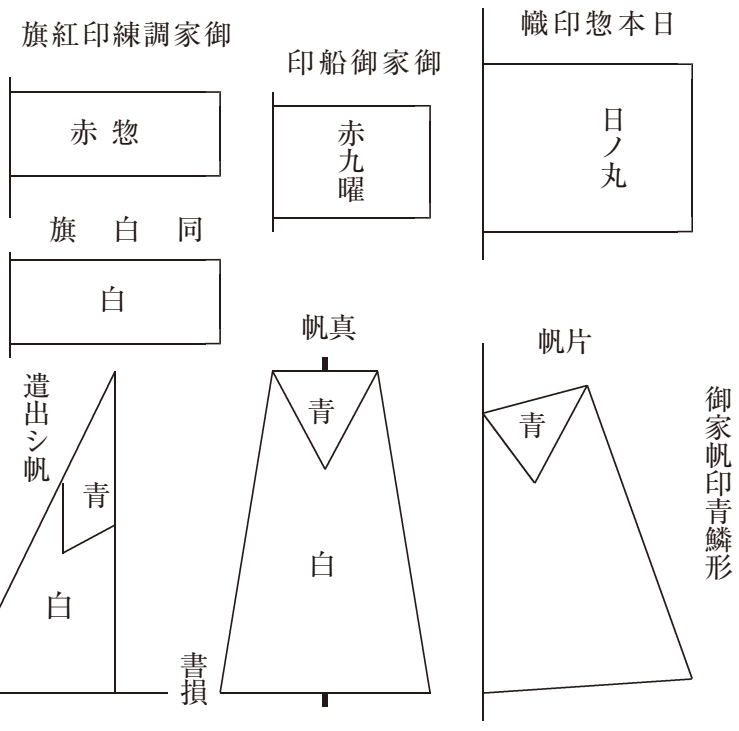
以上

右写之通被相渡候間、其心得村番所江相渡候分共、図面六枚相渡候間、首尾有之、可被指戻候、以上、

十月十一日　　門　正左衛門

両郡

大肝入衆



（安政二年「定留」気仙郡吉田大肝入文書）

［解説］

日新丸と天開丸を、外国船と誤認して届け出る例があるため、

仙台藩の郡奉行が養賢堂にて旗と帆を写し取り、沿岸村々に通知した触書。仙台藩の「奥」と「中奥」に属する穀改役所と唐船番所、大肝入に通達されている。付図から、史料料4で大槻習斎が提案した、帆に青色の鱗印が付されていたこともわかる。

本史料の所在は、大西恵美子「養賢堂の軍艦『吉田大肝入文書』より」『仙台郷土研究』二九五、二〇一七）より情報を得た。

本書の所収に当たっては東北歴史博物館架蔵のマイクロフィルムを地擁した。なお陸前高田市図書館で保存されていた「定留」原本は、二〇一一年三月一一日の津波で被災したが、救出されている。

12　軍艦方御用係の任命

安政三年（一八五六）

一安政三年十月廿三日、村田善次郎軍艦方御用係り被仰付候事、被　仰渡書左ニ、

軍艦方測量之儀指南致被仰付、指支等有之節ハ、門弟之内巧者之者相出様可致候事、

右之通、村田善次郎被　仰付候ニ付、古山誠之丞、志村将輔、橋本清太夫、内池種治四人交代ニ、宮城寒風沢御造船場へ出村致候事、両人ツヽ、寒風沢へ出役之事也、追々森田九平、上野観次、御足軽芳蔵三人、軍艦稽古人三浦陶蔵方江被　仰付候事、

右簾（カド）ニ付、佐藤久馬・森田九平、両人天文方稽古人芳蔵ハ七曜歴算取扱ニ被仰付候事、

（志村恒憲「永伝自分手扣」東北大学附属図書館所蔵）

［解説］

仙台藩の天文学者・志村将輔（恒憲）の手控に記された、村田善次郎（明哲）の「軍艦方御用係」として、測量の指南役を命じられた事に関する記録。寒風沢で交代勤務となった四名は村田の門人であり、開成丸建造の棟梁・三浦乾也にも天文方三名が付いている。なお人物の詳細は、本書の黒須論文および同サイト「仙台藩の天文学」を参照のこと。

13　軍艦製造材木調

安政三年（一八五六）

軍艦御製造方江御用立御材木、寒風沢到着木、取調左之通

松丸太并太鼓落シ取合
一四百七本
但、引着払

松平角取合
一九百拾八本
内
一八百四拾五本　引着
残七拾三本
但、当時船積中
栗半角取合
一千六百五拾四本
但、当時船積中
樫平角取合
一五拾九本
但、引着払
杉角
一百弐拾弐本
但、引着払
杉厚板
一千九百四丁
此角六百三拾五本程
但、引着払
杉丸太
一拾六本
但、当時山取出シ中
杉・松・栗丸太
一百五拾本
但、当時船積中
〆五千百三拾本
内
一三千三百三拾七本　引着
残千七百九拾三本
但、引着惣之分
安政三年
六月十一日

（仙台市博物館所蔵・伊達家文書一九一二―一）

［解説］

開成丸建設に用いられた資材の書き上げ。樹種はスギ、マツ、クリ、カシが用いられ、寒風沢へは丸太のまま、あるいは輸送前に太鼓落とし（丸太材の二面を平行に切り落として、断面が太鼓状になったもの）、角材や板材に加工されて輸送されている。安政三年六月時点で、まだ山林からの伐採が終わっていないものもあった。これらが開成丸の部材のうち、どの程度の割合を

占めるものか、検討の余地がある。

これらの材木をどこから調達したのか不明だが、安政二年（一八五五）十一月、藩の御造船方が用いる材木について、石巻の商人による一手請負から、山林方が百姓の持山より直接買い入れる形に変更されたことがわかる。藩による調達強化の動きと、開成丸建艦との関係についても注目される。

［参考］磐井郡北方大肝入　安政三年「定留」

拾七番

御造船方御造立方へ御用立御材木、御分領中所々百姓居久根・自分植立等之木元、此末山林方ニ而常式御用材御買上、御仕出之振合ヲ以、別紙御連名御下知被仰渡候間、御分領中江早速相達御首尾罷成被成下候様仕度指添相達申候、以上、

十一月九日　遠藤善蔵　荒井忠五郎

伊場野清助　小嶋源四郎

大友運三郎

中地多利之丞様　遠藤栄五郎様

富松惣右衛門様　目黒弥門様

右之通山林方役々申聞、別紙御下知相渡候条、各其心得首尾在之可被指戻候、以上、

十二月九日　中地多利之丞

御分領中

御代官様　御郡方横目衆

造船方御材木義、当時迄牡鹿石巻高橋清吉江被相任、御分領中村々百姓地付居久根等、自分植立木元、右清吉手前ニ而、相対ヲ以御買方、御仕出罷成候ニ付而者、其村々木主等被下木願出之上伐方被相免、御用立候取扱ニ御座候処、右清吉儀、右取引被相止、此度山林方御直仕出ヲ以被相出候事ニ被仰渡候ニ付而者、右御買上木元取扱迚も、御用材仕出之振合ヲ以、於山林方ニ、直々首尾仕、御買上金等、其時々取調相達候様仕度候、無異儀候ハヽ、御分領中江御首尾罷成候様仕度、此段相達候、以上、

十一月　大友運三郎　小嶋源四郎

伊場野清助　荒井忠五郎

遠藤善蔵

右之通、山林方係、両替所元〆等申聞令承知、無異儀候間、其心得首尾可在之候、已上、

十一月十九日　中　寛之丞

遠藤栄五郎殿

（後略）

（鳥畑家文書・一関市博物館寄託）

14 千葉確之進書状

（嵐にて寒風沢の雨舎倒れる）

安政三年（一八五七）カ

一筆啓上仕候、日増冷気ニ相成候処、御全家様益々御機嫌兎被遊御座、恐悦至極ニ奉存候、随而拙者儀、不相替勤仕罷在候間、乍憚御安喜被成下度候、然ニ、昨夜不時之南風相起リ、其後暁七ツ時頃より西北間方之風と相変リ、自然烈敷吹渡リ、明半時過ニ者狂風と申候而宜敷也、無覚風ニ相なり候ニ付、雨舎内南側中程之柱、末の方三本相折、直様屋根落懸リ候と相見得候処、又々狂風吹嵩、終ニ雨舎一宇吹倒レ、相潰レ、皆々驚布（恐怖カ）罷在候、乍併怪我人者勿論、其他御破損も無之候間、一入御安意被成下度候、只今ニ而者、少々風力相衰ひ候得共、不時之狂風不気味ニ御座候間、御推察被成下度候、先者草々騒動中申合候段申上度、如斯御座候、恐惶謹言、

九月廿日朝認　千葉確之進

大槻

大先生様

猶以御稽古人中よりも宜敷奉申上候、以上、

（「大槻習斎洋艇建造書類」　早稲田大学図書館洋学文庫）

［解説］

建艦のため寒風沢に設置されていた「雨舎」が、台風とみられる強風のため倒壊したとの報告。怪我人はなかった、とする。「雨舎」は不詳だが、明治二六年（一八九三）「開成丸造艦絵巻」（口絵参照）に描かれているドック部分の覆い屋のことか。

15 大槻習斎より上申

（嵐にて寒風沢の雨舎倒れる件）

安政三年（一八五七）カ

「小十郎様　大槻格次

自筆」

「（後筆）安政三年ヵ四年九月十八日夜」

寒風沢表、此節別条無御座候所、十九日俄なる狂風、雨舎（アマヤ）一宇御倒レ候由、別紙之通蘭学方役付ニ而、御造船稽古人千葉確之進より申聞候間、為御承知之御内達仕候、定而出入司手前よりも相達候様、右ニ付尚私義早速ニも相下リ、先ニ聞見仕、此節柄人気ニ相拘リ不申様、此度心得ニ御座候、先以不取敢自筆印符を以指添相達申候、以上、

九月廿二日

（「大槻習斎洋艇建造書類」　早稲田大学図書館洋学文庫）

［解説］

寒風沢の「御造船稽古人」であった千葉確之進の報告を受け、大槻習斎が奉行・片倉小十郎に上申したもの。此節の人気に響かないようにかないように人々の間で不信を招かないよう対応するとしている。「開成丸建艦碑」に触れられている、洋船に対する人々の不信といった状況を指すものか。

16　寒風沢での建艦景況

安政四年（一八五七）

（安政四年三月）
五日

松島ヨリ寒風沢へ渡海ス、民家四十計、夫食米ハ大代、又ハ高城辺ヨリ廻ル由也、当所ニテモ田作スレトモ、夫食ニ足ラスト云ヘリ、〇御上米船カヽリ場、并ニ御蔵、且会所等アリ、〇凶歳ノ節、米運送繁クアリシユヘ商ヒアリ、死亡ノ百姓ナキ由

一御製造船骨組出来セリ、当月下旬マテニハ御船卸ニナル由唱ヘリ、御小屋二十間余ニテ、御船ノ首尾ノ空地三間ホトツヽアリ、水際ノ高キ所ヲ崩シ、右御小屋構アリ、其御普請ノミヘモ千両モ費ヒタル由、所ノ者風聞ス、外ニ大工小屋、鍛冶小屋、人足小屋又は御役所ラシキ所アリ、大工等百七十文ツヽノ旅籠ニテ居ル由、軍艦稽古人等ハ外ニ仮屋シ居る由也、〇此日大風、波浪高シ

（「安政四年春　北方御郡日記」（抄録）『大日本古文書　家わけ　伊達家文書　九』所収、史料番号三〇四九）

［解説］

安政四年（一八五七）三月、仙台藩士加藤直治と増田小一郎（有常）から、仙台藩「北方」（宮城県北部）の町村の実見を踏まえた意見書が出された。増田は養賢堂を経て藩主・伊達慶邦の小姓を務め、諸国を遊歴した人物である（『仙台人名大辞典』）。そこに添付された視察日記から、寒風沢での建艦の様子を記した三月五日の記事を抜粋した。御城米など米穀輸送で繁栄していた集落の様子、開成丸となる船の骨組みが完成し、浸水間近であることや、水際を掘り崩して出来た「空地」（ドック）。建造に当たる職人や役所、乗組員の施設について記されている。

なお本書での『大日本古文書』からの引用は、すべて国立国

会図書館デジタルコレクションにてパブリック・ドメインで公開されているものによった。

17 軍艦名前書上

安政四年（一八五七）

易 開成丸
魏志 開済丸
申鑑 吉済丸
易 光亭丸
易 利渉丸
宗史 順済丸
安済丸
（安政四年）丁巳六月晦日
大槻格　謹考

（「大槻習斎洋艇建造書類」　早稲田大学図書館洋学文庫）

［解説］

大槻格（習斎）による軍艦名前書き上げ。冒頭に、開成丸の名前が見られる。進水を控えて作製されたものか。

18 寒風沢島造艦碑

安政四年（一八五七）

（表）
造艦碑
涌谷伊達安芸邦隆篆額
江戸姫邸儒員菅野潔撰文并書

自二宇宙形勢之変一也。造艦寔為二急務一。而艦期二干洋一製矣。特憾二其伝習之未レ久。而衆惑之難二解焉耳。仙台府学総督大槻文礼。慨然奮二力干此一。嘗造二小艦数隻干塩竈浦一。衆未レ信レ之。安政乙卯之歳。藩公将三大興二造艦之役一。特旨命二文礼一督レ之。文礼受レ命区画。時無二良工一遂建白。遣下小野寺君鳴。往二江都及豆相間一。博詢歴観。以求中其製上会都下大震。上下騒擾。事殆阻格。一日君鳴投二予家一。談及二製艦

事一。予曰。目今都下人材亦富。独可レ称為二苦心良工者一。三浦乾也其人也。君鳴一見奇レ之。薦二于藩一。公大悦。特召優遇。乃延二之本州一。委任董レ事。丙辰八月。始開二廠于寒風沢島一。乾也与二其徒一。鳩レ工服レ役。登々憑々。口授手画。千板万釘究二極精緻一。騎レ歳而艦成。儼然弗列戞多艦也。闔藩咸喜。初艦之未レ成。群議紛騰。多二沮レ之者一。公聴察無レ聴。文礼及一二有司一。又従而翊二賛之一。艦既成。喧二傳遠邇一。閭婦里童莫レ不レ称二其能一也。乾也曰。吾聞先鳴者其音遠。東北諸侯之造艦。以二此挙一為二嚆矢一。而吾二遭遇于斯一固幸矣。雖レ然他日伝習愈精。航海愈熟。良工接レ踵。而出安知二今日之隋珠一。為二他日之遼豕一乎。則吾之護二誉于今日者一非レ幸。而取二嘲于後人一。斯為二至幸一也。吾竊為二国家一望焉。予聞レ之曰。乾也不二但其工之精也。其識亦卓矣。先レ是乾也抱二荊璞于陋巷一。屠龍不售。毫二無慍色一。一旦得献二之明主一。而不三自侈二其労一。豈非二奇男子一乎。抑世無二伯楽一。驥駿死レ櫪。苟非レ得四藩公之英明武断。与三有司者之密勿二臣隣一。則乾也無レ所レ展其驥足一。而君鳴亦不レ得二与而有一力也。於戯夫事固有下出二于偶然一。而功及中久遠者上焉。若二今日之事一。則豈非乙天之待二斯藩一以二下新気運上者甲乎耶。予北游帰途過レ島。及二下艦之期一。心竊喜而賀レ之。遂記二其末一。以伝二于後一。蓋亦乾也之志也。

安政四年季歳在丁巳秋八月

江戸三浦乾也門生建石

顛

（裏）

天文方

村田善次郎　古山誠之丞　志村将輔　橋本清太夫

内池種治　佐藤久馬　森田九平　影山芳蔵

上野歓治　梅津彦三郎

門人

守屋豊治　佐藤良之進　佐伯彦三郎　砂澤安治

小野寺常治　樋渡源吾　油井順之輔　千葉確之進

熊谷彦治　伊藤謙吉　佐藤一平　佐藤新之丞

手戸玄吉　山田三平　千葉栄次郎　寒河江弥蔵

五十嵐八郎　清水繁治　庄子武四郎　庄司源七郎

別所連蔵　山口三平　樋渡章助　進藤勘左ヱ門

粟野一平　小崎義兵衛　中目恒之輔　佐藤清左ヱ門

根本兵馬　我妻仲右ヱ門　山口左次馬　剣持亮之輔
水科丁吉　長南隆助
江戸門人
長嶋定五郎　中野乾三　安西平次郎　三浦鉄太郎
鳶善太郎
江戸入門
太田長五郎
職方門人
船大工太七　中平久兵衛　野口篤三郎
御大工運十郎　同中嶋儀七
船大工甚四郎　御大工源九郎　同貞吉
御大砲人三郎　鋳砲富治　同吉兵衛
大工寅蔵　船大工平三郎　大工忠作
同友吉　船大工幸作　同繁松　同佐四郎
御大工留兵衛　船大工栄助　同義右ヱ門
同幸右ヱ門　定吉
帆前方喜兵衛　同・兵三郎
村役付
平左ヱ門　弥兵衛
組頭・富治　同貞治　同源三郎　同音吉
清右ヱ門　同栄五郎　同庄之助
硝工師・銀蔵

［解説］

寒風沢島（宮城県塩竈市）に現存する、寒風沢島での開成丸の建艦碑。塩竈市指定文化財。造艦に関わった仙台藩天文方役人や仙台・江戸の門人たちによる乾也の顕彰碑としての性格も持つ。題字は涌谷伊達家当主・伊達安芸邦隆、碑文は姫路藩儒者・菅野潔（白華）。小野寺乾也による棟梁・三浦乾也の登用、建艦に当たっての藩内での批判、伊達慶邦や大槻習斎の庇護、「東北諸侯」の嚆矢としての意義も記される。「都下地震」は安政二年一〇月の江戸地震を指すが、三浦の仙台藩仕官の契機の一つとなったか。

碑文は『仙台叢書』一八（仙台叢書刊行会　一九二九）を底本に、旧字を常用漢字に改めた。裏面の人名については黒須潔氏の採訪による。

19 三浦陶蔵へ褒賞（扶持方給付）

安政四年（一八五八）

御作事方奉行格

三浦陶蔵

軍艦製造被相頼候所、大業之儀、別而心配、昼夜無間断骨折候に付、殊之外果敢取究、畢竟増出来、船卸も無滞相備、一段之事候、依之、御扶持方拾人分被相贈候事、

（『大日本古文書　家わけ三　伊達家文書　十』所収、史料番号三四五二／仙台市博物館所蔵・伊達家文書一九五八―二）

［解説］

開成丸の造艦棟梁・三浦陶蔵（乾也）への報賞状。進水にあたって扶持一〇人分を給付。記名がないが、安政四年四月ごろか。

［参考］「楽山公治家記録」安政四年七月一三日

〇十三日　寒風沢ニ至リ、軍艦製造ノ就ルヲ観ル。製造方雇三浦陶蔵へ尽力ヲ賞シ、給米十人口ヲ増賜ス。其事ニ管スル奉行以下十三名へ服を賜フ、差アリ、松島ニ水主ノ海兵調練ヲ観ル。

20 三浦陶蔵へ褒賞（大番組へ召し出し）

安政五年（一八五八）

三浦陶蔵

軍艦御製造被相頼候処、見事に成就仕、追々大艦御製造之手本に成、抜群之成功によって、大番組に被召出、玄米百俵被下、御番所御広間被　仰付旨、御意之事、

是迄被相贈候御扶持方弐拾人分ハ、引続其身一生被下置候、

右同人

軍艦方惣棟梁、是迄之通被　仰付、列御作事奉行格被　仰付旨、御意之事、右之通、今日於　御城、和泉列座申渡候処、叵（難）有仕合奉存候段申聞候、相達　御聴申候事、

（安政五年）五月　芝多対馬

（『大日本古文書　家わけ三　伊達家文書　九』所収、史料番号三四五一／仙台市博物館所蔵・伊達家文書一九五八―一）

［解説］

三浦陶蔵（乾也）への報賞状。大番組召し出し（平士）、軍艦方惣棟梁。扶持方二〇人分の一生給付、年代比定は、史料24などから安政五年とした黒須潔氏の見解（サイト「仙台藩の天文史」）に従う。艦が落成し、芝多対馬も乗り込んだ安政五年二月から三月の試乗を無事終えた結果に対して褒賞が与えられたということになるだろう。

21 廻状（三浦陶蔵ら廻村に付）

安政五年（一八五八）

四拾九番

（郡奉行より代官、代官より大肝入への順達文言省略）

吉田龍蔵殿　　松　兵衛

三浦陶蔵義、北方・奥筋御郡金銀山、其地瀬戸山品物出産之模様、山々土性為見廻之、明十六日出立、廻村為度候条、其心得首尾可有之候、右之趣御奉行衆被聞、如此候、以上、

五月廿五日

尚以、右陶蔵并向々も、夫々令首尾候、同人一同、村田善次郎も相下候条、其心得可在之候、且道筋之義ハ、牡鹿郡先、夫より桃生、本吉、段々廻村之訳ニ候間、此段も申渡候、以上、

（鳥畑家文書・安政五年「定留」　一関市博物館寄託）

［解説］

三浦は仙台城下町の特産品であった堤焼の改良にも取り組んだことが知られる。磐井郡北方大肝入の御用留に記された廻村記録に、藩領北部の金銀山や、「瀬戸山」すなわち陶土見分のための廻村触れが残る。仙台藩天文方で、このとき軍艦方御用係だった村田善次郎が同行していることも注目される。

22 航海術御用など仰付

安政五年（一八五七）

（安政五年）

二月十三日

養賢堂へ罷出候処、左之通列席ニ而被仰付候、

御徒組

天文暦道方
御用　古山誠之丞
御徒組
豊之進嗣子
天文暦道方
御用　志村将輔

養賢堂天台御築立、航海術御用被　仰付事、
右之通、於養賢堂学頭申渡候、済而学頭へ礼ニ行、村田師方へも礼ニ行、外礼廻無之候事、

横折重判
一御徒組
一父進退御切米壱両弐歩・御扶持方四人分
　此直高　弐貫六百五拾文
一実名　恒憲（つねのり）
一年　三拾四歳
一天文暦道刊行方御用係り
一養賢堂天台御築立并航海術御用被　仰付候、
一屋敷北六番丁上杉山通角より西へ弐軒目、北側同所ニ而御触答等仕候、

右之通、拙者儀過ル十三日養賢堂天台御築立并航海術御用被　仰付ニ付、不時壱季如此相届候、以上、
安政五年　同所物書　豊之進嗣子
二月二十七日　若生順太夫受取　志村将輔
　重判
格次殿
右之通相認、古山・森田・黒沢祐吾等都合五人指出候事、

（志村恒憲「永伝自分手扣」東北大学附属図書館所蔵）

［解説］

仙台藩天文方の古山誠之丞と志村将輔（恒憲）に、養賢堂天台（天文台）の造立と航海術御用係が仰せ付けられている。開成丸の本格的な運用にあたって、天測の体制を整える意味合いがあったものか。

四　開成丸の航行

23　書開成船図後

安政六年（一八五八）

書二開成船図後一

我藩嘗際二于大東洋一。居二北門之衝一矣。非レ造二大軍艦一以鎮レ之不可也。有レ旨乃委二事於我養賢堂学頭習斎大槻先生一。先令レ造二小艦二隻一。然未得二良法一。是以安政二年乙卯冬。余受レ旨遊二相豆之間一。粗観二洋法軍艦一。還而入二江都一聞レ有二乾也三浦氏者一。嘗奉二大府之命一。赴二長崎学一造艦術於洋人一。輒往而晤。一見如レ旧、其論可レ聴焉。乃二薦之藩一。相伴而帰、先生大喜。令三守屋・佐藤・佐伯・砂澤四氏従二事于斯一。三年丙辰正月七日。余与二三浦氏一偕住二塩竈浦一。先私相二造艦之場于宮城郡高城郷寒風沢一。是月二十八日造艦之命下矣。命二三浦氏一為二総棟梁一。班列二作事奉行。四月始於二寒風沢島一励レ山開レ場。大集二胥徒一。以二八月二十六日一。行二所謂手斧建之礼一。国相及諸有司来会焉。亦大僧都良覚院。奉レ命来修二鎮護之法一。四年丁巳六月二十八日艦成矣。下二之海一賜二名開成船一。蓋取二意於開レ物成レ務一也。七月十三日。公親臨観焉。労二与レ事者一賞賜有差。守屋・佐藤・佐伯・砂澤四氏最有レ功。賜二竹雀章服一蓋特恩也。十月法蓮寺主受レ命。七日間修二中法於一宮塩竈社一七箇日。十二日又来修二于艦上一。十二月朔始試二調練一。出納司松枝氏為二船将一。三浦氏為二航海測量指南統取一祝砲三発。帆走数里。遂泊二石浜岬外一。五年戊午二月晦。又試二航海一。国相芝田氏。船将松枝氏。学頭習斎先生。及諸有司従者。水手凡八十一人矣。以二卯中刻一。解レ纜風潮最便。連帆齊張快駛十数里。以二未上刻一。抵二牡鹿郡折之浜一下レ碇而泊以習。三月朔帰。四月十九日。公又臨観焉有二賞賜一。五月十一日擢二三浦氏于大番隊士一。賜二世禄百石及終身廩米二十口一。十二月命二大航海于養賢堂一。乃将レ輸二学田米五百二十石于江都一。二十五日開レ帆北赴二気仙沼一。再南赴二相馬界一以為二操練一。遂以二月十二日南駛。十七日達二浦賀港一。尋入二江都一。来観者如レ

雲。咸称二其成功一嘖々不レ措焉。識者或云。洪拡レ之以及二大艦一則。亦無二北顧之憂一矣。三浦氏親作二此図一。鏤梓以頒二諸友一。予素与二造艦及航海之事一。因応二四氏之嘱一記二其年月一如レ此。蓋其顛末載在二於寒風沢造艦之碑一不二復贅一焉。

安政六年巳未。盛夏鳳谷小野寺謙。識二于養賢堂南廨一。

（小野寺鳳谷「東藩野乗」下）

［解説］

開成丸造艦の監督に当たった小野寺鳳谷による建艦の経緯、進水、近海や、初の江戸航海となった安政六年初頭の航海の様子についての叙述。三浦乾也による「開成丸調練帰帆図」の作製や寒風沢での造艦碑の建設にも触れられている。三浦の門人でもあった四名の乗員の求めで記したとする。

冒頭部分に「大東洋」（太平洋）に面する仙台藩は、北を守るかなめ（衝）として戦艦の建造が必須であるとあり、仙台藩士の自己認識や、海防意識がうかがえる。。

前掲史料番号7と関わって、建艦の起工式には仙台城下町の修験者・良覚院が祈祷を行い、進水後には法蓮寺と塩竈神社の両方が祈祷を行っていることがわかる。

本書は『仙台叢書』八（仙台叢書刊行会　一九二五年）所収本を底本として、旧字は新字に改めた。

24

廻状

（軍艦航行につき）

安政五年（一八五七）

拾壱番

左之通、出入司衆被仰聞候間、各其心得首尾可在之候、以上、

二月廿日　　冨　惣右衛門

海岸付御郡

御代官衆中

吉田龍佐殿　松　兵衛

高城於寒風沢御製造之軍艦、此度御出来、近海早速御乗廻、来年初旬江戸表へも被相廻事ニ、対馬殿被仰談、引切津方本〆等へ申渡候条、其御心得、異船と疑敷模様ニ而ハ如何ニ候間、前以御分領中海岸付へ夫々為心得之、首尾可有之候、以上、

二月十九日

右之通相廻来、別紙被仰渡相渡候条首尾有之、遠藤小四郎へ可被指出候、以上、

斎　門之助

桃生南方　本吉南北

気仙

大肝入衆

右御紙面、桃生御代官斎藤門之助様より被相渡、御役廻来、気仙止ニ付、南方御代官遠藤小四郎様へ返達致候事、

（安政五年「定留」気仙郡吉田大肝入文書）

［解説］

安政五年二月、開成丸の近海での航海、さらに翌年から江戸への航行が行われることが、奉行・芝多対馬からの通達という形で周知された。その際に異国船と誤認しないよう、藩領沿岸の村々に通達。この史料も、前掲大西論文で取り上げられたものである。

25 三浦陶蔵らより上申（航海景況報知など）

安政六年（一八五七）

開成丸、旧臘十二月廿七日於牡鹿石巻川口御穀積立相済、第二度目調練ニ取立候段、相達置候通ニ有之、其後同日八時頃川口出帆、小淵へ碇泊、廿八日同所出帆、黒崎ヲ廻し、金華山迫門を乗廻、夫より江ノ島を過、桃生郡大須浜通りニ沖掛り碇泊、廿九日同所出帆、本吉郡気仙沼松崎前ニ碇泊仕居候、来ル四日同所出帆、風催ニ寄リ、気仙郡唐丹迄乗廻、夫より帰帆、金華山沖大廻リニ乗廻し、相馬境宇田郡沖通リ、寒風沢へ帰帆仕度見詰ニ御座候、御船之義ハ、一円汚氷相通リ不申、乗組御人数ハ別条無御座候、然ニ水手一統より江戸為御登之義、来ル十五日頃迄ニ御出帆相成候様仕度段申出候、来月ニ相至リ候得ハ、二八月にて難風折々相起候時候ニ有之、東海上御穀船始、船々出帆難仕段申出、無余義訳ニ有之、水手共申出候迄ニも無之、拙者共も相心得居候義ニ御座候間、寒風沢へ帰帆前、諸事為御登之義、何レニも御吟味相成居度、此段相達申候、以上、

正月朔日　三浦陶蔵

村田善次郎

尚以、航海地理図之義ハ、寒風沢ニ帰帆之上、委細取調相廻候様仕候間、為御承知申シ達候、以上、

（「大槻習斎洋艇建造書類」早稲田大学図書館洋学文庫）

［解説］

開成丸棟梁・三浦乾也と村田善次郎からの状況報告。安政五年十二月二七日に石巻で米穀を積み終えて北上し、本吉郡松崎（宮城県気仙沼市）停泊中に記されたもの。仙台領近海順調な航海を踏まえ、寒風沢帰港後、一月一五日頃に江戸へ出港したい旨を述べる。小野寺鳳谷「開成丸航海日記」が記録した、仙台領内での航海に関する史料である。

26 書上（開成丸乗組員）

安政六年（一八五七）

安政六年分

一正月十二日、寒風沢開成丸、江戸為御登に付、乗組人数左之通、

船将　清水左門　　軍艦方測量　村田善次郎
　　指南統取
測量　古山誠之丞　　測量　森田九平
按針役　　手伝役

右之外、調役方・砲術方役々も乗船被仰付候、右ハ略ス、

（志村恒憲「永伝自分手扣」東北大学附属図書館所蔵）

［解説］

安政六年一月一二日、開成丸の初めての江戸に向けた航行への乗り組みを仰せ付けられた人々の名前を、志村恒憲が書き留めたもの。村田、古山、森田の三名は、建造開始以来関わってきた人々である。

27 大槻習斎意見書下書（開成丸に大砲搭載の件）

安政六年（一八五七）

「因幡様　大槻格次」（朱書）　下書

安政六年乙未　」」

此度開成丸江、御物置御備米積入、江戸表江被相登候ニ付、武器ハ不被相載、荷船ニ仕立候様、別而被仰渡、承知仕候処、先以武器之義ハ、軍艦ニ付、一寸も難手放御品ニ有之、仍而不得止大小鉄炮之数、聊御省略相成候儀者格別、全ク武器不被相載と申義ハ、第一軍艦ニ対し不吉之兆ニ而、且公義海軍御創制最初之御趣意ニ対シ候而も、如何之様奉存候間、是非多少ハ兎も角も、大炮等此末共被相載置候様御吟味被成下度

候品ハ、鉄炮・玉薬之儀ハ、軍艦之守ニ而、縦令ハ武士之帯刀仕候如く、軍法ニおゐても、暫時寝食も難手放シ廉有之、且是非遠沖数百里之外乗流シ候節ハ、砲声を以船中之勇気を相助ケ、邪気悪魔ヲ一新不仕候得者、難成神理有之、仍而夷人商船すら、玉薬ハ必相備置候ものニ有之、況ヤ（後欠）

（「大槻習斎洋艇建造書類」早稲田大学図書館洋学文庫）

［解説］

初めての江戸航海に際して、仙台藩では大砲や弾薬の積載を省いて米穀のみを輸送しようとしていた。それに対する大槻習斎の異論。艦船にとっての大砲は、武士の刀と同じく一時も手放すべきではないとする。従来の穀船と同様に扱おうとする藩首脳陣と、あくまで海防を重視する習斎の意識の差違が見られる。後欠なのが惜しまれる。

28 開成丸乗船報告

安政六年（一八五九）

開成丸江乗込、御国海岸乗廻候模様取調、左ニ一書を以申達候、

一正月十七日　開成丸江乗込申候、

一右御造船江、総人数四拾三、四人乗込筈候、

一御穀五百弐拾石余、大筒拾壱、弐挺、外ニケヘル并玉薬槍等之類迄御積入ニ相成筈候、

一同十八日、風悪、碇泊、

一同十九日昼九ツ過、申酉之風ニ而宮城石浜口出帆、午江走、暮六時亘理花釜沖碇泊、凡十三里余、壱時三里余の割、

一同廿日、風聊有之、暁七ツ前同所出帆、宇田釣師浜沖迄乗廻し、直々行戻り、暮六ツ時頃名取北釜沖碇泊、凡八里余、壱時壱里余の割、

一同廿一日明六ツ時過、子ノ風ニ而、寅卯江同所出帆、夕七ツ過遠島福貴浦前碇泊、凡十二里余、壱時弐里余之割、

一同廿二日、廿三日、風悪、福貴浦前留船、

一同廿四日、戌亥ノ風少々有、明六ツ時同所出帆、未申へ走、追々風様無然、暮六ツ時過宮戸沖碇泊、凡八里余、壱時壱里余の割、

一同廿五日、明六時戌亥の風に而、同所出帆、昼四時時石浜口迄帰帆、凡二里余、壱時壱里余の割、

一総計里数四十三里余、時数大凡弐拾四時程、
一御船江乗込中、両日計、大風と申程ニ風立、余程動揺仕、乍去棚等より器物の落候事も無之、順風・逆風に不拘、風を受走候節、片まかり者仕候得共、都而動揺者薄候、
一日本大船江乗込候事無之、右船江比、何者宜敷、何者不足と押極兼候得共、指当り順風等に而走候節之片釣合も薄、其他左右へ之間切り等者格別自由ニ而、宜敷由に相聞得候、
一順風を受走候節之遅速者相損不申候得共、日本船江比候ハヽ、堅固に御造船相成候方より、右に准し、貫目も格別相増、其上風ヲ真帆ニ受候帆小く候間、遅速之間ハ、御造船之方劣候哉と存候、外ニ者多分弁理之方と相聞得候、尤只今ニ而は、水主等も余ほと手練候様ニ相見得、先近頃乗廻候通ニ而ハ、颶風・大嵐等ニ而も会不申候ハヽ、怪我等者有之間敷と存候間、遠方江之調練被仰付候而も可然と存候、
右之通御談に付取調、申達候、以上、
正月廿九日　境野吉之助

（仙台市博物館所蔵・伊達家文書一九一二―二）

［解説］

仙台藩士・境野吉之助による、開成丸の乗船報告。この時の航海では寒風沢を出航して、宇多郡釣師浜（福島県新地町）から遠島福貴浦（宮城県石巻市）を航行している。『仙台市史』史料編2近世1藩政（仙台市　一九九六年）には、安政五年の記録として全文所収されているが、史料31の志村茂斎日記の記載から、安政六年一月一六日の「小調練」の記録だとわかる。

境野は「日本大船」への乗船経験はないとしており、評価については一定の留保が必要だが、風向きにかかわらず安定した航行、重量と帆の小ささに起因する速度の遅さ、向かい風の際の「間切り」航行のしやすさといった乗組員の証言を記録する。また水主たちの調練が行き届いており、遠方への調練も可能だと評している。

この後の二月二二日、開成丸は初の江戸への航行に出発。四月二一日に帰還している。

五　開成丸との日々

29　開成丸航海日誌

安政六年（一八五九）頃

開成丸航海日誌

小野寺篤謙私記

我軍艦開成丸は、江戸の人乾也三浦氏、本藩の　命を奉じて、惣棟梁の職に居り、宮城郡高城寒風沢に於て、安政三年八月廿六日手斧始して、同四年十一月製造全く成就す。其成功抜群なりとて　御感あり。

今茲五月、三浦氏は世禄百俵にて大番組に召出され、外に二十口の米は江戸にて給り（たまわり）、御作事奉行の格たらしむ。

然るに養賢堂学頭大槻殿、始より此事に与かり、功有るにより、学田より出る米穀を此船に積入れ、江戸へ運送すへき御許しを蒙り、いざや此事始に、封内の近海を乗試すべしとて、先乗組の人々を定む。

一惣棟梁　航海按針　測量方指南役　三浦陶蔵

一航海按針測量惣主立　本〆御用弁　村田善次郎

一砲術方主立　船中締り役兼　大槻礼輔

◎「開成丸航海日記」凡例

一、本書の「開成丸航海日誌」は、国立国会図書館デジタルコレクションにてパブリック・ドメインにて公開されている『仙台叢書』一七巻（仙台叢書刊行会　一九二八年）所収の活字本を底本に、宮城県図書館所蔵の写本にて校訂した。

一、通読の便を考慮して、適宜、句読点・濁点・改行・字下げを施した。

一、漢字は常用漢字を原則として通行の字体を用いた。

一、見消等の訂正箇所は、訂正後の文字のみを翻字した。

一、踊り字の「ゝ」「〻」「〳〵」は、宮城県図書館本の表記に従った。

一、本文に誤りが認められる場合も底本のままとし、当該文字右脇に（　）を用いて注記した。

一蘭学方測量方兼　御役人兼　佐藤良之進
一主立御役人　砲術方兼　油井順之輔
一砲術方　測量方手伝　不寝番役兼　佐藤新之丞
一測量方　不寝番役兼　森田九平
一砲術方　測量方手伝　不寝番役兼　手戸玄吉
一按針測量方主立　船中締り役兼　古山誠之丞
一学問方　地理方書記役兼　茂庭輿七郎内　小野寺謙治
一砲術方測量方手伝　不寝番兼　同謙治悴　小野寺常治
以上　士拾壱人
一子供ニ而　砲術方見習　組抜　佐藤一平
一同　測量方見習　御旗本足軽運治次男　梅津彦三郎
一同　砲術方太鼓打見習　組抜弥蔵悴　寒河江才治
一軍艦方下役假役　鍛冶主立兼　齋藤富治
一船大工　世話役　繁松
一帆前方手伝　養賢堂御掃除人頭兼　喜兵衛

以上六人

一水主主立　兵三郎

一御道具締り兼　松島御水主組頭仮役　内海銀右衛門

一賄　巳之助

一舵取親司　忠八

一表廻り　市三郎

一同　重右衛門

一同　直治

一賄手伝　帆前方世話役兼　忠治

一舵取手伝　安治

一同　清五郎

一帆前方世話方手伝　竹松

一以下並水手　松島御水主　五郎助

一同　源五郎

一同　源次郎代　喜兵衛

一同　久六代　松蔵

一同　安吉代　亀吉
一同　宗兵衛代　春吉
一同　新屋　運八
一炊夫　庄助
一同　鶴吉

以上水手弐拾人
都合乗組三拾七人

右は大小の事、悉く惣棟梁の指揮に任すべき旨、学頭衆より命せられ、此外船中守るべきの条々、残る所なく惣主立これを承り、十二月十五日惣主立村田氏、彦三郎を供に連て塩釜に下る。

一十二月十六日。暴暖といふ程也。

惣棟梁三浦氏、久しく予が家に在りけれは、一卒を供に連れ、予と常治とともに、昼九つ過一同発足し、塩釜町に着せし頃は黄昏に及びぬ。下役富治、其外日新丸・天開丸の下役阿部三四郎・齋藤善五郎、御船方主立惣兵衛・忠蔵等、町の入口迄出迎て、軍艦御用酒屋三浦屋勘左衛門方え案内し、惣主立一同宿に饗応、誠に懇なり。

一十七日。天未だ明ざるうちより起出て、御用船に上る。時しも西北風烈しく吹来れ

ども、難なく、朝五つ頃寒風沢に着き、別に宿りを求めるにも及ばず、直に開成丸に船住居す。水手中の喜大方ならず。

扨陸上は、此日も殊に寒かりしかば、船中は硝子窓より明りを取り、寒風少しも吹入るべき透間なければ、懸置く処の験温器は、毎日五十一・二度に上れり。これによりて、はじめの程は風邪に当るもの多し。其故は、中和温暖の気候なる所に居りて、俄かに廿度前後の甲板の上に登り、海天の寒気に触るゝ故なり。然れども、これも久しく馴れたれば、後には風ひく者もなかりし。

一十八日。西風烈し。昼九つ頃、野蒜詰津方御役人佐藤源八郎、御蔵守等引連来りて、軍艦へ附属する器械等、残らず引渡すべき旨申により、調役守屋豊治、佐藤良之進、下役長南清八郎等立合、此方にては惣主立御役人方にて帳面引合受取る。

一十九日。風穏也。惣主立、四つ頃出船して、兵三郎・巳之助・安治を引連て野蒜へ赴き、養賢堂御穀百俵余を受取、直に艀下船え積入れ、其夜石ノ巻より湊御蔵迄赴きし由なり。

一廿日。風なし、少し暖也。夜四つ頃、惣主立石ノ巻より帰る。御穀受取の都合ことごとく調べたるよし。

一廿一日。暁より西北風にて雨降る。

惣主立、又々諸事取極めの為とて、養賢堂へ馳登る。序に船中にて用ゆべき不足の品々、塩釜町より買求んとて、雨風を衝て、合羽引かふりて船を出すに、桂島前にて雨晴けれとも、風はいよいよ烈しくなり、激浪幾度となく舳より打こみ、胸を

冷すこと度々なり。帆は三分の一程張て、辛ふして塩釜に着き、惣主立と別れて、色々の買物せしに、日暮けれは、勘左衛門方に寓る。

一廿二日。風吹止ます。油井順之輔、既に廿日に来りけれども、風波の為に留りたるとて、此日一同舟を出すに、沖合に至れは、いやまし激浪、昨日にまさりて覚ゆ。予も始より此造舶の事に与かり、寒風沢へ往来せしこと、已に百二・三十度に及へり。此度を以て第一の風浪とすべし。身にひきまとへたる雨合羽のたゝまりたる間に、潮水数升溜りたりし。

四つ過る頃寒風沢に至り、夜に入り風静也。佐藤新之丞・手戸玄吉并養賢堂の喜兵衛来る。

此喜兵衛は、文政十二年（天保十二年）の頃、御城米船の水手して呂宗国に漂流し、暗厄利亜（アンゲリア）国の船に送られて清国に至り、広東、舟山、乍浦を経て、長崎に送り返されたる者也。西洋法の船故に、此者をして試みさせしめんとて、学頭衆より遣されたるもの也。

一廿三日。朝より晴なれとも波立強く、野蒜より艀下船来らす。四時頃、惣主立并森田九平・彦三郎来る。勘左衛門は清酒壱斗入拾五樽積入て、富治と共に来り。其酒を悉く船中の用に献ず。

開帆の用意も悉く調りけれは、惣棟梁は兼て約せし如く、惣水手壱人に付て米弐俵に金弐歩宛を与へ、新雇の者共へは金壱分宛を与ふ。難有と頓首して礼謝す。

一廿四日。快晴にて、野蒜より艀下船漕来りけれは、水主惣かかりにて之を船中に積

入る。惣主立は又々湊御蔵の米を受取積出すべしとて、新之丞・常治、其外水手弐人を引連て石巻に赴く。

此夜は水手一統旧例なりとて、鎮守明神の宮に通夜し、海上安全を祷る事也。惣棟梁はしめ有合ふ人々、夜に入て宮に詣て拝礼す。

一廿五日。快晴にて、西北の風そよ〳〵と吹来けれは、舟よそおひを預かしめ具りたる故に、小網あまた結び付て、繋り船にもやひを取り、水主とも手繰にして、朝五つ頃寒風沢を捲出し、掛田島（陰田島）の向ふなる石浜崎のほとりに碇を下し、保命船伝馬舟を左右の舷に釣上て、八時過る頃祝砲数発して、帆を巻立て、太洋さして走出す。岸上には村中の老若男女充満て見送れる、いと勇まし。

按針役は、測量の間に机を安し、羅針を置て方向を記す。測量方は舵楼に登り、量程車を海中に投じ、三拾秒の砂漏を案じて之を量るに、船の走ること拾五間に及ふ。則ぢ（ママ）我一時に一里廿四丁を走るべきに当れり。之を第一測となす。沖走りの時には潮の上下と、風の替る時には幾度も此法を以て測量する也。

既にして船入島、木の島を横に見て、宮戸島を乗過ぎ、葉島をかはして、夜五つ時第二測をなす。三十秒に十八間を得たり。則一時に二里走りに当る。

四つ時より、桃生郡深谷に属する大曲村の沖五尋半の処に碇泊す。此日行程三里十三丁余を走れり。祝砲三発して、船中一統酒肴を賜はりて開帆を祝す。夜に入り風静に、星計晴朗なり。

按に、東海通行の船は、順風にて烈しく吹時は、一時の間に四・五里より六里

を走るべし。横風を受て間切り走りなれは、乃至三・四里なるべし。一時に十里走りといへるは、すさまじき暴風にて、命にかけて走る程の事也。かゝる事は一年の内に数ふる計りのよし。西書云、軽風と云は、一秒時に十尺乃至十五尺至る。烈風は廿五尺より三十五尺に至り、暴風は四十尺より六十尺に至る。此外に颶風、旋風など云は、言葉にも述がたき程の風にて、西洋の大舶も、動もすれは覆没の禍に係る程の事也と云。

一廿六日。海天晴わたり、船上の霜は雪の如し。寒気も殊に甚し。

朝飯後より帆仕度して、少し乗出し、石巻より艀下船の乗出るをも待けれども、弥増に西北の風烈しく、遂に船は来らす。

かゝる内に、八つ頃より沖合い真黒に曇り、南風吹来れは、すは、時ならぬ東南の暴風雨も起もするやと、水主ども危ふみ、若吹来らは折の浜にや乗下さん、賀続浦にや走り入らんと、評議まち〳〵なるに、夕方かけて西の山の端霽上り、風西北に転じけれは、舶をすゝめて、門ノ脇村釜の沖十余丁の処に碇を下す。

日暮る時より、雪ちら〳〵降出し、風勢烈しく吹来り、動揺殊に甚し。然れども舶は固より堅固なり。乗たる人は、三年来寒風沢島に勤仕して、水上を平地の如く心得たれは、誰一人舟心ある者もなかりし。夜八つ頃雪晴けれは、水手共悉く起上りて、船上の雪を掻掃ふて、又打臥しぬ。

一廿七日。暁より西風北に移り、波浪も起らん模様なれば、今日は艀下船いかゝあらんと思ひけるに、五つ過る頃小舟一艘漕来りて、只今御穀を積出すべき、まゝ御用

意あるべし、と注進あれは、即ち帆を揚て、川口沖十町計りの処に進みて碇を下す。既にして湊御蔵より米八百俵余、二艘の舟に積入れて漕来り。外に荷直しといへる、米を積へき若者共弐拾人程群り来りて、曳々声して積入る。此時惣主立、其外悉く帰り来れり。御船蔵御役人矢野七右衛門、下役両人、御船升入菊地屋清十郎、武山屋八右衛門、其外附属の者共数十人、伝馬舟二艘にて来る。酒肴を出してこれをもてなす。

既にして御穀も積入畢りければ、夕七時四分、戌亥の風にて帆を巻揚、東をさして走り出す。第一測に二十間を得たり。一時に二里八丁を走るべし。

風勢いたく盛になり。渡ノ波の塩焼く浜を乗過て、巳午の方に針路を取り、御崎明神の岬を廻し、小竹浜・生草島を過ぐ。左の山下は折の浜とて、今花三月初度航海の時、国相芝多殿、若老佐々殿、并松枝殿、学頭衆をはじめ九十余人乗組て一泊せし処也。

夫より桃の浦・竹の浦・狐崎を過き、田代島を右に眺め、網地島と小渕浜の間なる鮫島と云小島の側四・五町計に帆を下す。深十五尋也。此日は行程五里三丁を走る。

日暮る後より、風波静になりけれは、惣棟梁より水手共に祝とて酒樽一つを与ひ、測量の間も酒肴を陳らね、打興して一酌す。

一廿八日。昨夜より風穏なりけれは、夜明る頃より甲板の上に登れは、時しも紅日滄海より飛昇り、田代・鮫島・鮎川等の怪岸奇壁を照し出し、遥に西には蛇ヶ岳白

髭・不忘の山等、雪の色は恰も玉をのべたる如く、麓には富山・牧山・三国山等、白沙に沿て翠を連らぬ。寔に壮観といふべし。

今日は式日なれば、惣棟梁主立をはじめ。皆々礼服して船魂の神を拜す。水手も同じく拜賀をなす。

五つ時四分に及んで、申酉の風吹起れは、水手共いさみ立ち、これこそ天より賜る便風なり、いざや黒崎の岬を北に押廻せと、忙しく帆を巻揚る。

第一測に十七間を得たり。一時に一里三十二丁を走るべし。此処はさしも名たる難所なれども、此日は歳の暮、極寒の節には、二日となき穏なる日和なれば、細波瀲灩として、湖水を渉るに異ならず。

鮎川の岸上に、数多の猿とも、小猿を愛して遊ひ戯れ、峯の上には無数の野馬、友を呼て嘶き走る、いと興あり。忽看る海中物あり。魚とも見へず、獣にもあらず、幾度となく波浪の間に出没す。あしかとかいふ物にやあらん。船中いよいよ興に入けり。

長渡島（ふたわたし）の東に当り、危礁乱立して、激浪雪を散すが如き、此を犬磯と号す。夏に至れば、通路の船、此間より針路を定て、単に走る処なり。舟人伝云、神代の時犬ありて、此処より泳き出し、下総国銚子の岬にかけ登り、初て一声吠えたる故、其地を名付て犬吠と称すと。其説怪誕、素より弁を待すといへ共、此処より海底一道の巌石、犬吠に連り、魚蝦これに依て夥しく生育す。是以東海は他に勝れて大漁ありと。其説或は然らん乎。

船、既に黒崎の岬をかはせば、金花山（金華山）巍然として海面に現れ出る。麓円かに頂尖り。実に巨鼇の宝珠を戴きて。浮み出たる趣あり。抑此御山は、天朝始て黄金を奉りたる霊山にて、霊験殊に著しるしく（ママ）、近きあたりは元より也、東海を渉る船々、皆押なへて、偏に御山々々と唱ふるは、独此御山の事也。鮎川より渡る処を、山雉の渡しと云。斜に廿四丁と云り。両山相迫りたる迫門内なれは、潮の進退甚早き処なれども、日和よけれは、何事もなく。皆々舷に倚りて四方の景色を打眺む。弁才天の祠・大金寺抔見ゆる処に至りて、水手とも手洗ひ、嗽きて、升の内に白米を盛り、之を海中に撒て、合掌して拝礼す。

北に当りて、大洋中に突兀たる島を江の島と云。属島三つあり。東に有をあし島と云。北に有をひらしまとも、笠かいとも云。何とも人家は無し。江の島には漁家七十軒計りにて、大罪人を流刑する処也。

遙の北に、翠黛縹渺として海中にさし出たるは、本吉郡の諸岬にして、頂尖くして雪を被るものは氷の上山なり。窿然として諸山の表に蟠りて。雪色最燦爛たるは五葉山也。皆々この壮観に目を縦まゝにし、彼を指し、此を語る。

其ひまに、早くも迫門を乗過れば、風勢山々に礙られ、暫しは帆足も定らず。元より北は、水色薄萌黄にあらずして、薄紺色をなせり。啻に深浅に係れるのみにもあらざるべし。風既に定り、新山・泊りの浜に添て、此を臨んで走り出す。

寄磯の浜を離るゝ十数丁にして、二つの島あり。二股と名付く。此辺岩壁百仞（ヘン）崔嵬として峙ち、怪岸奇石は潮水来てこれに触れ、万馬の躍るに異ならす。風景誠に

云んかたなし。此辺暗礁最多くして、航海に熟せざる者は乗抜がたき難処也。二股と江の島の間は、二里余も隔りたれども、此をば乗らず、寄磯の間の狭き迫門口を、帆足を繰り、楫を転じ、辛じて乗過たり。

四つ半頃より、申酉の風となる。第二測に二十五間を得たり。一時に三里十丁を走るべし。

日脚も既に八つに至り、第三測に三十間也。一時に三里十二丁に当る。水手ども、今宵は出島に碇泊せんとしけれとも、惣棟梁はかゝる便風に、などて船を進めぬ法や有る、楫も直させ、いよいよ北に舟を遣るに、舟の傾くこと十一度に及へり。

七つ頃に至りて、風勢次第に北に転す。此より大洋中に乗出し、二度・三度も大間切に間切走らば、気仙の地方に今宵の内に走り着くこと難きにあらねど、山風の烈しく吹来る時節には、水手とも地方を離れて、乗行ことを深く恐るゝ習なり。殊には何地までも、正しく指したる航海にもあらねば、あらぬ艱苦して夜走りせんも無益なりと、舳を返して、大須の沖の荒灘に。深さ三十二尋の処に、麻の大綱を下して碇を下す。行程は八里三十四丁に及べり。宵の内は波風高く、動揺しきりなりけれども、夜半過る頃より稍穏になりぬ。

夜四つ頃過地震す。又九つ頃地震す。海中の地震は、はじめに山に鳴ひゝきて、海水下よりゆり上る様に覚るなり。

一廿九日。暁より天気よく、風も次第に西の方に吹廻しかは、去らば帆支度すべしと

て、金星東に登るや否や、碇を引揚げ、東方白む頃、ほひ遣り出しの帆を巻立、順風なれば、真帆をも張て走り出す。第一測に二十二間を得たり。一時に二里十六丁を走るべし。

又日の出を測量するに、辰の九度より出る。既にして長面（なかつら）・追波（おつは）を左に見て、歌津の岬に船を進む。

四つ頃に至り、風少しもなき事小半時計り。帆を張たるままにて洋中に漂よふ。これを帆係りと称すとなん。既にして酉戌の風吹来れは、風上間切に走り出す。第二測に十八間を得たり。一時に二里に当る。

午中に及て、太陽高度を測るに、三十八度四十二分也。此よりして、風は次第に酉より申に移り、さがと称する風になり、進む事稍速し。第三測に二十二間半を得たり。二里八丁を走るべし。

昼九半時、第三測に二十二間半を得たり。二里十八丁を走るべし。船は次第に北に進み、見るうちに小泉・大谷の大湾を過きて、七つ時頃、大島と波路上の間に至る。此地は塩場ありて、播州流の石釜にて塩を煮るを以て、其品頗るよし。此岬に岩井崎といふ、怪岸連り、洞穴多く、潮汐を呑吐して、鯨の潮を噴が如し。此あたり黒岩・白岩などいふ巨巌海面に突出し、又陰怪の暗礁ありて、最乗易からざる処なれは。此入口にて碇を下す。深は七尋也。行程は十里五丁に及べり。

則ち大島・波路上の村々へ、案内の曳舟を命じければ、大島村の肝入九兵衛と云もの、早くも来りて指図をなす。島の者共、珍らしき御船を始て見たる事なれば、

我も々々と小舟にとり乗り押来りて、四拾五人に及ふ。長磯村よりも拾壱人、弐艘に乗りて漕来り。

船を北に曳入ること二十余丁、暮過る頃、大島の亀山と松崎村の間に至りて碇泊す。波路上村よりも弐拾人計り曳舟に出たれども、間に合はずして帰りたりとて、肝入与惣兵衛と云もの来りければ、曳舟の者共へ残らす酒を賜る。此辺は、米価頗る貴き処にて、殆ど江戸と相類す。当時は金壱両に六斗四升に当るよし。其故に、清酒は下さまの者は、猥りに飲得べきにもあらねば、殊の外喜べるさまにて、頓首して携へ帰りぬ。

此処、北は鹿折より気仙沼の湾を限り、東は大島の亀山高くそびへ、西は松崎より長磯の山に、屏風を廻したる如く打囲みたれば、波風殊に穏にして、家の内に寝たるが如し。寒風沢を乗出してより、海路二十七里十九丁に及ぶ。其内に風なくして帆係りせしと、曳舟にて曳入れたるは、其数を除く。

一晦日。水天殊にすみ渡り、岩に連る村々は、炊烟横さまにたなびき、松しま、弁天島なと云るかたはらに。水鳥多く群れ遊ぶさま。真に江湖の趣あり。

此松崎は、旧の国老鮎貝殿の領地にて、此人ここに在住なれば、惣主立はふるき懇意なり。惣棟梁も今茲の五月、北の方を巡りし頃、打連て見参せし人なれば、惣主立は船より下りてこれを訪ふ。

又此村の肝入角兵衛と云もの来りて申様は、何角（くれ）に御用の為め、小舟壱艘昼夜ともに指上置候まゝ、外にも指かゝりし御用をば、御心置なく承るべし。又片浜の組

頭伝吉と申者の内に、風呂を焼かせ置候まま、御入下さるべしとねんごろに申、殊勝の事也。

気仙沼の湊は、僅に一里を隔てざれは、船大工太七・弟甚四郎等、小舟に乗りて来り賀す。

此太七は、過る乙卯の年、予に隨て伊豆の国戸田浦に往て、鄂羅(ろしや)人の造れるスコーネル船を見て、夫より浦賀の鳳凰丸、横浜の朝日丸を観畢り、江戸に至りて、惣棟梁を吹挙するの時に与かり、頗る軍艦の事に縁にし有るにより、寒風沢島に業を興す時より、太七を挙て船大工の棟梁として、甚四郎をば世話役の頭となし、三年此船を働きたる功また少なからざるより、御金を賜りて褒賞する。此者共も、かくまて力を尽くせし御船の、思はずも我ふるさとに廻り来たれば、其喜はいはん方なく、座に感涙を催したるも道理なり。

五つ過る頃より、気仙沼は申すに及はず、唐桑・鹿折・赤岩・岩付・長磯・波地(路)上・大島・松崎の村々より、拝見の為とて、老若男女のむれ来ること、幾千人といふ、かぎりもなく、船中の混雑、譬るに物なく、これには人々殆ど困し果たりき。

夜に入り、祝砲に小筒六挺・拾発づゝ連発して、大砲を一発す。山海にこたまして、其響夥し。船中一統酒肴を賜ふて歳暮を賀す。

一正月元日。暁色殊に麗はし。水手ども、八つ時より起出て、乗初の式あり。頗る古風にて、いと目出度し。其後に酒・肴・吸物なと、手を尽してとりならべ、献酬の礼あり。舟歌をうたへて祝をなす。其歌に、

正月ひとよの　初夢に　きさらぎ山の　楠を
舟につくりし　はやおろし
白銀柱を　おしたてゝ　こがねのせみを　ふくませて
みなは手なはに　ことの糸
綾や錦を帆に掛て
宝の島に乗こんで　数の宝を積こんで
あなたの蔵におさめおく

初春のゆき　緋おどしの　きせなりも　みな小桜となりにけり
夏は卯の花　たきねの水に　あらひかは
秋となりての　その色は　いつもいくさにかつ色の
紅葉にまかふ　にしきかは
冬は雪根に　そらはれて　おもふかたきを　討とめて
長き其名を　あげまきや
かぶとの星の　菊の座も　花やかにこそ　おとし毛の
つるぎはむこにいたさす　弓は袋におさめけり
富貴の御代とぞ　なりにけり。

右の歌、壱つづゝの後に、はやしあり。
目出たのソラわか枝もイヱーさアかアよりのイヱーコノ葉もイン

後にしげるといへる言葉あれども、これは唄はず、十分に満るをきらふ意なりとぞ。

明はなれて、伝馬舟に水手ども打乗り、太鼓を打て、かけ声かけ、御船を三遍めぐりて、直に此地の御崎明神に参詣す。悉く古法あるよし也。船中は一統に上下を着し、船魂の神、及び諸神諸仏も礼拝して、新玉の春の目出度を賀す。此日は天色拭ふが如く、仲春の風光の如し。珍しき日和なり。

又々拝見の群り集る、きのふの如し。

夕方より、士以上は肝入方へ、水手共は伝吉方へ行て、風呂に浴す。身体殊に爽快を覚ふ。

夜に入り、年始の御祝とて、一統に酒肴を賜ふ。各詩を賦し、歌をよみ、発句など作り、打興して、思はず夜を更したり。

一二日。朝より天気よく。波風最穏かなり。五つ前より昨の如く。拝見のもの群り来りて、引もきらず。

四つ頃には、松崎邑主の夫人、大勢にて參られ、船中のつれ〴〵を慰めよとて、煮たる温飩弐桶、帆立貝百計り、豆腐百丁、漬物色々、其外珍らしき飲食ものあまた取揃て贈り給はる。船中にても酒肴取ならべて。饗しまいらす。大に興に入りて帰らる。引続て、御嫡子太郎平殿・御伯父勇之進殿も被参。

夕方に一峰といふ俳諧行脚の者来る。江戸の生れにて、此頃気仙沼に杖を留るよし也。さきに惣棟梁一面の交りあるよしにて、かゝる紛忙の中にも、風流の情自ら

止みがたく、昨夜口ずさみたるを発句として、表六句を、酒杯のひまに巻たるもおかし。

あら磯も波の音なく明の春　　乾也
静にわたる初船のさま　　一峰
山々も霞て今朝は賑やきに　　鳳谷
ほのかに見ゆる遠の村里　　漸堂
続なから莚敷足す月の影　　谷
あふけば高く雁のむれあふ　　明哲

一三日。繁霜雪の如く、日の出殊にうるはし。

此日は俗に不成就日とて、事始せぬ習ゆへ、御船は乗出すまじき旨、水手共かたく申によりて、素より逗留のつもり故、夙より起て松崎より水を汲取り、又気仙沼の初市日なれば、炭薪の類買求めて。数十日の用意事足りぬ。

朝五つ頃、松崎邑主、初野場の帰也とて參らる。此家にては旧例として、此日家来鉄砲を携ひ、小舟に乗出して、おもひ〳〵に水鳥を討て、献る事也とぞ。

打つゞいて御隠居が參らる。今年八十四歳のよし。容貌潤沢ありて、言語応接少しも老耄の態なし。矍鑠たる様子、実に驚たり。当時弐拾四・五歳の妾を置て、懐胎にて居るよし、珍しき事なり。

今日も拝見の者、引もきらず。其内には乗組の人々、古き親戚もあり、知る人もありて、応接誠に煩しきを覚ふ。

八つ過る頃より、松崎の居館にて招に応じ、惣棟梁・惣主立・大槻・古川・予と五人にて參り、村落に薄茶出て、麦飯の馳走あり。風呂を焼き、髪を結ひ、其上には、邑主は書を好み給ふて、紙筆とりならへて、各々席書して楽しみ、暮々より酒宴になり、此地の名物帆立貝・みる喰(ママ)・赤貝なといふもの取揃て、厚きもてなしに、夫人達まて出給ふて、興しあふて酔を尽しぬ。

扨又、今朝の野場に出たる家の子供帰り来りて、門前にて数十発の鉄砲を筒払し、ゑ物の水鳥二・三十羽積双べて、邑主の見参に入まいらす。其中より大小の鴨四羽を頒ちて贈らる。拝謝して暇申せしは、四つ過る頃にぞありし。

一四日。晴たり。昨日より出帆の用意備りぬれは、未夜明ぬうちより祝砲数発して碇を抜く。此処は、水底は深き泥なるに、重さ百六十貫目の洋法碇に、鉄の鎖を附たるを入置たれば、此頃の大風にゆり込まれ、之を揚るに暫し間どりぬ。

かかる内、松崎へ命じ置たる曳舟三艘に弐拾人程取乗りて、もやいを附て、御船を曳出すに、風は少しもなかりければ、又々四方より拝見の者共群り来り。中には曳舟に手伝ふ者多かりき。

波地上前にて碇を下ろし、暫し休らふ。水手共申様は、南の方、空の模様も曇候へば、南東の風や起らん、出帆如何可仕やと申故、南の風吹来らば、幸これに過す、直さま綾里(りやうり)の岬をかはし、唐桑の浜まで押渡らん、舵をかはせ、と下知しけれは、各帆支度する間に、西風少し吹起れば、九つ時七分に、舳を巳の十五度に向て走り出す。第一測に二十間を得たり。一時に二里八丁を走るべし。夫より巳午にて

針路を取りて乗廻す。

素より此航海は、封内近海乗渡るべき御下知なれば、気仙郡を境とする筈なるに、時既に立春の候に係り、風勢定りなき時節にて、大方は西北の大風、西南の烈風あるべき空曇る故、強て此時気仙へ下り登るへき日和なく、むなしく僻陬の地に数日を費すも、無益の至り也。天より吹来る風に任せ、南に帰るも亦宜なりと、南をさして、既に五・六里も走りたる頃、黒雲次第に四方を覆ひ、風勢漸く南に移り、雪にても降来らんか、又は東南（いなさ）の大時化にや変ぜんかと、衆心危み疑けれは、暮頃より舳を東に転じ、大洋さして乗出し、綾里の岬に漕付んとす。夜五時四分、第二測に十五間を得たり。

四つ過る頃、少しく地方に寄るべしとて。又々西に舳を転ず。扨かゝる夜走りの時は、最大事の乗前なれは、表廻りは舳にあり、楫取は楫車を取て艫に立つ。表廻りより、面楫、取楫、よふそろ、と透間もなく呼合ふ事なり。測量の間には按針測量の人々燭を点じて、船時計に方儀を按じ、時と方向とを記し、但し我水手は常に地方を離れ、沖中に吹出さるゝを深く恐れ、又地方には暗礁・伏沙有るを罹るゝ故に、夜は必よき程に、沖に出しては地方によせ、又沖に出す故、行先はなか〳〵延ぬ事也。

暁八つ時、風少しもなく、暫し漂ひ、八半頃に丑寅の風次第に吹来り、第三測に四十間を得たり。四里十六丁を走るべし。

一五日。明はなるゝ頃より、西方の霧次第に散じ、五葉山・室根山雪色、漸く鮮に見

へ渡る。御船は終夜洋中に往来せしに、昨夜東に乗出したる処よりは、僅に数里の南に在りて、歌津の岬に向ふたるのみ也。風も段々真面に吹替れは、此風にては、縦令金華山を廻し得るとも、相馬の岬に取付くべし。去らば始に定めたる如く、綾里を目がけて船を進めよと、又々楫を転して、舳を戌の廿度に向け、又子の十五度に移す。

かくして走ること一時計り、九つ半頃に及て、又々風は西北に転じ、白波立て吹来れば、北に向ては走りがたく、又方向を未の十五度に転ず。

元来我国の水手は、天度を知らず、地理もくらく、日月星辰は本よりの事にて、只に陸地の山々を目当とし、己れ己れの心得にて航海するの習なれば、万一山の見へざる処に至れば、神仏の応護を頼み、命の助からんことのみ専一とすること故、冬分の東南風稀なる節には、いかなる便風吹といへども、洋中を走ることなく、又横風の烈しきに逢ば、舷より波を打込るゝ故、荷物をぬらし、或は投棄て、此災を免るゝ事故に、常に地方にてもせりあるきて手間どり、石巻より僅に百八十里の海路を、一ヶ年に四度は最上、次は三度、次は二度位をもって常とする事也。今日も始より意を決して、遠沖を走り抜かば、日の落ぬ間に金華山をも通し果べきに、無用の処を往来して、此にて終に日を暮したり。

月落て、既に暗夜となれは、二股の迫門は乗入ることは為し難く、碇をこゝにや下さんと、深浅儀を投じたるに、四十五尋に余りぬれば、水手も遂にやむことを得す、大勇猛心を起して、江の島の外に舟を進む。八つ頃より小雨降出せしに、半時

計りにて晴上り、星の光りも次第に明らかに、西北の風も左まて強からされば、暁かけて金花山を大廻しして、大磯の南にて、東方はじめて白し。

一六日。天色南より西にかけてくもり、西より北は山々霽（晴渡）渡りて、風よき程に吹来る。第四測に二十間を得たり。一時に二里八丁に当る。

田代島を南の方一里余に見て走りぬれは、石巻は既に七里か外に有べし。牧山蕎麦の神（曽波神）・神取山等、水に浮て島の如し。宮戸・寒風沢も次第に近く見得渡れど、逆風なれば、ひたすらに南より西にかけて走る。昼九つ時、第五測三十間を得たり。三里十二丁を走るべし。

南に長くさし出たるは、岩城に近き請戸の岬なり。相馬の原釜は、既に其中程にあり。扨此まゝにて直に走らは、相馬路をも越へけれど、元より近海調練なれば、余に走り過しても、帰るへき順風なければ、無益に時日を費す故、八時少し前に、名取郡閖上浜と藤塚浜の沖一里計の処に碇を下す。底は十三尋にて、熊白と名付る地なり。熊白とは黒き細沙と、白き貝がらの交りたる也。暗礁には無き地にて、至極よきかゝり場のよし。波風も次第に静になれば、翌は七種の祝なれば、碇泊の祝砲二発して、船中に酒肴を賜ふ。此航海、二夜三日に走ること四十里十二丁に当れり。

一七日。朝より天気よし。沖かゝりなれば、七種の粥もなし。有合ふ餅など取集め、雑煮して式日の賀をなす。

五つ半頃、少々南風起りければ、帆を巻しとも風勢足らず、はか〳〵しくも走り

得ず、幾途となく間切あるきて、暮過ぎ、遂に宮城郡松が浜の前に碇を下す。此日、相州浦賀に登り同じさまに押ならんて間切かゝり、是は明る八日の夕方、鰐ヶ渕にかゝりたり。

扨夜半過る頃に至り、又々風吹起れば、直さま帆を巻立て、暁かけて、寒風沢の前なる掛田島のならびに碇を入れ、ボート二発祝砲して夜を明す。此航海往復日数十四日、何れもいさゝか障りなく、さまて辛き目も見ずして、初度の乗筋日数十四日を経て、往復行程七十八里に余れり。かくまで目出度帰帆せしは、是偏に我　君の蒼生を恵ませ給ふ御徳の致すところ、且は塩釜一宮へ、此御船造営のはじめより。幾度となく難有き御祷り有ける応護なるべしと、船中一統感嘆に堪ざりき。一八日。御船帰航の様子を見て、寒風沢に在合う役々は固より也、水手の親族悦び合ふて来り、賀する者引きもきらず、互に無事を祝しぬ。

惣主立は、事の由を養賢堂の学頭衆へ委細に告奉らんとて、小舟に駕して走り登れり。

遂に御船をは石浜の崎に移して碇を下し、浦賀に登るべき仰を待つ。

（宮城県図書館所蔵・『仙台叢書』一七巻所収）

［解説］

養賢堂の兵学主任で、開成丸建艦の指揮を執った小野寺鳳谷による、安政五年一二月一六日から翌六年一月八日にかけての開成丸の仙台領沿岸北部への航海記録。船の速度や海底深

の緻密な測定が行われている。一二月二二日条からは、広東からイギリス船で帰国した元漂流民が、西洋艦船乗船の経験を買われて養賢堂に配されていることもわかる。

一方で、塩竈など地元出身の開成丸乗員たちの慣習、海から見た沿岸部の景観や、浦々での人々との交流についての詳細な描写など、「日誌」という表題ながら、開成丸での旅を題材とした紀行文としての性格も併せ持った記録である。

開成丸はこの後、二月に江戸への航海に出発する。その航海記録として、寒風沢から浦賀（神奈川県横須賀市）までの航路図が現存する（神戸大学海事博物館所蔵）。

30 志村恒憲日記

安政六年（一八五九）

（注）本書への所収にあたって、原本では冒頭部分のみに記されている記載事項の分類（「日干支」、「天時」、「人事」、「天気」）を、右頁記載部分の冒頭に追記している。

安政六年歳次己未日記

仙台　志村茂齋記

正月大

日干支	天時	人事	天気
一日壬申		高城寒風沢ニテ越年勤居、詰合算取役芳蔵也、	晨晴、静、一点無雲、午中同然トモ風起、昏晴、風、午中より少々強シ、終日天気好、
二日癸酉	立春、正月節有七時一分ニ入		晨晴、四方雲亙、午中同、夜同、風、終日晴、静、
三日甲戌		○屋形様御野初ニ付御出馬、御供一騎打人数夥敷有之由、	晨晴、浮雲四方亙、午中晴、昏同晴、処々浮雲、夜同晴、静、終日半晴、静、
四日乙亥			晨晴、午中曇、昏同、夜同、終日気静、
五日丙子	堅氷解弛		晨曇、午中薄曇、昏晴、夜薄雲遮亙、終日薄曇、暖気、
六日丁丑			晨曇、風、午同晴、昏晴、夜同、風、終日曇、或晴、

○屋形様御野初ニ付、御供勢も夥敷、且花々敷、別而当春者一騎打人数多候由、於寒風沢承候事、

七日戊寅　晨曇、度々浮風、明六ツ時后風頻、吹雪
一二花飛、午中薄曇、昏晴、終日朦朧浮
雲、

八日己酉　今晩七時頃、開成丸石浜湊入、御　晨曇、午中薄曇、昏同、曇、温暖、夜中
船本吉郡松崎村ニ而越年之由、　雨、湿土浅シ、

九日庚辰　野蒜津方御役所江年始ニ行候事、　晨晴、浮雲多、午中浮雲、風、昏同、風
本〆遠藤貞吉、御役人佐藤源八郎　強、晴、風、昏后飛雪、終日浮雲、風、
詰居、

十日辛巳　昨九日野蒜行不果、今日行、夜五　晨晴、午中同、昏同、夜同、終日半晴、
半時頃寒風沢御役所江戻り、　無風、

十一日壬午　晨晴、午中同、風、午前雨散、空曇、烈
風暫時、止、昏曇、夜同、風、終日半
晴、浮雲、寒強、

十二日癸未　晨曇、朝五時より雪、風、四時頃止、午
中晴、昏同、風、夜同、終日半晴、

十三日甲申　御役付有之、御奉行芝田対馬再　晨晴、午中同、昏同、風、夜曇、終日
役、其外五十人程御用召有之由承　晴、風、微寒、夕七ツ半過、西方日辺両
候、　所ニ而、薄白ク日形ヲ映移ス、

十日、橋本清太夫方より旧
冬壱役壱人御呼出被仰渡
候ヶ条巻、写を以相廻候
事、右被仰渡ハ、御倹約御
年限継之被仰渡し也、

日干支	天時	人事	天気
十四日乙酉			晨曇、午中同八時頃より雨、昏後晴風、夜浮雲、終日半曇半雨、
十五日丙戌	日食皆既　京暦ニ云、夕七時八分下の方よりかけはしめ、暮六時七分甚しく、夜五時六分上の右におはる、西国までハかけなから出へし、	茂齋、於高城寒風沢測量月食、手伝算取役芳蔵致候事、	晨浮雲、風、午中同晴、昏同、風、夕七時過地震、夜晴、処々浮雲亙、終日半晴、
十六丁亥		開成丸、今一応小調練致候様被仰出、御目付境野吉之輔、御徒目付野田伊左衛門乗組ニ被下、	晨晴、午中曇、静、晴、昏曇、昏後霰、夜曇、終日曇、暖、
十七戊子	雨水、正月中昼九時一分、昼五十刻半、夜四十九半		晨晴、午中同、昏同、夜同、終日半晴、
十八己丑			晨曇、午中薄曇、午后風、浮雲、昏薄雲処々掩、夜晴、黒雲低処々亙、終日晴、風、

十九庚寅　開成丸調練ニ出帆致、御目付等乗組之上、御目付境野吉之輔、御徒目付野田伊左衛門、　晨晴、午中同、昏薄雲掩稀々也、夜晴、終日半晴、昼四時頃雪花散飛、風、

二十辛卯　晨晴、午中曇、昏晴、夜同、終日浮雲多満々、午后風、至、夜止、

廿一壬辰　晨晴、午中曇、昏同、夜同、終日曇、朝五時半頃雪花飛散、

廿二癸巳　晨曇、午中曇、昏薄雲掩天、夜晴、終日曇陰々、

廿三甲午　晨晴、午中同、昏晴、夜同、終日晴、

廿四乙未　晨晴、午中曇、昏雨、夜同、終日曇、蒙朧、夜、雨長、

廿五丙申　小羽虫飛成郡上下ス　算取役芳蔵登仙、上野歓次与御城ルヲ始テ見ル、啓蟄　下表ニ而交代之都合、ニ先タツ虫也、　晨晴、午中同、昏薄雲掩稀々也、夜晴、終日半晴、

廿六丁酉　上野歓次寒風沢着、開成丸帰帆、同所へ間懸、三浦陶蔵等登仙、　晨晴、午中曇、八時頃細雨、昏同、夜同、終日半曇半雨、

廿七日戊戌　晨曇、霧、朝五時頃より又雨、午中同、午后迄、昏曇、夜同、追々霧、終日雨、折々止曇、

廿六日、水戸百性（百姓）六人、片倉・芝田両人登城之途中ニ而駕籠訴致し、百性と八乍申、実ハ水戸家中之由也、右訴相取挙ニ相成、於外陣屋御示談相済、皆々帰国候由也、

此節京江戸囚人等夥敷有之、京都よりハ　公家衆三人被相下、其他宮様付之者も有之、其内婦人も囚人ニ相成候由也、

又江戸・神奈川ニ而外国交易御免被成下ニ付、右所へ勝手次第商人出店望可申由、公儀御触之由ニ承り及候、世之中不穏様ニ相見得候事、

日干支	天時	人事	天気
廿八己亥		村田善次郎寒風沢より登仙致候事、此日算法小成ヲ著述ス、	晨曇、霧、午中曇、夕七時頃青天ヲ見ル、格別春色ヲ催ス、昏薄雲、稀々如大星見ユ、
廿九庚子			晨浮雲、風強、日出後雪花飛、鳶鳴飛、午中曇、風、昏、夜共晴トモ四方黒雲、掩風、
三十辛丑		茂斎野蒜へ行、昼八ツ時前ニ寒風沢へ帰ル、	晨曇、午中曇、昏薄雲掩天、夜晴、終日曇、陰々、
二月小			
一日壬寅			晨浮雲、朝五ツ時頃霰、午中薄曇、昏晴、夜同、終日半晴、
二日癸卯	二月節、朝四時四分啓蟄、		晨晴、午中同、昏同、夜薄曇、終日寒気、
三日甲辰			晨雨、午中薄曇、夕七時雪降、昏雪、夜雨、終日寒、
四日乙巳		茂斎、高城寒風沢より登仙致候事、	晨雨、風弱、四時頃雪、晴、午中四つ風、午后動風、昏同、夜同、終日寒風、

五日丙午

亡母七回忌ニ付、法事弔之事致候、
御石塔相建候、亡兄之石塔、亡妹
共寄セ建、

晨浮雲、朝五ツ時頃霰、午中薄曇、昏
晴、夜同、終日半晴、

六日丁未

晨浮雲、朝五ツ時頃霰、午中薄曇、昏
晴、夜同、終日半晴、

七日戊申

晨曇、静、午中曇、昏同、夜同、終日
静、寒気少弛、

八日乙酉

村田善次郎寒風沢江出村、直々御
舟ニ而、江戸江御乗組致候ニ付相
承渡海之故、

晨浮雲、朝五ツ時頃霰、午中薄曇、昏
晴、夜同、終日半晴、

九日庚戌

晨晴、五時頃より動風、午中晴、烈風、
昏同、夜五時過風止、終日寒風、晴、

十日辛亥

晨晴、午中暖和、静、夕七時頃より薄
曇、昏曇、夜五時頃より細雨、終日薄
曇、静、暖気、

十一壬子

晨大雨、明半時頃より雪雨交降、午中
雪、午后雨、七時頃より霙、昏晴、静、
夜同、終日雨雪后晴、静、

日干支	天時	人事	天気
十二癸丑		朝五ツ時開成丸寒風沢出帆、江戸江相廻ス、船将清水左門、本〆統取役村田師、	晨晴、五時頃より風、午中晴、風弱、暖和、昏薄曇、風止、夜薄曇、終日暖和、晴、
十三甲寅			晨曇、静、午中曇、午后風起、夕七時頃より晴、風、昏同晴、風、夜同、終陰晴、風寒、
十四乙卯			晨晴、風、午中同、昏同、星月晴朗、夜同、風止、静、終日晴、寒風、
十五丙辰			晨浮雲、静、午中同、昏晴、風、夜風弱、終日半晴、風寒、
十六丁巳		開成丸、十二日江戸江出帆致候処、直シテ十三日又出走致候由、橋本清太夫方より申聞候事、	晨晴、静、午中同、昏、夜共同、終日晴静、
十七戊午	春分、二月中昼九時一分、		晨晴、午中同、昏同、夜同、終日晴、静、
十八己未			晨晴、午中同、昏同、夜同、終日晴静、

十九庚申　米山計娘婿養子致候処、不和之筋　晨晴、午中同、昏同、夜浮雲、同、終日
相出シ、離別之吟味、此日大略片　半晴、静、
付、蓬田方へ茂斎方より計収娘相
送届候事、

二十辛酉　晨曇、午中薄曇、昏同、夜同、終日曇、
静、

廿一壬戌　晨晴、午中同、薄曇、昏同、夜同、終日
半晴、

廿二癸亥　門間栄之進より、門間家娘へ取合　晨曇、午中同、午前より風、昏晴、夜
婚礼之招相請候事、　同、終日風折々強吹、半晴、

廿三甲子　晨晴、午中同、昏薄曇、夜曇、

廿四乙丑　晨曇、午中同、昏曇中天纔浮雲中且星、
夜曇、風、

廿五丙子　開成丸、過ル十七日江戸・浦賀へ　晨浮雲、朝五ツ時頃霰、午中薄曇、昏
入津致候由、寒風沢下り船便ニ而　晴、夜同、終日半晴、
承候由、右寒風沢勤役橋本清太夫
より申聞候ニ付、志村将輔殿右紙
面之趣学頭へ直達致候事、

昨廿五日
○寒風沢勤仕橋本清太夫方より、紙面ヲ以開成丸過ル十七日浦賀へ入津致候由、寒風沢下り船便ニ而承り候様申聞候ニ付、今廿六日養賢堂学頭衆へ其趣将輔殿直達致候事、

日干支	天時	人事	天気
廿六丁卯			晨晴、午中日寒、午后風弥次、昏晴、夜同、昏前徒雨暫時止、
廿七戊辰			晨晴、午中同、昏同、夜同、
廿八己巳		養賢堂学頭衆より、開成丸過ル十七日浦賀へ入津候趣、村田善次郎宿元へ申聞候、四日限ノ御下飛脚ヲ以、江戸より申来候由、海路絵図并達書壱通、学頭衆迄指出候為メ、如此候事、	晨晴、午中同、昏同、夜同、
廿九庚午			晨晴、午中同、昏同、夜同、
三月大			
一日辛未			晨浮雲、雪、午中同、八時頃雨、昏同、夜雨、夜五時頃雷声電、夜半雨晴曇、
二日壬申	夜八時頃出火、元櫓丁細横丁南東ノ角、	日蝕・月離・稚草片付候事、日食・月食手係リニ入、右最初推歩ニ始る、	晨晴、午中同、昏同、夜同、
三日癸酉	清明、三月節夕七時ニ入、	南館宇治来り、米山家之儀相談、済口之方々打合候事、	晨浮雲、午中晴、昏同、夜同、

四日甲戌　晨晴、午中同、昏同、夜同、風、

五日乙亥　於大原、井上陽吉方砲術御覧有之　晨晴、午中曇、昏同、夜同、
事、

六日丙子　藤倉恒輔所へ相越、米山家之儀相　晨曇、午中同、昏同、夜雨、
談致置候事、

七日丁丑　晨雨、午中曇、昏雨、昏後雨止、夜同
曇、深更より雨、

八日戊寅　晨雨、午中雨止、薄曇、雷声遠聞ゆ、
風、昏曇、夜同、

九日己卯　晨曇、午中薄曇、午后細雨、昏晴、夜
同、

十日庚辰　出火、袋町之内、　米山与一郎不縁之妻、同人家へ立　晨晴、午中同、昏同、夜同、
戻り、直々脇方へ客ニ行、

十一辛巳　蓬田左膳方へ鶴子相遣候事、濱田　晨晴、午中同、昏同、夜浮雲、
景五郎江紙面ヲ以相談、

十二壬午　晨浮雲、午中晴、昏同、夜同　又昼九ツ
半雨、暫時雷声二声、

十三癸未　水沢町出火、七百三拾九家、穀物　晨浮雲、午中晴、午后薄曇、昏曇、夜
類夥敷焼失、　同、

日干支	天時	人事	天気
十四甲申			晨曇、朝四時頃細雨、午中雨、昏同、
十五乙酉	土用、夜五時一分ニ、		晨曇、朝五時頃より風、午中薄曇、風、昏浮雲、夜同、
十六丙戌		門間栄之進所へ行、相談之儀有之事、	晨晴、午中同、昏同、夜同、
十七丁亥			晨曇、午中同、昏近細雨、昏同、夜同、
十八戊子			晨雨、午中同、昏同、夜同、終日雨、冷気、
十九己丑	穀雨、三月中今晩九時二分、		晨曇、午中同、昏同、夜同、
二十庚寅			晨曇、午中薄曇、昏同、夜同、
廿一辛卯			晨浮雲、午中晴、昏同、夜同、
廿二壬辰		御親様御登仙、御郡方御普請御役人除き御達被遊候事、右達ハ明廿三日日付也、	晨晴、午中同、昏同、夜同、
廿三癸巳			晨晴、午中同、昏薄曇、夜同、暁八時頃地震、
廿四甲午			晨曇、午中晴、昏同、夜同、

廿五乙未　晨晴、午中同、昏薄曇、夜同、

廿六丙申　晨曇、午中同、昏雨、夜同、

廿七丁酉　濱田方へ紙面相遣候事、　晨雨、午中同、昏晴、夜同、浮雲、

廿八戊戌　晨浮雲、午中同、昏曇、夜同、夜中雨、

廿九己亥　朝五ツ半頃地震、　京都より書状到着、土御門殿より掌莫扇三本・暦壱冊頂戴致候事、　晨雨、午中薄曇、昏同、夜雨、

三十庚子　八十八夜　晨雨、午中同、昏同、夜同、

四月小

一日辛丑　晨曇、午中同、昏近細雨、昏同、夜同、

二日壬寅　濱田ニ途中ニ而出合、用事聞済、　晨曇、午中同、昏近細雨、昏同、夜同、

三日癸卯　晨曇、午中同、昏近細雨、昏同、夜同、

四日甲辰　立夏、四月節朝四時六分ニ入、　蒲生浜源左衛門態々参シ、請方ニ付て也、　晨晴、午中同、昏曇、夜同、

五日乙巳　晨曇、午中薄曇、八ツ時より雨、折々晴れ而ハ又雨、昏曇、夜薄曇、

六日丙午　朝北七番丁野へ、改正手三百枚程棄物あり、右ハ御蔵方ニ而二日之夜被盗致候品ニ可有之風唱也、突切なし札之由、　晨晴、午中同、昏同、夜同、夜更曇、

梨花盛、或落花ニナル樹も間々アリ、

日干支	天時	人事	天気
七日丁未			晨晴、午中同、昏曇、夜同、
八日戊申			晨浮雲、午中同、昏曇、夜同、
九日己酉			晨薄曇、晴、午中晴、昏薄曇、夜同、
十日庚戌		蚕種、幾三郎より相送候事、同日より少々起始、	晨浮雲、午中曇、昏雨、夜同、
十一辛亥			晨雨、午中雨、昏曇、夜同、
十二壬子			晨曇、細雨、午中雨、昏同、夜同、深更雨齋、
十三癸丑	朝五時半頃地震、	昨日菊野勇五郎病死之事申聞候事、	晨曇、午中薄曇、昏同、夜同　昼八時頃急雨、暮方まて晴、或降、処々雲除、
十四甲寅	昼頃地震、		晨晴、午中同、昏曇、夜同、
十五乙卯			晨晴、午中同、昏曇、夜同、
十六丙辰			晨晴、午中薄曇、昏曇、夜同、月濛瀧見雲中、
十七丁巳	鶉始鳴　内池行孝聞候由、		晨曇、午中晴、昏同、夜同、
十八戊午		寒風沢紙面相立、上野登仙并交代方也、	晨晴、午中同、昏曇、夜同、

十九己未　芳賀勇五郎方へ紙面相立候事、御　晨浮雲、午中雨、朝四時前より雨、昏
用便ニ而立候事、　同、夜曇、

廿日庚申　小満四月中、今暁九　晨曇、午中晴、風、昏曇有之、雲中大星
時三分、　現ゆ、夜曇、

廿一辛酉　開成丸、寒風沢入津致候由、乗組　晨曇、午中同、昏雨、夜同、
一統無異儀之由、

廿二壬戌　真明様御一周忌、鳴物三日先より　晨細雨、午中曇、昏同、夜晴、四方低雲
被相禁候事、　互、

廿三癸亥　森田九平、開成丸より上陸、帰　晨浮雲、午中同、昏曇、夜同、
宅、此日荒増人数登仙致候事、

廿四甲子　昨日夕七時頃、小松三左衛門母中　晨曇、午中同、昏同、夜同　昼中折々細
風ニ而斃、　雨、

廿五乙丑　蒲生ノ源左衛門来ル、請方ニ付而　晨曇、午中同、昏同、夜同、
也、金弐朱相渡候事、

廿六丙寅　晨晴、午中同、昏同、夜同、

廿七丁卯　晨浮雲、午中同、昏同、夜曇、

廿八戊辰　村田師方へ紙面相立、同人寒風沢　晨曇、午中薄曇、昏曇、夜同　后星、夜
在船中也、　四方低浮雲、

廿九己巳　晨晴、午中同、昏浮雲、夜曇、

日干支	天時	人事	天気
五月小			
一日庚午		村田師御城下着、直々同人着届致事、	晨浮雲、午中同、昏曇、夜同、
二日辛未		今朝、小松三左衛門母病死致候由、知請候事、	晨雨、午中同、昏同、夜曇、
三日壬申		推前手元出終、皆々も大概片付候事、	晨曇、午中同、昏同、夜微雨、
四日癸酉			晨曇、午中同、昏同、夜雨、
五日甲戌		此日古山寒風沢より到着之事、	晨曇、午中薄曇、昏晴、夜同、
六日乙亥	芒種五月節、昼八時五分ニ入、		晨晴、午中同、昏同、夜同、
七日丙子			晨晴、午中同、昏晴、夜浮雲、
八日丁丑			晨曇、午中晴、昏薄曇、夜曇、
九日戊寅			晨曇、午中曇、昏薄曇、月濛朧、夜曇、
十日己卯			晨晴、午中同、昏同、夜同、
十一庚辰		米山家之儀、村田師より打合有之事、	晨曇、午中同、昏同、夜同、

十二辛巳　晨晴、午中同、昏曇、夜同、大星専ら見ゆ、深更晴、

十三壬午　晨晴、午中同、昏同、夜同、

十四癸未　晨晴、午中同、昏同、夜同、

十五甲申　京都状、先生宅ニ而相認候事、　晨曇、午中同、夕方折々雨、昏曇、夜同、

十六乙酉　晨曇、午中同、昏同、夜中より雨、

十七丙戌　晨雨、午中曇、昏同、夜同、

十八丁亥　晨浮雲、午中曇、昏同、夜同、

十九戊子　晨浮雲、午中曇、昏浮雲、夜同、

廿日己丑　晨曇、晨后細雨、午中雨、昏同、夜同、

廿一庚寅　晨雨、午中同、昏同、夜同、夜中雨強、

廿二辛卯　夏至、朝五時八分、　晨雨、午中同、昏同、夜同、

廿三壬辰　晨曇、午中薄曇、昏浮雲、夜同、

廿四癸巳　朝四時半頃地震、　晨曇、午中薄曇、昏曇、夜同、

廿五甲午　京都状、御進物方へ指出候事、　晨曇、午中薄曇、昏曇、夜同、

廿六乙未　晨曇、午中同、昏細雨、夜曇、

日干支	天時	人事	天気
廿七丙申	蚕繭ニ成ル、過ル十八日頃より成始ムもあり、此日より遅きもあり、		晨曇、午中迄雨、午中曇、夕七時頃雨、昏同、夜曇、
廿八丁酉			晨曇、午中薄曇、昏曇、夜雨、細雨也、
廿九戊戌			晨曇、午中細雨、昏雨、夜同、
六月大			
一日己亥			晨雨、午中曇、昏同、夜同、
二日庚子			晨曇、午中晴、昏同、
三日辛丑	半夏生	内池種治、天文方御用被仰付候事、	晨晴、午中同、昏曇、夜同、
四日壬寅			晨曇、午中同、昏曇、夜同、
五日癸卯			晨曇、午中同、昏同、夜同、
六日甲辰		絹糸取始、	晨曇、午中同、昏雨、夜同、
七日乙巳			晨雨、午中同、昏曇、夜、昏、后又雨、夜晴、
八日丙午			晨曇、午中晴、昏薄曇、夜曇、

九日丁未　小暑六月節、今晩八時八分ニ入、　西洋諸藩之金銀、目量立以通用之義、公義より御触有之事、承知致候、　晨曇、午中晴、昏同、夜同、

十日戊申　晨雨、午中同、昏曇、夜浮雲、

十一己酉　晨浮雲、午中薄曇、昏曇、夜同、

十二庚戌　勇吾登仙、御扶持方金請取ため、　晨曇、午中薄曇、昏曇、夜同、

十三辛亥　此節水戸家ニ而騒動、籠城之事風唱、　晨曇、午中晴、雷声、無雨、北方黒雲朶畳、昏薄曇、夜同、

十四壬子　勇吾帰村致候事、絹生糸払ニ立候事、　晨曇、午中晴、午后雷雨継而雷声、午中同、昏薄曇、夜曇、

十五癸丑　晨曇、午中晴、昏薄曇、夜曇　同、午中過雷雨強、

十六甲寅　晨曇、午中晴、昏浮雲、夜同、

十七乙卯　晨浮雲、午中同、昏同、夜曇、

十八丙辰　蚕蝶出終る、未蝶不出もあり、　御蔵方へ相出候処、刻限過ニ付、空帰宅、　晨曇、午中晴、昏同、夜同、昏近時雨、

十九丁巳　御蔵方へ相出、夏受御切米書付取戻候事、　晨晴、午中同、昏薄曇、夜同、

日干支	天時	人事	天気
廿日戊午		文輔手立首筋引違ニ付、猪股へ相越、療治相請候所、其日之内ニ平愈致候事、	晨晴、午中同、昏薄曇、夜同、
廿一己未	土用明六時九分ニ入、		晨曇、午中晴、昏浮雲、夜晴、
廿二庚申			晨浮雲月晴朗、午中晴、昏同、夜同、
廿三辛酉	昼八時頃地震、		晨曇、午中晴、昏同、夜浮雲、
廿四壬戌			晨曇、午中晴、昏同、夜同、
廿五癸亥	炎暑、甚敷大暑、六月中暮六時一分、		晨曇、午中雨、昏同、夜曇昼中折々雨、
廿六甲子			晨曇、午前雨、午中曇、昏同、夜同、
廿七乙丑		此日五郎兵衛ヲ相送候事紙面添、	晨曇、細霧、朝五時前ニ而雨、午中同、昏近雨晴曇、昏曇、夜同、
廿八丙寅		此日御作事方へ紙面相遣候事、翌廿九日届候由也、	晨曇、午中晴、昏曇、夜同、
廿九丁卯			晨曇、午中同、昏同、夜同、
三十戊辰		村田師方へ紙面ヲ以、米山鶴子事申述候事、	晨曇、午中晴、昏浮雲、夜晴、
七月小			

一日己巳　濱田清左衛門伯父へ相談之事致し候、　晨晴、午中薄曇、昏雨、夜同、夜中雨止、

二日庚午　玉手八太夫下し相談、天台之儀相頼候事、并村田善次郎寒風沢止り、　晨曇、午中同、昏雨、夜同、

三日辛未　晨雨、午中雨止晴、昏雨、夜同、

四日壬申　福原へ紙面相遣候事、返礼状也、　晨雨、午中曇細雨折々降、昏曇、夜同、

五日癸酉　晨雨、午中雨止曇、昏細雨、夜同暁近雨強、

六日甲戌　濱田方へ先達而之相談挨拶を責ニ行候事、両三日中挨拶可致候由之事申聞置候事、　晨雨、午中同、昏曇、夜雨、

七日乙亥　晨雨、午中曇、昏同、夜浮雲、午前、午后折々時雨、

八日丙子　晨浮雲、午中晴、昏浮雲、夜同、

九日丁丑　晨曇、午中薄雲、昏曇、夜雨、

十日戊寅　立秋七月節、昼九時ニ入、　晨曇或細雨、午中曇、昏同処し大星見ゆ、夜同、

十一己卯　伊達安房殿御卒去、鳴物十三日まて被相留候事、　晨曇、午中晴、昏同、夜同、

十五日夜村田師之宅江出席之人数

天文方御用　古山漸作
同　志村茂斎
同　橋本清太夫
稽古人　佐藤久馬
算取役　黒須祐五郎
同　郡山芳蔵
手伝役　上野歓治
同　芳賀今朝治
外ニ披見　先生自分門弟
孫八

日干支	天時	人事	天気
十二庚辰			晨雨、午中細雨、昏同、夜曇、
十三辛巳			晨曇、午中晴、昏同、夜同、
十四壬午		明日月食有之付、測量道具仕懸ニ出席致候事、	晨曇、午中同、昏同、夜浮雲、
十五癸未	月食皆既　夜四時七分左ノ上ヨリカケハジメ、八ツ時甚シク、七ツ時三分下ノ右ニヲワル、	月食ニ付、村田宅へ集会、天曇故不能測量、唯黒雲薄見月欵、	晨浮雲、午中同、昏同、夜同、
十六甲申			晨浮雲、午中同、昏同、夜同、
十七乙酉		五星推歩ニ取立事、	晨曇、午中薄曇、昏細雨、夜曇、
十八丙戌		蒲生浜源左衛門所へ、日時計壱具相遣候事、	晨曇、午中薄雲、昏曇、夜同、夜中雨、
十九丁亥		門御触ニ来ル、廿二日　様御法事ニ付て、則日数四日鳴物慰被相留候事、	晨曇、午中薄曇、昏曇、夜同、
廿日戊子		用へ行、盆礼申上候、盆ニ付而、兄殿ニ手形半切指上候事、	晨浮雲、午中曇、昏晴、夜同、

稲作大ニ損毛、樹木被吹倒
夥敷也、畑物皆々被吹損、
大根様ノ物之根物ハ損少シ

廿一己丑　晨浮雲、午中曇、昏同、夜同、
廿二庚寅　晨晴、午中同、昏同、夜同、
廿三辛卯　晨曇、午中晴、昏曇、夜同、
廿四壬辰　晨晴、午中同、昏曇、夜同、夜中より雨風、
廿五癸巳　晨雨風、午中同、昏同、夜同　此日嵐、夜中烈風雨　世上破損多、
廿六甲午　処暑七月中、今暁八時六分　蓬田左膳方より紙面到来、鶴与殿出産之事申聞候、右ニ付、将輔殿可相越候事共申聞候得共、風邪ニ付、同所へ相越不申、紙面ヲ以挨拶ヲ致し候事、　晨曇、午中晴風不止、昏浮雲、夜晴、
廿七乙未　皆釣に出候事　不漁也、　晨晴、午中同、昏同、夜同、夜中冷気催候事、
廿八丙申　晨晴、午中同、昏同、夜共同、
廿九丁酉　晨晴、午中同、昏同、夜共同、
八月小
一日戊戌　蓬田方より、鶴与引取可申事相談有之事、　晨曇、午中同、昏同、夜同、

日干支	天時	人事	天気
二日己亥		此日、寒風沢方之御路銭書付指出候事、	晨晴、午中同、昏同、夜同　此日木村儀兵衛妻菊与、上升之身有之事、富松伴次郎直々申聞候事、
三日庚子		村田師、寒風沢へ書付出候事、	晨晴、午中同、昏、夜共同、
四日辛丑			晨晴、午中同、昏、夜共同、
五日壬寅			晨曇、五ツ時より細雨、午中同、昏同、夜同、夜中より雨、
六日癸卯			晨雨、午中雨、昏曇、夜細雨、
七日甲辰		此日寒風沢江、将輔より内池種治へ交代下り、昼九ツ時少過着岸、	晨曇、午中雨、折々細雨、昏同、夜曇細雨折々降、
八日乙巳			晨曇、午中晴、昏同、夜浮雲、
九日丙午		内池種治登仙致候事、	晨曇霧、午中晴、夕七時頃より浮雲、昏晴、夜浮雲、
十日丁未			晨曇、午中晴、夕七ツ時頃より細雨、昏曇細雨、夜曇、

菊与病死ニ付、紙面遣候所
左ニ
一御親様方
一木村
　儀兵衛方
一芳賀勇吾方
一橋本清太夫
へ礼状
右之通

十一戊申　木村儀兵衛妻菊与事、薬用不叶、晨曇蒙霧、午中晴、昏曇、夜同、深更より雨、
過ル七日暮六ツ時頃病死之段、飛脚ヲ以紙面相越候処、右儀兵衛方より今十一日於寒風沢右紙面披見致候、直々村田様上書之通、紙面相認、宅迄為指登候事、

十二己酉　白露、八月節昼八時一分ニ入、　晨雨、午中同風、昏雨、夜同、終日風、

十三庚戌　茂斎寒風沢ニ勤仕也、同所御役所様、川下し逆瀬押来り、立退、　晨曇、雨気不止、風強、后弥々嵐ニ成、午中甚敷、昏迄雨止風、昏浮雲風、夜同、

十四辛亥　朝五ツ半時頃地震、　焼米、於寒風沢食之也、　晨浮雲、風、午中薄曇、昏曇、夜同、終日風、

十五壬子　屋形様江戸御登御発駕、過ル十三日之所、今日ニ相成候由承知致候事、　晨曇、午中薄曇、昏晴月亮々、夜浮雲

十六癸丑　晨浮雲、午中晴、昏同、夜同、

十七甲寅　芳賀今朝治を以、野蒜御蔵江相遣候事、空敷帰宅致候事、　晨晴朗、午中同、昏、夜共同、深更浮雲多、

十五日　森田九平方へ頼事
申遣候事、

日干支	天時	人事	天気
十八乙卯			晨晴、午中薄曇、昏同、夜曇、
十九丙辰			晨曇、午中同、昏雨、夜同　昼八時頃雨、
廿日丁巳			晨浮雲風起、午中同風強、昏雲風微、夜曇、
廿一戊午		御親様御書相届、森田九兵衛方より之書、内へ封入ニ而来ル、	晨浮雲、午中同、昏晴、夜同、
廿二己未	今暁七時頃地震、震長、		晨晴、今暁七ツ時頃地震、午中薄曇、昏同、夜同浮雲、
廿三庚申		開成丸、塩釜崎山へ乗出候事、	晨雲、処々堆中ニ入晴、午中晴、昏、夜共曇、
廿四辛酉			晨浮雲互、午中同、昏曇、夜浮雲、夜中より風起、強、
廿五壬戌			晨浮雲大風、午中同風、昏晴風止静、夜晴晴、終日浮雲風
廿六癸亥		野蒜へ、芳賀今朝治を御賄代請取ニ相遣候事、	晨晴、午中晴風ナキ、昏晴、夜同、終日晴、半風、

廿七甲子　秋分、八月中夜四ッ時七分、　芳賀今朝治御城下へ一寸登仙致候事、　晨晴、午中同、昏同、夜浮雲、終日晴、

廿八乙丑　晨曇、午中同、昏、夜同、終日曇静、

廿九丙寅　晨曇、午中雨、昏曇、夜同、細雨、終日陰し細雨、

九月大

一日丁卯　晨曇、風、此間細雨、午中同、昏曇、夜浮雲、風、終日細雨、微風、

二日戊辰　晨浮雲濛々、午中前より細雨、午中同夕七時より細雨止微風、昏曇、夜薄曇、終日曇細雨帯風天気濛討一寸不晴

三日己巳　寒風沢におゐて梨花開クヲ見ル、桃花も開ト聞、　晨薄雲、午中晴、昏曇、夜同、終日濛々半晴

四日庚午　伊東太輔師、去月廿三日病死致候事今日承ル、腫物を発、死去之由也、　晨曇雨気不止、午中晴、昏浮雲、夜同、深更ニ至り晴、終日半晴、

五日辛未　開成丸、今朝寒風沢繋場へ碇船致候事、　晨晴、午中同、昏同、夜曇、終日晴天気不晴朗、

伊東師者、今年六十六歳也、茂斎茂涙不止、心間導、

日干支	天時	人事	天気
六日壬申			晨曇、午中同、午前より折々雨、昏細雨、夜同、終日細雨不絶、
七日癸酉			晨細雨、午中曇、昏浮雲亙、夜曇、終日半細雨后曇
八日甲戌			晨浮雲気起、午中晴風止、昏浮雲、夜曇、終日半晴、
九日乙亥		此日、茂斎寒風沢勤中ニ付、同所祭礼拝見致候事、	晨曇、午中同、昏雨、夜強雨、終日半曇半雨、
十日丙子			晨雨、午前より雨止、午中曇、昏同、夜雨、終日半雨半曇、夜強雨、
十一丁丑			晨雨、午中細雨、昏曇、昼之間細雨時々降、夜細雨、終日細雨、不強、
十二戊寅			晨曇細雨、午中曇、昏同、夜同、
十三己卯			晨曇、午中雨、午后曇晴天、昏晴、夜同、終日半晴寒気至
十四庚辰	寒露　九月節今晩七時八分、		晨晴、午中同、昏浮雲、夜晴、終日晴、

十五辛巳　晨晴、午中同、昏曇、夜同八時頃より雨、終日半晴、

十六壬午　夜四ツ時過地震、御親様より紙面到来、直ニ此より晨雨、午中薄曇、烈風一時計、昏近迄風不絶、昏晴、夜同、夜四ツ半時頃地震、も相立候事、

十七癸未　晨曇、午中薄曇風、昏晴、夜同、終日半晴、

十八甲申　同月朔日付ニ而、今十八日芳賀勇吾方より紙面到来、同人儀刈田平沢へ相出、又玉造より帰村之事申聞候事、晨晴、午中曇、昏同、夜同、終日半晴、然共濛々敷天気也、

十九乙酉　此日調役守屋登仙、佐伯交代ニ下り、晨曇、午中薄曇、昏晴、夜同、終日薄曇、

廿日丙戌　晨晴、午中同、昏同、夜浮雲、終日晴天、秋陽励シ、

廿一丁亥　晨浮雲、午中曇、昏、夜共雨、深更雨晴、晴天、

廿二戊子　晨晴、午中曇、昏同、如大星所々見ユ、夜同、夜深雨風、終日曇濛々、

日干支	天時	人事	天気
廿三己丑			晨曇晨後折々雨、午中曇、午后風起、昏曇風、夜晴風、終日曇、
廿四庚寅			晨晴風、午中同、昏曇、夜同
廿五辛卯			晨晴、午薄曇、昏同、夜同、終日薄曇
廿六壬辰	土用　朝五時八分、		晨浮雲、午中薄雲、昏浮雲、夜曇、終日薄曇、
廿七癸巳			晨曇、午中薄曇、昏浮雲、夜同、終日濛朧、不晴朗、
廿八甲午		此日、古山・佐藤一同寒風沢登仙致候事、	晨曇、午中前より細雨、午中雨、昏雨上浮雲風、夜烈風、夜中弥々風強、終日半雨半風、
廿九乙未			晨晴、晨後風漸く止、午中薄曇、昏浮雲、夜曇、終日半晴と強風天多、
卅日丙申			晨晴、午中同、昏曇、夜同、終日晴、
十月小			
一日丁酉			晨曇、午中同風、昏浮雲処々畳、夜同、終日薄曇、風、

二日戊戌　芳賀今朝治、寒風沢より登仙致候事、　晨曇、午中同風、昏浮雲、夜同、終日薄曇、風、

三日己亥　晨晴、午中同、昏同、夜同、終日晴静

四日庚子　午中近、雷声二三声遠聞ゆ、急雨降、暫時雨止、　晨浮雲、午中晴、昏、夜共同、夜中烈風、終日晴、午中頃雷声遠聞ゆ、雨暫時降、

五日辛丑　晨暫風、午中同風、昏晴、夜同、終日晴、昼前風、

六日壬寅　晨晴、午中晴天気濛、昏晴、夜同、

七日癸卯　晨曇五ツ半時過雨、午中曇、昏同、夜薄雲掩空ス、星処々見ユ、風吹、

八日甲辰　晨浮雲、午中同、昏同、夜曇

九日乙巳　寒風沢天文方屋根漏、無舎席也、　晨雨、午中同、昏同、夜同、暁九時過迄雨、後烈風起、至晨不止、

十日丙午　晨浮雲、烈風、午中浮雲、風、昏トキ曇、如大星希ニ見、夜浮雲、終日風、浮雲、

十一丁未　橋本清太夫寒風沢下着、　晨浮雲、午中薄曇、午前細雨、昏雨、夜同、終日雨気、細雨折々降、

日干支	天時	人事	天気
十二戊申	九時頃地震、		晨雨、午中同、昏雨、夜同、終日雨、
十三己酉		茂斎寒風沢より登仙致候事、	晨晴、午中同、昏同、夜同、終日薄曇、
十四庚戌		此日登仙達致候、若老、学頭、	晨晴、午中同、昏同、夜同、終日晴、静、
十五辛亥			晨晴、午中同、昏同、夜同、終日晴、静和、
十六壬子			晨浮雲、午中曇、折々時雨、昏浮雲、夜同、終日時雨不絶、
十七癸丑	薄氷張、霜白、		晨晴、午中薄曇、昏晴、夜同、終日浮雲、
十八甲寅		養賢堂へ御奉行衆御上り被成候事之由也、	晨晴、午中同、昏、夜共晴、終日晴、
十九乙卯			晨晴、午中同、昏同、夜浮雲、終日薄曇、
廿日丙辰			晨浮雲多、午中薄曇、昏同、夜浮雲、終日半晴、
廿一丁巳			晨晴、午中同、昏、夜共同、終日晴、昏大風、

廿二戊午　晨晴、午中同、昏同、夜同、終日晴、

廿三己未　昼九ツ過地震、　晨晴、午中同、昏同、夜同

廿四庚申　晨晴、午中同、昏同、夜同

廿五辛酉　献上七曜暦并運気造仕上り、内　晨晴、午中同、昏同、夜浮雲、終日晴、
池・佐藤書方相勤候事、

廿六壬戌　晨晴、午中同、昏同、夜同、

廿七癸亥　過ル十七日江戸出火、公義御本丸　晨晴、午中同、昏同、夜浮雲
焼失之由、三浦陶蔵より村田師迄
申聞候事、

廿八甲子　晨曇、午中同、昏同、夜雨、終日曇、

廿九乙丑　晨雨、午中曇、昏晴、夜同、終日半晴、

十一月大

一日丙寅　此日村田善次郎寒風沢へ出村、　晨浮雲、午中同、昏晴、夜同、終日半
直々江戸江出帆之都合也、　晴、

二日丁卯　此日内池寒風沢へ出村、直々江戸　晨晴、午中同、昏同、夜雨、終日晴、
へ出帆之都合、

三日戊辰　晨晴、午中薄曇、昏同、夜同、終日半
晴、

四日己巳　晨浮雲、午中同、昏曇、夜同、

日干支	天時	人事	天気
五日庚午			晨時雨、午中薄曇、昏晴、夜同、
六日辛未			晨晴、午中同、昏同、夜同、
七日壬申			晨曇、午中薄曇、昏曇、夜同、追々雨、
八日癸酉		此日若老衆より御用有ニ付罷出候所、公義御代替ニ付、武家諸法度御書付被相渡候事、	晨雨、午中同、昏同、夜同、
九日甲戌			晨浮雲、午中同、昏同、夜同、
十日乙亥			晨浮雲、午中同、昏同、夜浮雲、
十一丙子			晨晴、午中同、昏同、夜同、終日晴、
十二丁丑			晨曇、五時頃より雪、午中雪、昏曇、夜同、
十三戊寅			晨曇、午中薄曇、昏晴、夜同、終日曇、
十四己卯		此日勇吾方へ金相出候事、橋本ニて、	晨晴、午中同、昏同、夜同、
十五庚辰		此日文輔髪置致候事、御親様相入、	晨曇、雪飛、午中雪、昏晴、夜同、終日雪降、寒冷、
十六辛巳	朝夕氷張、	富田村江下り、	晨晴、午中同、昏同、夜同、
十七壬午			晨晴、午中同、昏同、夜同、

十八癸未　晨晴、午中同、昏同、夜同、

十九甲申　晨晴、午中浮雲、昏・夜共同、

廿日乙酉　御奉行衆小十郎様へ相付、御物書　晨晴、午中同、昏同、夜同、
へ相談致候事、

廿一丙戌　橋本清太夫方へ御用状壱通相立候　晨晴、午中同、昏同、夜同、
事、北目町致前迄、

廿二丁亥　同廿一日、奥田屋彦之助へ漸ク暦　晨曇、午中薄曇、昏同、夜同、
弐枚就々遣候事、

廿三戊子　晨浮雲、午中同、昏同、夜同、

廿四己丑　晨曇飛雪、午中同、昏薄曇、夜晴、折々
飛雪、

廿五庚寅　橋本清太夫より御用状到来　勇吾　晨晴、午中同、昏同、夜同、
へ御用便相立候事、

廿六辛卯　晨晴、午中同、昏、夜共同、終日晴

廿七壬辰　正山様御三十三回忌御法事、　晨晴、午中同、昏浮雲、夜同、終日晴
天、

廿八癸巳　寒風沢御用状相立候事、　晨曇、午中薄曇、昏曇、夜同、

廿九甲午　晨晴、午中同、昏、夜共同、

卅日乙未　晨晴、午中同、昏同、夜薄曇、

日干支　天時　人事　天気

十二月小

一日丙申　晨晴、午中飛雪、昏浮雲、夜晴、

二日丁酉　晨晴、午中同、昏同、夜同、

三日戊戌　極寒、雪降、三寸
計、　晨曇、午中雪、昏浮雲、夜同

四日己亥　昨日蒲生浜源左衛門より南迄人を
以申聞候由也、　晨晴、午中同、昏同、夜同ね

五日庚子　晨曇、午中薄曇、昏同、夜同、

六日辛丑　晨曇、午中薄曇、昏同、夜晴、

七日壬寅　雪降、一寸計、三日
降候、雪不消尽、　晨雪、午飛雪、昏薄曇、夜同、

八日癸卯　過ル六日、開成丸江戸深川着之
由、養賢堂ニ而聞ク、　晨飛雪、浮雲、午中晴、昏曇、夜晴、

九日甲辰　勇吾方より紙面到着、　晨晴、午中同、昏同、夜同、

十日乙巳　若老衆より御用有ニ付罷出候処、
蝦夷地御拝領被　遊候ニ付、地所
等御広被仰渡候之事、　晨晴、午中同、昏同、夜同、

十一丙午　同十日　天正鑑読合致候事、　晨薄曇、午中同、昏晴、夜浮雲、

十二丁未　夜九時頃地震、長ク　十一日　勇吾登仙、　晨曇、午中薄曇、昏晴、夜薄曇、
震、

十三戊申　十二日　御奉行衆へ暦四冊指出　晨曇、午中同、昏同、夜同、
ス、但筑紫摺、

十四己酉　晨曇、午中薄曇、昏浮雲、夜曇、

十五庚戌　晨曇、午中薄曇、昏曇、夜曇、

十六辛亥　勇次郎処　蒲生より琴奔走之事、　晨曇、午中晴、昏同、夜同、
従日直々申聞ニ来ル、勇吾ニ入り、

十七壬子　晨晴、午中薄曇、昏同、夜曇、

十八癸丑　村田師方へ紙面遣、岡蔵治登り通　晨曇、午中薄曇、昏飛雪、夜曇、
候、

十九甲寅　晨曇、晨後飛雪、午中雪、昏曇、夜同、

廿日乙卯　出火、暮六時半頃、寺小路方願寺　晨曇、極寒、午中薄曇、昏同、夜同、
焼失、観音堂残り、

廿一丙辰　極寒　手桶堅氷、厚　晨曇、五時頃雪、午中雪晴薄曇、昏同、
五分計、　夜同、

廿二丁巳　晨晴、午中雪、昏晴、夜同、

廿三戊午　晨晴、午中雪、昏晴、夜同、

日干支	天時	人事	天気
廿四己未		此日、御親様御出、蒲生之儀見付候由御噺、	晨晴、午中同、昏同、夜同、後浮雲多、
廿五庚申		此日、勇吾方へ金遣、橋本善太夫ヲ以、	晨晴、午中同、昏同、夜同、
廿六辛酉		此暁福田町まて行、即帰宅致候事、	晨晴、寒甚、午中晴、昏同、夜同、
廿七壬戌		一昨廿五日、加藤勇左衛門江戸下り着致候由、同人開成丸御乗組ニ而江戸登致候所、御用有之、陸通り帰国、	晨淳雲、午中薄曇、昏晴、夜同、
廿八癸亥		廿八日年を迎候事、	晨晴、午中同、昏曇、夜同、大星希見ゆ、
廿九甲子		南へ罷出、夜入帰宅、村田先生、江戸表ニ而御小姓組被仰付候趣、同人宿元ニ而承り及候事、	晨浮雲、午中同、昏晴、夜同、

（東北大学附属図書館所蔵）

［解説］

仙台藩天文方・志村恒憲（将輔・茂斎）による安政六年の日記。志村は安政三年（一八五六）一〇月、村田善次郎（明哲）の軍艦方御用係就任にともない、村田の門弟であった古山誠之丞、橋本清太夫、内池種治と交代で、寒風沢の造艦場への出勤を命じられていた（史料番号13）。安政五年（一八五八）二月には航海方御用係となっている。

日記からは開成丸の就航後も、寒風沢に置かれた天文方役所での交代勤務が続いていた事がわかる。寒風沢での勤務は正月元日から二月四日、八月一三日か一〇月一三日までであった。開成丸に乗り組む天文方役人の往来や、寒風沢への出入港の連絡に加え、野蒜（宮城県東松島市）の津方役所や、蒲生（宮城県仙台市）との往来も見られる。この年の開成丸は、一月一九日から二九日の「小調練」（史料番号29）、二月一三日から四月二一日の浦賀・江戸への初航海、八月二三日から九月五日までの塩竈近海での調練とみられる航海や、一一月初旬からの江戸航海への出発が記録されている。

仙台城下町での生活や、天文方・天文学者としての活動も散見される。天文道を司る京都の土御門家都の交流、月食の観測や交流。火災や風雨、政治情報についても記録されている。

簡素な記述内容ではあるが、この時期の開成丸、養賢堂関係者、仙台藩士の日々をうかがうことができる日記である。

31 ふなわたり日記

万延二年（一八六一）頃

（表紙）
「
［ふなわたり日記］　」

ふなわたり日記

万延とあらためるとしの九月八日、開成丸御乗込の事仰出され、おのれ航海測量指南統取の仰を蒙、御物置御備のよね積いれて、江戸へまかるべしとの事なり。そが日より御艦のこと、何くれとしらべにかゝりて、霜月の十日仙台を出立て、夕くれかたに塩釜の浦につきてやどりぬ。

そも〳〵この御艦の御造はじめより事に預て、航りは三とせさきの師走、御国の海岸乗試しの事よりはじまり、去年もふたゝび江戸へふなわたりす。ひとたびもまぬがれざるなり。

ことしの夏、江戸よりかへさに、下つふさの国犬吠岬沖にて、あらき風に吹れ、いかりふたがしらをれ、からうじて難をのがれしを、古郷にある老たる母のきゝ給ひて、あんしわづらひ、後の弥生やどに帰り、はゝにたいめしてけるに、そのよろこび、いはんかたなくうれしかられけるを、また航りの仰を蒙りつるを、老たる人にも

◎「ふなわたり日記」凡例

一仙台市民図書館所蔵の原史料を翻刻している。

一通読の便を考慮して、適宜、句読点・濁点・括弧・改行・字下げを施した。

一漢字は常用漢字を原則として通行の字体を用いた。

一見消等の訂正箇所は、訂正後のものを記した。

一踊り字の「ゝ」「ゝ」「〳〵」は底本のままとしたが、漢字の後の「〻」「〳〵」等は「々」に統一した。

一原史料には、本文の表現に対する添削が、付箋にて示されている。それらについては、本文の該当箇所を波線で示し、右側に［添削1］のように番号を記した。

付箋の添削内容については、該当箇所に近い下側の欄外に、番号と共に掲載した。本文に濁点を施した場合は、添削部分にも濁点を追加している。添削部分にも適宜句読点、濁点を付している。

なお原文での添削には「左四」「右二」のように、原史料の見開きの左右のどの行にあたるかが示されている。これらも原表記通り掲載したが、本書での頁数・行数とは一致しない。

一本文に誤りが認められる場合も底本のまま

らし候に、なやめるさまのみやれは、さいなあんじ給ひそ、家の子等の衣食にあまりあるも、かけまくも
かしこき君より、世々禄を給へるにて、命をたにしめざるとも、母はいとふまじきを、おのれふねにてゆきかふは物かは、はらからども、家にあれば、よく〳〵いひおきつ、任はてゝ帰りこんまでは、さむさになあたり給ひそ、風にな障られ給ひそ、くすしは赤坂至斎、湯村忠安、針の医は竹内寿台、いづれもしたしき人たちに、折々とむらひて、老たる人をみて給へと頼置つゝ、よべより馬のはなむけすとて、うからやから、誰かれ酒などのみくふ。

つとめて、馬のきたるに、つゝらなどおはせて、送り来たる人々に別れをつげ、従者またはをしへ子古山誠之丞利貞、大工中嶋義七をゐて、道をいそぐ。雪ふり、風さむく吹きあれて、手あしもこゞゆ。

十一日。をしえ子内池種治行孝も、きのふをそくつきぬとて、朝とくまたるもゐて、塩がまの浦よりはし船に乗て、昼八つ時すぐるころ、寒風沢にある開成丸につきぬ。空はれてさむし。

十二日。古山利貞に水手巳之助をつけて、野蒜より石巻までやる。積いるべきよね、いかり綱になる麻をもとめにとてなり。空はれてさむし。夜半に小雪ふりゆく。をしへ子佐藤久馬長脩つきぬ。

十三日。空はれてさむし、船子らをよせて、ふなわたりの用意をせさす。

十四日。水手主立長南兵三郎に、水手七たりをつけて、野蒜へよね受取にやる。石

とし、当該文字の右脇に（　）を用いて注記した。
一虫損で判読不明の箇所は、およその文字数を□で示した。

巻より太田長五郎，斎藤富治、開成丸の碇くりだしの穴の鋳がたをとりに来る。かれは鋳物師に鍛冶の職人なり。石巻蛇田に鋳銭御吹立ありて、そこにくだりをるものどもなり。古山利貞かへれり。ひるはれて、夜くもる。さむし。

十五日。よへよりはしけ船、今朝までに六艘、米を積て、水手らうはのりしつゝこゝにつく。雪ふりいてゞ、いとさむきもいとはで、よね六百五拾石を開成丸に積いる。七つ時過るころまでにことをへぬ。野蒜詰の三浦忠治、小関久左衛門、下役共をゐて、船の修覆すへきところ〴〵をみにとて来たる。けふ艦の荷役ことなくすめれば、船子らに酒をあたへていはふ。

十六日。朝くもり、のち風はげしく吹てさむし。船子等大綱よる業にかゝり、木匠は艦にはた打すとて、かしかましくさわぐ。

十七日。天気よし。佐藤長脩を運賃金受取に仙台にやる。中嶋義七、ふねの修覆はてゝ、仙台にかへる。

十八日。朝はやく立て仙台に登る。七つ時前にやどにつく。古山利貞もおなじ。けふは風なき空、はれてあたゝかなり。

十九日。天気きのふにおなじ、こたひ乗組になる高橋健吉知誠を向ひて、艦の用ある事どもかたらひ、夫より但木土佐殿にまゐりて、御用のうかゞいひなど残りなくうけ給りて、夜四つ時ころやどにかへりぬ。

廿日。ひる九つ時ころやどを立て、原の町にいたりしに、ふゞき、空くらく、いとさむし。今市の町へかゝり、さむさ堪かたけれは、ここにて酒たうべ、暮かゝるころ

しほがまに着ぬ。ひと日雪、風さむくありき。

廿一日。昼四つ時、塩かまをはし船にのりて出ぬ。七つ時開成丸につく。あしたより空はれて、あたゝかなり。

廿二日。暁より雪ふり、ひねもすふりくらして、夜半にやみぬ。けふはことなし。

廿三日。あした風いとつよし。ひるもおなじ。夜五つ時過、高橋知誠、けふやどを朝とく立てきたりとて、開成丸に乗くむ。

廿四日。暁くもり、昼はれて、暮かた薄くもり、いとさむし。賄巳之助を、米御払のこがね持遣て野蒜へやり、兵三郎は高城へ粮米をとりにやる。よるになりてかへりく。

廿五日。朝薄ぐもり、ひるはれて風烈しく、碇の大綱を船子らより合すとて、七つ過るころしはてぬ。けふは寒の入口なり。よるもかぜつよし。

廿六日。朝はれ、ひるよりくもる。暮過て雪ふりいてゝ、あくるあしたまてふる。艦のうへに積りしは七寸はかりぞある。

けふは水手とも海上やすらかならんことを、こゝの神明にねぎをすとて、剛いひ酒なとやしろに持つどひ、よもすがらのみくらふ。

廿七日。朝雪はれてくもる。昼はれて烈しく風吹、よるまてやまず。

松しまの御水主内海銀右衛門と五郎助きぬ。めし・酒なとたうべさせて、風やまねば、こゝの島にとまる。

廿八日。何事もなし。天気静にして、さむさ薄し。

廿九日、きのふにおなじ。

晦日。朝はれて後、折々雪ちりきぬ。風も強く、よるまて吹やまずしてさむし。けふは水手ども、艦の綱ともみなよりはてゝ、船出すべき帆前の事に、かゝる乗組のひとゞ〳〵には、高橋知誠、おのれ、内池行孝、佐藤長脩、知誠のつさ永沢義三郎、与はおのれのは梅津彦三郎まて七たり、船手は長南兵三郎はじめとして、炊夫まで拾七人、すべて弐拾四人なりけり。

十二月朔日。けふはかのえさるなり。何もなし。きのふにおなじく帆支とす、よる五つ半時ごろ地震す。天気よし。

二日。朝はれて、昼よりくもる。夜もおなじ。風なくて静なり。朝五つ時より艦を石浜の岬に廻せば、出帆にひんよしとて、廻す事にかゝりて、ひる過るころ石浜の岬に碇をおろして風待す。寒風沢へ亀田丸いり滞す。測量方には小西健三郎、海老子重次郎、佐藤泰治郎といへる三たり乗組ゐる。

三日。暁九つ半時より雪ふり、夜明てみれば、五寸はかりは積る。ひる四つ時雪やむ。船子ら塩釜のやしろに海上安全の御こまをたきにいたり、よるに成て帰る。よる静なり。

四日。暁七つ時ころ小雪ふる。あしたはれてくもる。けふはさむくもなし。朝五つ半時より雨ふりきて、ひねもすはれてはふり〳〵しつ、寒九の雨は世にもてはやすを、きのふふりなましかば、寒十の雨に、船にてぬれそぼちつるも、くるし。

五日。けふはきのえねなるに、船出すとて、ひる八つ時ごろより碇をあけつるに、

俄にあらき風吹きて、沖の空あしくとてやめぬ。ひと日はれて、折々風つよく吹て、さだまらぬ浮雲あり。よるもおなし。

六日。暁七つ半時ころ、また船出すとて碇をあけたるに、夜明るころ、沖合にきのふにおなし雲のみゆれば、やめぬ。はたして朝五つ時ごろより、あらき風吹たつ。午の刻前かた静になる。日ころ追手の風待するに、吹こねは、船子らうんじをれり。昼八つ時ころ、北間かたの風吹きたるとて、よろこびのゝしる。

待わたる　追手の風の　吹きぬと　さわぐ船手の　声ぞゆゝしき

八つのかしらに帆を巻て船出す。風もよく吹て、はしる人々よろこびあへり。蒲生沖にて日暮ぬ。戌の刻過、風さかに吹かはし、空あしければ、沖にいかりをおろしてかゝる。船のうち、することもあらねば、夜四つ時ころいねぬ。よもすがら楫の音枕にさわぎて、いをねられず。

楫の音を　枕にきゝて　波のうへに　鴨ならねども　浮ねをぞする

なとつぶやきつ。

七日。暁八つごろ雪ふりきて、まなくはれたり。行孝の艦板にのぼりてみるに、風間方に吹かはしたりといふ。いでゝみるに、帆うけもよさげなれば、水手主立等いかりをあげて、とくはしれ、といへやる。かれきたりて、西の雲たてにこゝろかゝれは、夜明てはしりてん、といなめば、さないへど、明なば風ゆるすべし、きのふの暁も、帆をあげてよといへるに、とかくいへてあげす。夜あけて風ゆるく、はしりおくれたるを、こりすまの船子らどもや、とつぶやきをる。

夜明て、漁り船の数いでゝ来るに、北の風つよく吹かめや、などとひて、いかりだにあげねは、はらだたしさに船長をよびて、暁よりまけよ、といへやるに、などいなむぞ、風いよ〳〵ゆるくなるものを、北くらく、雪時化きなば、山を隠し、行さきにまよふといふ。いま〳〵しものゝ、わけをわきまへてよ、北にやらばあしかりなん、南をさしてやる。艦を風に追れて行に、ふゞきに追れたらましかば[添削1]、走りてにげよといふ。雪風つよく、時化こまば、行先にまよひ給んといふ。おくれたる船子らや、そこなはゞ死せよ、ものゝふの事に望て死するは、いとはしものをなど、腹ふくるゝまゝにのゝしると、よくして、朝五つ時前に帆をあげてはしる。風やらして、せんかたなし。いかにせん、朝とく碇をあげてはしりたらんにははしるべきを、風よわければ、船もすゝまず、四つ時過るころより風吹いでゝ、北にかはり、追手なれは、よく走て、相馬領茶屋岬沖にてか暮れて走れと、風凪て船はしらざれは、こゝろわろし。けふはよる、ひるとも、空はれて静なり。

八日。暁九つ時過より、北間方の風吹いでゝ、いよ〳〵はげしく船のはしり、あつさを失よりも、とく帆を五合[添削2]ばかりかけてはしれり。またならひ風に吹かはし、ことの外に烈しくぞ吹、岩城の領四つ倉沖にて夜明たり。風烈敷、順風ならねば、朝とく碇をおろして、沖中にたゝよひをる、日暮て風間方に吹かはす、さらば走りてよ、とて走らす。

塩屋の岬をかはし、中の作も過て、三崎てふ過るとき、こゝにわが君の御石船のくだり五艘かゝりてあるに、船子らたかひに出あひと、口々にさけ

[添削1]
右三
追れたらましかば
此語勢、追れたらましかばはしりてにけなまし、ナト云ヘキ勢也、にけのナラバ、ナホ追れたらば、ナランカ

[添削2]
左五
帆を五合ばかりかけて
帆カケ舟ナト常ニ云ヘトハ帆ヲかくるトモ云ンカ、未考

びてはしり過ぬ。うはことなきよろこびをいへかはすなりけると、何れの船ぞととひば、山との船といふ。船印にやまがたにトの文字の印ふねなり。こは石巻ふねにて、観声丸にてぞある。

平潟沖をはしるころ、船子らきていふ、空くもりて、雨の気色あれば、碇をおろしてんと。風もよく吹つ。さないへぞ、雨ふるまじとおもふ、月のあるうちは走てよ、とてはしらす。ひねもす天気よろし、夜半ちかくなりてくもる。

九日。あした薄くもり。水戸領久慈の岬にて夜明つ。風凪て、船動揺してはしらず、たゝよふ。朝五つ時過るころより北風起りて、いよ〳〵つよく、雨もよほして、八つ時ころふりきぬ。陸のかたみえずなりて、逆浪たかく、風はげしく、船とぶとりのごとし。名にしおふ鹿島灘にはしりかゝり、下つふさの国犬吠岬まで十八里の灘なるに、海山いづこともみえわかねば、日暮てのちならでは、犬吠のさきはかはらざらんとて、船子らこゝちなやましきまでさわぐ。

灘わたる　雨かぜの夜を　この船に　鹿島の神よ　けがれあらずぞ

雨風はげしく、一きはなるに、日はくれつ。

夜五つ時までには、犬吠の岬はかはりてんなれど、四つ半までも沖に船をやりて、あやまちなからんやうにして針路をとるべしとて、亥時ころになれば、針ををりて、未申と艦をはしらしてけるに、船子のうちに、あわたゞしく吠のさきにやあるらん、船の先にくらきか中にも山のやうなるもの見しつるに、あてたらんにはいかにせんとさけぶ船子ら、みな〳〵がやゞ〳〵とさわぎたちて、俄に帆をおろして、山ならんやと

いふもあり、しらぶにてやあらんみえず、やかてなりつらみれば、といふもあり。風は烈しく、空はくらし。船をやるべきかたをなしさわく。神にいのりて、御鬮をとりて、をしへのかたにやらんと、船子らさわぎにさわぐ。未のかたに御鬮いでたりやといふなれども、さやりてはありけんといえるもありて、いづれもこゝちまよふ。

船長をよびて、さのみまよふ事なかれ。陸によせて船をそこなはんよりは、いづくまても沖に船をやれ、こゝより辰と針をたてゝ、東のかたにやり、また未申に針をとるべし。それよりさぐりをいれて、海の深からんかたは、沖浅からんかたは、陸なりとしれ。浅からんかたにはよるべからずと、かくするうちに夜も明ぬべし、雨もやゝふりやみぬべしと、船子らをいましめて、のゝしるをしづめよや、とく帆を巻て、たゞよふをとめね、とさとして、をしへのごとくにさせつ。

十日。夜明て、陸のかたに船をよせてみれば、犬吠の岬はかりて、名にしおふ永江の白岩とて、三里のあへた切きし高く、しろ〳〵と立ならびて、おろしげなる岩かどの沖のかたに船はありし。船子等、夜ひと夜くらやみにまよひ、うんじてはしるを、はじめて生きたるこゝちして、よろこぶことはんかたなし。

けふは空もはれて、風北間方に吹変り、追手なれば、船をやるに風はげしく、ひねもす船板のうへにさか浪打かけ、ぬれぬはこゝろとてはなし。

日くるゝころ、安房国和田の湊前にはしりきぬ。朝より四拾里ばかりぞはしる。こゝにいかりをおろして泊りぬ。

十一日。あかつき七つ時すぐるころ、帆をあげてはしる。丑東風に吹かはして、ゆ

る〳〵洲の岬をかはして走りあがらんとするに、引汐はやく、また風も強ければ、風と潮とせり合て、船はどちらへもはしらずして、ひとところにをる。あげ汐にもなりなまし、かけふねすゝむべしとて、船子等驚、船を潮にとられじとて、楫をまもりてある。

[添削3]

十二日。暁子の刻より空くもりて、雪ちり、風烈し。あげ汐の時になれども、悪汐通りて、きのふより汐さしなく、ひきに引てのみあるを、汐に船やとられんとて、船子らさわぐ。

夜あけてみれば、洲の岬ははなれて、伊豆の大島のかたに近く、船を汐にとられて乗さけたり。とかくするうちに、海山なべてしほ霧立てぬ。風いよ〳〵吹あれきて、潮さゐ・あら浪山より高く、船はゆれきて、浪の底にあるこゝちして、いまやならくの底に沈まむかと、人々こゝろもこゝにあらぬさまなるよし。船のやぐらより大浪打越て、ふなすまゐして居るうちに、潮入来て、人々露にぬれて立さわぐ。船長、楫とり、親司等よろほひきて、いまはしらぶ立こめて、船のあたりいさゝかみえわかねば、やるべきかたも、しら浪のよする岸根に吹付られて、船打砕つらむもはかりかねば、ひと〴〵身の覚悟をせんほかなし。神にいのりて、つゝがなからんやうに、髪をきりて、命をこへてけりとて、しほたれもなゝまていふ。よし〳〵、いまに天照す御神も、八百万の神たちも応護あらん、こゝろをしづめてよ、帆は弐合程もはりて、横浪に船をまけられな、間なくさぐりをいれて、海の底深きかたにやれ、浅は地方としれ、まれ〳〵には切岸にて、深きもあるべく、されども四五十間も近からん

[添削3]
り
まもりてある
ありハ定格也、モシ意ヲ含メテ云ノコサレタル由ナラバ、格別也、上ノ五役目ノをる　モ亦ナリ。常ハをり下云ヘキ格也。

には、すこしは地の見えぬことやはある、一時とも船を持[添削4]こらひたらんには、吹あれものそむべし、やますば、誰かれも残りやはある、こゝろまどふことなく船を守へし、といへてまかる。[添削5]

巳の刻過るころ、雲霧やゝうすらぎ、ところ〴〵山あらはれ、大浪もたえまありて、やかてはれぬべき気色なるに、人々ふときいきつぎてよろこびあへる。[添削6]やう〳〵にはれてみれば、船ははるかに伊豆の海辺ちかく、大島、利しまなむど、目のさきになりぬ。

相模の浦賀に漕もどさんとするに、丑東風、きのふにひとしくはげし、せんかた浪に風のまに〳〵、夜四つ時過るころ、伊豆の下田の港にいたり、こゝにいかりをおろして、からきいのちをたすかりぬ。きのふけふのこと、くりかへしおもふに、うらおそろしくぞある。[添削7]

十三日。ひねもす晴たり。

こゝの地は、ふる郷にくらぶれは、春弥生のころのけしきにて、陸には梅・椿咲みだれ、菜の花、そらまめ、麦なんど青やかに、船のうちよりみやれば、俄に春にあふ[添削8]たるこゝちして、のどやかなり、きのふ汐風あれて、こゝに来たるゆえよし[添削9]をものにかきて、江戸の屋形に、またふる郷のかたにも告やらんと、網代に詰給たりし矢野目伊兵衛のもとへ、下田より飛脚してやる。

公義の番所へ、江戸にやるべき船の、こゝに乗落したること訴ひしに、そが役めとて、与力同心御封印役福西慶蔵、平同心直井彦七船にきたれり。ゆへよしいへ聞得て

[添削4]
右二　へ
こらひたらん
○　へノ仮字ならん

[添削5]
四　ひ
いへて

[添削6]
七　り
あへる
○

[添削7]
左四
うらおそろしく
うらハそらニヤ

[添削8]
八　う
春にあふたる
○
あひたるノ音便ナレハ、うヲ用ヘシ、
凡テ音便ハ阿行ノ仮字ヲ用フ。

[添削9]
九　へ
ゆえよし
○

帰りぬ。

十四日。あかつき天晴たり、明はなるゝころより、きのふのごと、海よりきり立のほりて、いづくもみえず、巳の刻ころなごりなくはれて、のとけし。

故郷を船出してより、湯あみせねば、手足あかしみて、蝦夷ひとはかくあらむなど、かたみにいへかはしてわろふをみて、石やどの人、壱里ばかり山手のかたに、蓮台寺村といふに、温泉のきよきあれば、道しるべせん、いざさせ給ひといへるに、ゆあみといはれて、うれしさに、知誠、行孝、つんさ誰かれ連ていでぬ。はし船よりあらかねの地を歩行に、うれしさいはんかたなし。

下田の町はなれて、半道ばかりに温泉にいたり、ひと〴〵着ものも脱あへず、湯に飛こみて、こゝちよし〳〵とのたる。からたのあかは、ものにてけづりとるべくおもはざりき、かくばかりあらむとは、はらふくらかしてわらふ。

朝とくかれゐして、午の刻も過たれは、ひもじく用意したるひさごのさけ、わり籠なんどとりでゝのみくふ。

やどより茶をいたしたるに、高つきにおかしげなるもの盛てもてきたる。とりてみれは、芋の子をあぶりて、ところ〴〵こげふすぶれてある。くふに、顔つきよりはいと味よし、やどの女のわらはにとひば、こゝはいもの名におふところになんあるといへり。

福西慶蔵、直井彦七も、けふはいとまあれば、浴にきたりとて、ほかのやどにありとて、人してさそひおこしたれば、知誠もいたらざらんはあしかりなんとて、さゝも

たせて、そこにいやきて、きのふのいやなとまうして、酒たうべ、七つさかりにいとまもうして、入相のころ船に帰りぬ。

十五日。夕がたよりくもる。追手も吹かねば、船をいださず。

海人の、赤きいをと、あわびをめせとて、船にて持きたれり。ふる郷の海にはめなれぬ魚なれば、名をとへば、ぶ鯛といふ。めづらしさにとりてやる。味はへ、我が御国のそいとおなじ。

十六日。きのふと日よりおなじ。

下田町はづれに、不二の湯といふに、知誠、長脩をゐて浴にいたる。これはぬるみて涌いづるを、[添削10]たきものして湯にしたるなり。夜五つ前より雨ふりきぬ。

十七日。ひねもすよすがら雨ふりつゞく、ことなし。

十八日。明はなれて雨やむ。風すさまじく吹出、浪あれたち、空おそろしくくもり、時化こまんとて、船子らさわぐ。船大ゆれにゆれて、たまらぬこゝちす。亥の刻ころ風なぎ、空はれたり。

ふる郷を船出してより、一夜だにこゝろとけていねぬに、今夜は枕さためかねつれば、

枕より　路より浪に　船ゆれて　浮寝の床に　ふしそ侘ぬる

十九日。終日晴たり。追手もふかず、ことなし。ひとりごちによめる、

追手まつ　下田の磯に　よる浪の　千々にくだけて　ものおもふ也

夜半にめざめて、[添削11]船板にのぼりて、空はれたれば、追手の風の吹かたに、[添削12]雲やたち

[添削10]
右一
たきものして
カクテハ薫物トハ聞エズヤ

[添削11]
左四
船板にのぼりて、空はれたれば
のぼりて見れは、ナド云ヘル詞ヲ、ワザト省カレタルニヤ

[添削12]
五
雲やたちなんと
○○
雲やたちを云ヘル方ヨロシクハ有マジキニヤ

なんと見わたすに、南の海ぎはに大なる星のみゆる。[添削13] よくみれば老人星にそある。ふる郷にてはみることのならねば、とくおりてをしへる、行孝をおこしてみせつ、長脩も出てみる。よろこびて珍らしがりつ。

[添削13]
六
衍
星のみゆる
○

廿日。明はなれて東風。雨ふりきて、おとつ日のさまなれば、港の口あしくとて、船をわかの浦のかたにやらんとてまはすに、俄に風吹あれてならず。

七つ時ころ雨やみ、風西にかはす、港口にかゝりゐて、夜五つ時過わかの浦輪のかたにからうじてやり、いかりをいれぬ。

廿一日。きのふ夕かたより風西に吹さまなれば，あかつき子の刻よりおり〳〵船のうへに立出て、風の吹はを明かたまて見さだめつ、船長をよびて、けふは追手ならんに、帆を巻あけよ、とく〳〵船子らをよび起していそげよやといふに、この浦は西なれど、沖合に出船は丑東風ならんに、をり合日よりにて、浦賀まで西の風吹通すまじとて、船出をすと、船長はじめ口々にのゝしる。さいへそ、よべよりしば〳〵おきて、空をからかひつるに、西の風夕つかたまでに吹通すべし。船を出せと、からかいつゝ、あらそひて船を出させつるに、午の刻ころ伊豆の沖中にて、西と丑東風とせり合て、船たゞよふ。さればこそ船出せしといへつれとて、船子ら口がましくのゝしる。いましばしさなれども、天機山（天城山）の雲、大島のけぶり、みな東になびく。[添削14] 丑寅のかた地方雲薄し。西になるべしといへばりをるに、未の刻より西風はげしく吹立、いよ〳〵つよし、船はしることとし、船子らとやかくいへしも、[添削15] ふねはしるをよろこほびて、御崎はほのかにみえつ。夜半までに風やまずば、浦賀にいたるべしとて

[添削14]
右一
ひ
いへはり
○

[添削15]
二
ひ
いへしも
○

うれしかり。ゑめるかほ、つきみるもおかし。

日も暮て、風はけしく、みさきもかはし、月もまたいでぬに、くらき沖なかに、火の光りみえつるとて、あやしかるに、近くなるに、山のごとき大船の、わが船の先にはしりきたり、ともし火船の上に三つあざやかに光りて、ゑみし[添削16]船のはしり過たり。

浦賀の港にも間近くなるに、このころ日和あしく、船出せずして、けふ浦賀に入る。船の四・五百艘もやあらん、夥敷ひゝところにはしりあつまりて、ふねと船とすれあふて[添削17]、いまや破れむかとおもふて[添削18]、おそろしく、巨々らの船の楫を乞声、船子ら船をあてじとて立さわぐ音、いにしへ八島のたゝかひも、かくばかりは、大船の数々せり合て、あらそふことはなかるべしとおもはる。中には帆をさけて乗さがるも、あるは高く帆をあけて乗りこえんとするもあり。いまやおさまれる[添削19]世の大江戸に、国々より何くれと数々のしなたからを、千万の大船してはこび、にきわひる[添削20]、たとへんにものなし。かゝる[添削21]程大船のつどひて、せり合て湊に入津することは、我船子らも、こゝに幾度か乗きたるにおぼえすとて、あきれはてゝぞ、おもしろくも、またおそろしくもおもひしといへる。

この夜の晩八つ時ころ、わがのも、だれかれのも、みな〳〵浦賀の湊にいりて、船より船へもあへをとりて、船より船へ改の司のいたるやうにして、夜の明るをぞまつ、わが船ばかりは、はし船にてあらための人をいるゝやうに、べちにはなれて、いかりをおろしてけり。

けふは、あしたよりよるまで空はれたり。相模の沖をはしるころよめるうた、

[添削16]
八
え
ゑみし船のはしりぬ
○

過たりの文字ナクテモヤ、又過たりハ例ノ ○○ 過ぬノ方ハヨロシケンカ、サレド確ニハナケン

[添削17]
左二
う
すれあふて
○

あひてノ音便ナレバうヲ用ベシ

[添削18]
同
いふや破れむかとおもふて
○ ○

やトかト疑語重ナレリ、いまや破るるとナドニヤ、又おもてノふハ上ニ云ヘルガ如シ

[添削19]
七
いまや此やハ咏ノやノ心ニヤ又ふきそふるノるニ結ビタルニや

[添削20]
九
はふ
にきわひる
○○

白妙の　富士を弓手に　みてこげば　黒そめてに　けぶる大島

こまならましかば、こゝろのまゝにゆくべきをいかにせん、ふなわたりする身は。

廿二日。明六つ半時ころ、御船あらためきたりつるとて、船々より声をつたふ。やがてこの船よりもはし船やりてむかふ。浦賀役人三たりきて、積ものゝ数、乗組人の数なとしらべてされり。

御石宿松下吉兵衛、西郷理右衛門、鎌倉屋伝六などきたり。入津のよろこびをのべ、深川より知誠のかたに、音信とくよりこゝにありつるとて、文を吉兵衛いだせり、ひらきみれば、知誠にとく深川まできたれとの事なり。とりあひづ知誠は江戸へとて、ひる八つ時ころ旅だてり。けふはひねもす空はれて、あたゝかなり。

廿三日。のどやかに空はれたり，何ごともなし。

廿四日。けふも空はれて、きのふにおなし。

八つ時過よりいとまなれば、陸にあがり、浦賀の町をみむとて、長脩とつんさを連ていでぬ。こゝに船してみたびきたれど、せは〳〵しくて、町をだによくもみざれば、けふはみんとて、そこ〳〵さまよひてあるく。

ちいさきばつていら船にて、夷人三たり乗てこゝにきたるとて、市人の子らさわがしくはしりまはる。

鎌倉屋伝六のやどにいたる。めし、酒なといだして、去年の師走こゝを船出して、またこの師走一とせとて逢つるよろこび、故郷のことなど、何くれとかたらひて、豆州かもの（賀茂）温泉をうつしたるとて、風呂などにいりて、暮過るころ立帰るに、ひと〳〵

［添削21］
同
かゝる程
かゝる程ハ、俗ニ此くらゐトカ、此本トカ云ヘル事ニテ、強テ雅トシハナケレド、同ジクハかたはかりナト云ヘラバ、茲ニテハ雅ニ近カランカ、

［添削22］
左ニ
へ
かたらひて
○

の行かひしげゝれば、あやしむに、今宵は節分とて、こゝの叶明神に灯明こゝらかゞやきて、ものうる市人らあつまりをれり。いたりみるに、ひと〴〵手々に升にいり大豆のいれたるをたづさひて、神のみ前にきたり。こゑ高やかに、福はうち、鬼はそといへて、まめを御前に打やりて、ねぎごとして立かへれり。故郷なとにあらぬことなれば、めづらかにおかし。誰もさちはほしきものかはと、神にいのらんよりは、こゝろをまめやかにしたらんには、いのらぬとても、さちはあつまらんやは。

廿五日。たつ春、あかつき八つ時八分とぞ。朝はれて、暮かたよりくもる、あたゝかなり。何事もなし。

廿六日。明六つ半時よりみぞれふる。のち雪になりて、四つ時ころやむ。くもりて、暮かたよりはれたり。

高橋知誠、夜五つ時過江戸より帰りくる。

廿七日。朝とく起いでゝみれは、船板のうへしろく霜ふれり。ひる薄くもり、夕七つ時過より雨ふりくる。

こゝの港に、海士人のあこそとのふる、よびて急に、こゝらの小船あつまりて、きのふよりさし網してあるを、ゑむや〳〵と網引するに、水のうへにいなのとびいづるさま、いづらとも数かぎりなく、やがて海士の小船七・八艘に、山といなをいれて、江戸へうりにやるとて、大声に振はしく櫓を押て漕もどり、こゝのいなをとることは、つねにいましめお立て、としごとに師走に東浦賀の海士あつまりて網引すといへり。けふよりは、いなの口あきしとて、日毎にあみさして、夥敷とると、ところの人

のいへり。げにおもしろくぞある。

廿八日。きのふより雨ふりつゞきて、東南風はげしく、あたゝかさいはんかたなし。松下氏の来たりて、けふはこゝにても、いつもの春弥生のころのあたゝかさなりといへり。

廿九日。朝雨[添削23]ふりつゞく。四つ時ころはれたり。

午の刻ころより積いれおきしよね、江戸の商人丸屋勝次郎へ御払になりしかば、手代政吉きたりて荷役す。七つ時ころ雨ふりくれは、みなはたさずして、米九百四拾俵やりてやめぬ。

夜、ひと夜雨ふりつゞく。

晦日。なほ雨やまずふりくらして、夜半過るころやみぬ。

けふはつごもりにて、陸のかたには、市人の春を向[添削24]ふるとて、門毎に松たていだし、そほふるに行かふ人のおほく、いそかしげなるさまを、船のうちよりみやりて、

立かへる　春の設も　なみのうへに　さわがぬ船も　くるゝ年哉

けふ艦のうちは、年くるゝ[添削25]とてなす業もあらず、雨もそゞろにふりつれば、しめやかにしづけし。船子らさすかにしつくへなはなど持きたりて、船のうちそこゝとかけたり。

年のくれをいはゝんとて、知誠、行孝、三たり四たり、あるかきりつさ[添削26]ともまてあつまりて、酒なとたうべ、去年の暮には、この船にて安房の国根本の沖中に明る春をむかへ、おとつとしは御国の本吉の郡松崎に澗(間)かゞりして春をむかへ、三とせこのか

[添削23]
右三　衍まて　朝まてニヤ
朝○雨ふりつゞく
ふるノ意ナルトキハ、文字ニハ迎ヲ用ヘキヤウニ先哲ノ沙汰トモ見エサレド、倭語ハ仮物ノ文字ニハカヽハラヌニヤ

[添削24]
九
春を向ふるとて　衍　む　か

[添削25]
左四　衍
年くるゝとて
今ハ　くるゝとて　ト云ヘルハ耳馴テ、くるとて　ト云テハ言足ラヌヤウニ聞エレド、とハ切ル、詞ヲ受ルハ格例也

[添削26]
七　す
つさ

たは青海原の波のうへに、蓬がしまの亀ならで、やつがれは海なかにてとしをかさねつることなとおもひいでゝ、かたらへたはむる。

松下氏より、あすのりやうにとて、屠蘇白散おかせたるに、あるふみに船やかたにさしはさみて、風にふきならされたることなどおもひいてゝ、銚子とてもあらねば、とくりの中へいれてひしおきぬ。

元日。あかつき八つ時ころみな〳〵おきて、艦のうちをきよめ、のしめ、麻上下なとつけて、まづ御船霊神にみき、ともし火、たきものなとそなへぬる、つきてより故郷のおほむ屋形、家にある老たる母のかたなど、こゝろのうちにこめて、雲井の余所にふしおがみ、知誠なとゝ、たかひに春の寿をいへかはし、つまなく船長はじめ、船子ら春の寿きをまうし、かはとくりの屠蘇をとりでゝ、さかづきとりかはして、みな〳〵まかる。

七つ時ころ船長きたり。御艦乗初の規式、いまはじむるといへるに、誰かれも船板のうへにのぼりて、床机にかゝりてをる。やがて船長は屋形に針を据て、ひかひ楫取、親司は楫のかた、水先はみよしのかたに、残りの船子らは、みよしのさきのかたに、手々に棒をもちてひかゆ。

水先ともに楫廻り、ようござるか。

親司ようござる。

水先ヤンサ〳〵。

親司ヤンサ〳〵。

[添削27] 右四 ひ かたらへ

[添削28] 同 あすのりやうに 料ナラハれうノ仮字ニヤ

[添削29] 七 に 中へいれて 入タル上ニテ云ハヽ、にナルヘキニヤ

[添削30] 左三 を ふしおがみ

[添削31] 四 ひ いへかはし

[添削32] 七 衍 はじむると

[添削33] 八 り かゝりてをる をるハをり云へき格ト見エ、他シコ、ハゐぬナトニテモ宜ケン

[添削34] 九 へ ひかひ

水先けふは天気日柄もよし。宝が嶋から福どまりまでゆかふぢやないか。[添削38]

水先とり楫。

親司オヽ。

水先ヤンサ〳〵。

船子らみな〳〵ヤンサ〳〵。

水先おも楫。

親司オヽ。

水先いまの楫よりそろり。

親司オヽ。

水先イヤロフノハイ。[添削39]

船子らみな〳〵イヤトコヤン、サノ〳〵。

といふて、手々に持たる棒もて、船板を高らかに音さして、突立てやみぬ。

浦賀にありつる船々、いづれもあとさきにおなじく乗初[添削40]するおと、賑々しくそある。

夫より船子らのをるところにいたり[添削41]みるに、船長の前に三献、肴、土器とりてヾ、みな〳〵かはらけとりかはし、四海波静にして、とだみたる声して、三番をうたひる[添削42]口つき、やうしくもしをらし。

押鮎はなくて、秋味の鮭、ごまめに午房なんどのさかなにて、船子らのみくふ。酔しれて、みな〳〵船うたをうたふ。

[添削35]
同　おみよし
水押ノ意ニテ、みをしニハアラサルニヤ、但シ阿行ノ仮字詞ノ中下ニ用タル例ハナケレト、二言連合シタル詞ニハ外ニモ例アリ、

[添削36]
右一　おみよし　前ニ云ヘリ

[添削37]
同　ふひかゆ　ひかへ
〇　ひかふト波行ノ活言ト思ハルトハ衍ニ云ヘリ、

[添削38]
四　うゆかふ

[添削39]
七　イヤロフノハイ
此詞シラネバ、仮字モ定メカタシ

[添削40]
九　衍　乗初する
〇

初春のよき日　おとゝしの着せなかも　みな小桜と成にけり
さてまた夏は卯の花の　垣ねの水にあらひかは
秋になりてのそのいろは　いつもいくさにかつ色の　紅葉にまがふ錦かは
冬は雪けのそらはれて　甲の星の菊の座も　花やかにこそおとしげの
むかふかたきを打とめて　我名を高くあけ巻や
釵は箱にをさめ置　弓は袋をいださじと
富貴の御代と成にけり
と、高らかにうたふ口つきもやさし。
けふや治れる御代のたうとさは[添削43]、青海原の沖中に、かゝれる船のうちまでも、天の恵にもれぬしるしも見えて、春に明たる天の戸の、いまやひんがしのかたしらみわたるとて、伝馬船に水先市三郎、船のかしらに手拭のきよげなるを、しろ〴〵とくろばみたる顔に向ふ。はじまき[添削44]しめて、日の丸のてうちん手にさげ、いかめしく脇ざし横たひ[添削45]立り。船長は武者羽織に立付はきて中央にひかへ、船子らも向ふはしまきして、脇さし横たひ[添削45]、いきほひゆゝしく、みな〳〵械打そろひて[添削46]、ヤンサ〳〵、ヤンサ〳〵と、もろ声かけて乗廻すさま、いさましくぞある。御国よりおなじくこゝにきたりをりし船々に、春の寿まうして、もと艦にかへる。
とかくするうちに、うら〳〵をのぼる朝日の気色のどやかに、こゝろも春にあらたまるこゝちす。
また多く　ひあらしとぞおもふ　賑ひは　浦賀の春の　船の乗そめ

[添削41]
左一　て
いたり○みるに
て文字アリテヨロシキヤ

[添削42]
三　へ
うたひる

[添削43]
右三　ふ
たうとさ
○

[添削44]
六　ち
はじまき
○
鉢巻ナラハはちまきニヤ

[添削45]
七八　へ
横たひ
○

[添削46]
九　へ
そろひて
○　そろひてハ自然
そろへてハ作為

めてたしな　〳〵まつ　船子らも　みなふしおがめ[添削47]　春のはつ日を

艦のうへよりみわたせば、ひんがし浦賀、西うらが、門毎にたてならべたる松竹に、千代の声そふ春風に、光かゝやく朝附日、鶏の遠音ものどやかにきこゆ。

船のうち　ゆみれは浦賀の　西東　春たちそむる　門の松かき

船の規式もみな〳〵めでたくすめれば、ひと〳〵茶たうべて、いざ筆をこゝろみむとて、

音子より　いつもかはらで　うれしきは　春たつ今朝の　こゝろ也けり

とかく知誠もかゝんとて、墨すりながし、竹をゑかきて、

いさましき　鶏の遠音や　今朝の春

と、うるはしくぞ書たる。

炊夫の朝かれひをさせ給へとて、雑煮のもちいひもてきたれり。かゝる用意あるもやさしとて、よろこびてくふ。

ひるごろより、松下吉兵衛、西郷理右衛門、鎌倉屋伝六、山田屋吉三郎、紀伊国や伊兵衛、誰かれ春の寿とて船にきたり[添削48]いはふ。ひねもす空晴て、静にのどけし。

二日。朝はれて、暮かたよりくもる。朝四つ時ころより、去年わたし残しゝよねを荷役す。

午の刻過るころしはてゝ、夕かた松下氏へ知誠とともに、あら玉のとしのいはひにまいる。ゆあみなどして、暮過るころ船にかへる。

ひる長州藩平岡兵部、艦をみせ給[添削49]ひとてきたる[添削50]。

[添削47]
左五　を
おがめ
○

[添削48]
右九　て
きたり○いはふ
て文字有テヨロシキニヤ

[添削49]
左五　へ
みせ給ひ

[添削50]
同　り
きたる
るト云テハ、次ヘツゝク語トナレリ

三日。明かたくもり、朝四つ過より微降雨、午の刻より雪まじりにふりてさむし。暮かたより雪になりて、夜四つ時弐寸はかりぞつもる。

ひる、丸勝の手代政吉きたり。御国よりまぐろを積て江戸にいたる船の、いまこゝに入津すとて、雪ふりにまぐろをさげて来る、[添削51]いとめづらかなれは、とくさし味に[添削52]をさせて、酒たうべ、みな〳〵よろこびあへり。ふる郷を船出してより、積いれたる塩いをなどのみにて、あざやかなるものもたうべねは、みな〳〵よろこびつ、雪ふりにさげてきたるそのひと、こゝろあるに似たり、

四日。夜あくる前に雪やむ、明かた風ふき、のちまたみぞれふる。まなくやむ。暮かたより雨となる。けふは何事もなし。

五日。あかつき雨やみ、明てまた小雨ふる。[添削53]まなくやむ、のちなごりなく空はれたり、よるもおなじ。

高橋知誠、朝五つ時過小船にて江戸へまいる、才田塩千五百たわら艦に積いる。去年の春あめふりつゞきたるがうへに、皐月の十日、また水無月の十日あまり一日、大時化雨して、御国の塩とる場かたやぶれて、塩いでねば、国民塩にうゑて、秋さり漬ものすべき貯ひなく、くるしめば、

君よりおほくのこかねをいだして、こゝの浦賀より塩を買とりて、船してくだし、国民にわかちあたふるに、やつかれも買もとめて来よ、との命あれは、こがね壱両に新才田塩八俵四分づゝに買とりて、三千五百俵を積いるゝなり。常の年は壱両に十八・九俵宛に売買ものなるに、何国も塩たらずとて、日に〳〵價とふとく、春になりては

[添削51]
九 ぬ
来る
是ハ極メテ来ぬナルベシ

[添削52]
右一
をさせて
俗ニしさせてト云ヘル意ナレト、吾ヲタフトムヤウニモ聞ユルニヤ

[添削53]
七 も
ま○なく 前ニ云ヘルカ如シ

七俵七分にうりかふなり。おのれは去年のうちに価を定[添削54]おきつれば、其あたひにて積いれたり。

箱館丸の乗組、測量方代嶋侍郎・木村卓平艦に来たれり。

六日。朝五つ時より、塩弐千五百俵積いる。七つ時ごろしはてぬ。朝いと晴て、暮かたよりくもる。

七日。あかつき八時より雨ふり、明かたやむ。ひる薄くもり。暮もおなじ。ひる八つ時ごろ、松下氏[添削55]に浴にまかる。

八日。あかつき九つ時より雨ふりでゝ、をり〳〵はれてはふりでゝ、よるまでおなじ、何事もなし。

九日。明かた前小雨やむ。をり〳〵ふりて、午の刻ころやむ。

空のよろしきよるなれば、艦を江戸へやらんとて、こゝの港口に引船していだしおきぬ。暮かた、浮雲ありてくもる。

十日。暁九つ時ころ小雨ふり、まなく[添削56]やむ。明かたくもり、後空はれたり。

朝五つ時過、浦賀のみなとより、帆をあげて江戸の海へいづる[添削57]。ならひ風、のち丑東風にかはし、引汐はやければ、金沢と本牧の中ごろの沖にいかりをおろす。

十一日。あした空はれて、朝四つ時帆をあげてはしる。小風なれば、間切走とも船すゝまず、風はけしく吹たてば、七つ時本牧前にいかりをいれぬ。暮かたはれて風凪たり。夜五つ半時前、北間方風吹いづれは、帆をあげてはしる。

十二日。暁九つ時過、引汐はやければ、加奈川沖に碇をおろしてかゝる。明かた空

[添削54]
左九 たおきつれば
つればニテモ難トシハナケレド、カウヤウノ所ハたればノ方ニモヤトモ思ハル、但シつれば、たれば格別ノ勝劣ナシ、人々心々ノ引々ナルベシ

[添削55]
右五 へ松下氏に
にハ、至リタル上ノ語也、若彼方ニ至リテノ上ニテ云ハレシナラバ、下ハまかりぬナラン、又下ハまかるナラハ、上ハ松下氏へナルベシ

[添削56]
左二 もま○なく

[添削57]
三 衍いづる

いとよくはれて、白妙のふじの高ねに、朝附日光さしそふ匂ひものどやかなり。加奈川のかたには、ゑみし艦の十あまり二艘みゆ。

朝五つ時帆を巻たれど、風凪て船はしらず。東風、またならひ風にをり〳〵吹かはりて、間ぎり走れど、さか風なれば、夕七つ時羽根田沖にいかりをおろしてかゝる。

十三日。朝五つ時帆をまきて、北風にまぎりはしる。昼八つ時過より寅東風に吹かはし、船のはしりもよく、暮過るころ品川の沖にいかりをおろして、船子らみな〳〵よろこびあへり。追手ならんには、浦賀よりこゝにいたらんには、拾六里の海路なれば、二時三時はかりにてはしりこんに、逆風なれば、四日とてはしりつきぬるも、いま〳〵しくぞある。けふはひねもす空はれたり。

十四日。朝五つ時過、伝馬船にのりて、九つ時ごろ深川の御蔵屋敷に至る。それより芝の御上屋敷にまゐり、御留主居へ、つゝがなく品川沖に御艦をいれし事などまうして、やうあるひと〴〵の御長屋など見舞て、日も暮つれは、大内縫殿のやどに[添削58]とまる。けふもひねもす晴たり、

十五日。朝晴たり。御本屋敷へまゐり、したしきひと〴〵なととへて、昼七つ時深川の御蔵屋敷にいたり、越川伊之吉のやどに[添削58]とまる。昼より薄くもりて、よるもくもる。

十六日。暁九つ時より雨ふる。明かた雨強。昼九つ時より浅草の三浦陶蔵を[添削59]とへて、夕七つ時ころ雨やみ、空はれたれば、暮過るころ深川にかへりて、きのふのやどに[添削58]とまる。

[添削58]
右一　五　九
とまる　前ニ云ヘリ

[添削59]
四　ひ
とへて
○

十七日。あした霞わたりてのどけし。江戸の町にいでゝ、そこ〳〵と物などとゝのふ。暮かたよりくもる。きのふとおなじ。

十八日。朝くもる。四つ時ころより雨ふる。

芝の御上屋敷にまゐる。御用ある事どもしはてゝ、境野七三郎盛敏のかたにとまる[60]。雨ふりつゞきて、夜四つ時ころより雪となる。

[添削]
[添削60]
左四
とまる　前ニ云ヘリ

十九日。明かた前雪やむ。朝空晴たり。よるまでおなじ。

けふは芝の神明前より、赤羽根の町などにて物とゝのふ。大内縫殿のやどにとまる。

廿日。朝より暮近くまて晴たり。

朝とく深川の御蔵屋敷にまゐり、高橋知誠に用ある事どもまうして、また御上屋敷にいたる道にて物などとゝのふ。けふは知誠陸路より御国にくだる。旅立すと聞えしかば、暮かたかけて深川の御蔵屋敷にまゐりて、馬のはなむけす。

夜五つ半時ごろ、はし船にて千住の駅まて行とて、知誠はいでたつ。児玉氏、国分氏なとゝ、跡見の酒たうべて、四つ時ごろ越川氏のやどにまゐりてとまる。四つ時過より雨ふりいでぬ。

廿一日。あした雨風つよく、九つ時過雨やみぬれば、芝の御上屋敷へまかる。大内縫殿のやどにとまる。暮かた空はれたり。

廿二日。朝くもる。御用の事ともみなはてたれば、あすは品川の艦にまかる用意などして、境野盛敏のやどにいとま乞にいでるに、盛敏の妻、ふる郷にてみまかりたり

とていひおこしたる。此よべにこゝにとくきてけりときゝて、盛敏のこゝろのうちおもひやられて、あはれなるに、かなしみのあまりよめる大和うたなと、とりいでゝみせられぬれは、おのれもさぞと、

いまよりの　寝ざめこゝろや　替らん　たゞかりそめの　別れならねば

とよみてけるを、たふざくに書てよと盛敏のまうしかば、かきてこゝをいでぬ。

暮かた、深川の御蔵屋敷にまゐり、越川氏のやどにとまる。けふはひるはれて、夜くもる。

廿三日。あしたくもりて、雪ちりくる。こゝに詰をるひと〴〵に酒なとたうべさせて、別れを告て、八つ時ころはし船にのりて、品川沖にある開成丸に乗組ぬ。ひる薄くもり、夜くもる。

廿四日。啓蟄二月せつ夜四つ時弐分に入なり。あしたくもりのち小さめ、よるまでおなし、艦のうち何事もなし。

廿五日。暁七つ時ころ、品川の町にかぐつちのわざわひいでぬ。きのふより雨つゞきてふれど、北風はげしく吹たちつれば、ほのほさかんに燃あがりてやまず、雨は明かた近くやみたれど、火はやます、明六つ半時ころ火しづまる。船にてのちに来たる人にきけば、弐町余やけて、橋のもとにてとまるといへり。

また小雨ふりてやみ、ひる薄くもり、暮かた近く空はれて、東風吹つよし。けふは陸より艦に荷など船子ら積いる。

廿六日。ひねもす晴たり。

昼九つ時ころ、船長兵三郎、陸の用はてゝ帰りきたれば、まなく帆を巻てこゝを艦出す。追手なれば、ふねよくはしりて、夜五つ時過るころ、浦賀の港口に着ぬ。いかりをおろしてとまる。

廿七日。あしたくもる。

明六つ半時、御番所御改のひと〴〵きたり。ゆへなく艦のあらためすみぬれば、港のうちに艦をいれて、いかりをおろす。御穀宿松下氏きたれり。小雨ふりでゝ、まなくやむ。昼薄くもりて、夕かた晴たり。佐藤長脩をつれて、松下氏へ浴にいたる。夜五つ時ごろ艦にかへる。

廿八日。あしたくもる。のち小雨ふりて、まなくやむ。昼晴たり。されとも浮雲おほし。八つ時過より宮原吉三郎のやどにいたる。かれは松下氏の親の弟なり。内池行孝、松下氏もまかる。酒・めしなといでゝもてなす。暮かたに艦にかへる。空はれたり。

廿九日。あした空はれたり。西浦賀鎌倉屋伝六やとに、内池行孝をつれていたり、酒たうへてのち、こゝの町に豆州加茂の温泉をうつして浴するところあれば、いりぬ。七つ時船にかへる。暮かたよりくもる。

二月朔日。ひねもす空はれたり。昼七つ時過、公義の蒸気船朝陽丸、この浦賀に御修復してあるを、拝見にまかる。暮かた船にかへる。よるもはれたり。

二日。朝陽丸より調役何某ふたり、測量方荒井育之助（郁之助）、古河源吾（甲賀）まで四たり、この御艦にきたる。酒などたうべさせて、七つ時ころ人々かへる。けふはひるよるとも、

空はれてのどけし。

三日。あした空晴たり。朝五つ半時過、浦賀港を艦出す。北風つよく吹たるも、九つ時過より凪て、船はしらず、暮六つ時房州那古前にいかりをおろしてかゝる。よるまで晴たり、

四日。あした空晴たり。暁かたより北風つよく吹てやまねは、船出せず、夕かた風凪て、薄くもりとなる。雨のもよほしあれば、なほ船をいださず。

五日。暁八つ時ころより雨ふりてぬ。昼九つ時ころより東風つよく、雨ふりてあれきたる。時化こみにたれば、なほふねをいださず。ひねもすふりあれて、夜半に雨やみぬれど、風はなほやまず。

六日。あした浮雲おほくしてくもる。

朝五つ時、艦をいだす。北風なるに凪て、空はれ、のとかに、根元沖にて艦ゆれてたゞよふ。八つ時ころ東風にかはしくれば、澗切（間切）はしれとも、風うけあしければ、また根元沖に漕もどして、暮六つ時いかりをおろす。

七日。暁九つ半時過、俄に西北のかたより神なり鳴いでゝ、いな光いとはげしく、きもつぶるゝかとぞおもふに、雹ふることおびただしく、大さもくろし玉に碁石のつぶことも交りて、艦の甲板に積りて、あくるあしたまて残りてある。

暁八つ半時ころ、東のかたにかみなりゆきて、浪風おさまりしかば、船子らはじめ、ふといきつきてよろこびあへり。

明六つ時空はれて、こゝを船出す、ならひ風まなく吹かわりて、艦たゞよふ。東の

かた、空と海とのはてより、黒くけぶりたちつれは、何ならんと見やるうちに、蒸気船のかたちちひさくあらはれみやるに、こなたにむかへてはしりくる。飛鳥よりもはやくぞおもはる。やがてこの艦とちかく行かふてはしれり。いづくのえみし船ならん、帆しるしもあげねば、しれず。風凪て、こと船はたゝよへてあるに、けぶりをたてゞ、やすらかにはしることはやきに、おどろかれけり。

かくて朝五つ時過、丑東風吹出て、風受あしかれば、遠つ沖に澗切（間切）はしり、夜五つ半時ごろ、和田の港前に艦を寄せかけてとまる。日くるゝころより空くもれり。

八日。朝とく帆をまきて艦をはしらす。けふも北東風にて逆風なれば、遠沖にまぎりはしる。昼九つ時ごろよりくもりて、七つ時ごろ雨ふりきぬ。暮六つ時内浦前に艦をよせてかゝる。時化もよとなれり。

九日。暁九つ時ころ、いなさ風にかはしふきふり、いとつよし。船子らさわぎつるに、八つ時ころおもひのほかに風凪て、雨なほふれり。夜明かた、北間方の風にかはしたれば、艦を出すに、けふも風受あしく、また遠沖に澗切（間切）はしり、奥津の沖も漕すぎて、鳥山岬まてはしるに、空かきくらし、なほ雨もやまず。浦賀を艦出してより、日毎にさか風にて、日和あしければ、よからんまでは、上総の奥津に漕もどしてかゝらんとて、昼八つ時過るころ、港にいりて船がゝりす。

こゝには去年の春も船がゝりしてけるに、陣屋に詰ゐたる斑目友之輔も、去年の師走にんはてゝ、ふる郷にくだり、いまは菊地七郎左衛門詰ゐたりとて、御穀やど浦部孫左衛門申ければ、とくあひて、用あることどもいはんと、浦部氏のやどにいたる

に、菊地氏もきたりて、何くれとかたらへて、夜五つ時ごろ艦にかへりていねぬ。

十日。けふは空はれて、ひねもすのどかなり。

去年あひつるひと〴〵きたりてさわがし。昼八つ時ころ浦部氏にいたり、浴などして、くもるころ艦にかへる。けふは春分にて、夜四つ時九分にいりぬ。

十一日。ひねもす空はれたり。

内池行孝、わが従者彦三郎とふたり、こゝの山にうら白とりにとていでゆく。昼九つ時過、御陣屋詰の菊地氏、御穀やど浦辺氏を連て艦にきたる。酒なとたうべさせてあるに、行孝らも、うらしろ・根芋なんど摘てかへりきたる。七つ時過るころ、菊地氏はかへり行けり。

十二日。朝より昼九つ時[添削62]ころはて、晴てのどかなり。のちくもりつ。

名主日置又五郎のやどにいたる。何くれと物語などして、七つ時過るころ雨ふりいでんけしきなれば、こゝをいでゝ、浦部氏のやどにいたり、ゆあみして、暮六つ時艦にかへる。雨ふりいでゝ、夜半ちかくやみぬ。

十三日。あした晴たり。

昼九つ時過るころ、浦部氏よりきたらせ給へとて、はし船おこし[添削63]たれば、行孝をつれて艦をいでんとするとき、南風吹いでにしかば、船長兵三郎に、逐手吹たるぞ、いよ〳〵吹たてなば、帆を巻てよ、おこたるなやめと、彦三郎をして声かけて、はし船にのる。

浦部氏のやどにいたるに、逐手のいよ〳〵吹かゝれば、とくゆあみして、御陣屋に

[添削61]
右三
きたる　ぬ
○○

カウヤウノ所ハ、きぬト云ヘル方ヨロシクハアラザルニヤ

[添削62]
四
ま
九つ時ころはて
○

はハまニハアラザルニヤ

[添削63]
左一
せ
おこしたれば
○

いたり。菊地氏にあへて[添削64]、風よければ船出せん、いざさらばといえつて[添削65]、艦にかへるに、やかて菊地氏もあとより逐つきて艦にきたり。ともに出ふねの酒なとたうべ、よろこほべて[添削66]、七つ時過るころ、とも綱をときて帆をあげたり。

鳥山岬沖にて、日暮れてはしるに、東風に吹かはし、空くもりて、稲妻ほのめき、おそろしげくなるに、大東岬まではしりかゝれり。

十四日。暁九つ半時前東風つよく吹いでゝ、さか風なれは、はしるにあしければ、大東岬遠沖より艦を漕もとしつ、明かたちかく空のくもりはれて、なほ東風はげしく、また奥津の港に艦をいれてかけつ。きのふこゝを跡さきに出にし船々も、みな〳〵漕もどしてきたれり。ひるも空はれてのどかなり。

十五日。ひねもす空はれて長閑なり。

昼九つ時[添削67]過より、菊地氏・浦辺氏のふたり艦にきたる[添削67]。砂子浦御穀宿源蔵、海老久年母などもてきたれり、かれは去年の夏御国に下りしとき、こゝろをかけてやりし、おやひまうし[添削68]にとて、たづさひきたるなり[添削69]。さけ、めしなとたうべさせてかへす、

十六日。きのふにおなしく、のどけさいやまさる。日置睡鴎のやどにまかる[添削70]。菊地氏もきたり。茶・さけなとたうべて、四方山の物かたりに、暮過るころ艦にかへる。空くもりてくらし。

十七日。暁九つ半時より雨ふる。昼四つ半時雨やみ、空はれたり。

菊地氏より御足軽権蔵もて、初鰹と筍とを得たれは来よとておうせたれば、まかる。かつ小をのさし味、たけの子のあつものにて酒たうべて、暮六つ時艦にかへる。

[添削64]
六
あへて
○
[添削65]
七
いえつて
○
[添削66]
九
よろこほべて
○
よろこほひハよろこひノ延言ナレバひヲ用ベシ
[添削67]
左二
艦にきたる
[添削68]
四
おやひまうしにとて
おやひ　ハ　おやまひ　ト云ヘル事也、謝ノ事ハ前ニ云ヘリ
[添削69]
同
たつさひ
[添削70]
七
やどにまかる
にナラハまかりぬナルベシ

長修もまかりき。[添削71]まなく雨ふり出ぬ。

十八日。暁九つ半時ころ雨やみて、北風はけしく吹たつ。明かたなほ風やます、昼四つ時ころ風凪てのどかなり。

日毎に追手の風をまつに、吹ねは、みな〳〵こゝろうんじたるを慰めむと、艦にて菊地、浦辺、日置睡鴎、をしへ子行孝、長修の五たりにみつかり、会席料理して[添削72]ふるもふ。みな〳〵つどふ。

睡鴎より、いま網して得たりとて、籠を縄にて結ておこせたり。解てみれは、鱸とさよりとあるに、鱸の生て籠のうちにをどりてある、めづらしさいはんかたなし。とみに、塩やきにしてのみくふ。みな〳〵も、艦にて会席をたうべる[添削73]ことのまれならんとて、よろこびあへり。ことに生てある魚まて得たりとて、めづらしがる。

七つ時ころ浴にとて、睡鴎のさそひければ、みな〳〵と陸にあがり、睡鴎のやどにまかり、浴して、暮過るころかへる。空くもりて、をり〳〵村雨ふる。

十九日。あした空晴たり。

船子らも追手の吹ぬに、こゝろうんじをれは、慰めむとす。彼等はふみ読ことのむづかしかれば、ざれてふみして、

会席料理しんし候はゝ、正午より御越可給候

艦のともより

二月十九日

船長とのへ

[添削71]
右六
も
ま○なく

[添削72]
左二
ま
ふるもふ

[添削73]
七
ふ
たうへる

親司とのへ
賄とのへ
水先とのへ
[添削74]まかなへ手伝とのへ

と書て、従者彦三郎して、[添削75]みよしの水手部屋にとくいらへ[添削76]おこしてよとてやる。

やかて彦三郎かへりきにけれは、[添削77]いかゝしつときくに、ふみのよめねは、船子らみな〳〵あつまり、早引節用集、消息往来なととりいでゝ、文字をひとつ〳〵あてひきてよみ[添削78]ゐると聞に、またいらへ、とく[添削79]おこせと[添削80]いへやる。たゝ今にとておこせねは、聞に会席のふたもじを、あつまるついでと判じ、正午とあれば、初午のことを何とかいひ[添削81]おこし給ひけんなどゝて、またよく読はんじかねて、船子らがや〳〵といろ〳〵によみによみ、はんじをれりといふに、をかしさいはんかたなし。なか〳〵よみ解かねさせんも本意なし。よし〳〵、行孝に程よくしてよとまうし、かばかれ行て読きかせたりとなん、やかていらへをおうせたり。

今日御会席、御末広可奉伺候旨、御花墨御恵程被成下、冥加至極、難有仕合ニ奉存候、此旨宜敷御礼被　仰上被下度、如斯御座候、恐惶謹言、

兵三郎

二月十九日

内池種治様

と、うや〳〵しく書てけり。彼の節用往来などいろ〳〵とりて、からうじてあつ

[添削74]
左三
ひ
まかなへ

[添削75]
四
お
みよし　前ニ云ヘリ

[添削76]
五
せ
おこして

[添削77]
六
いかゝしつ
る
〇と

[添削78]
八
よみゐると
〇
しハツゝク詞ナシトス、言外ニ含タル意アラハナホシレナルヘキニヤ

[添削79]
九
よ
おこせ〇と

[添削80]
同
ひ
いへやる

[添削81]
右二
せ
おこしゐひけん
〇

め書たるべしとて、をしへ子らと興じわらふ。

午の刻にもなるに、船長はじめ艦のともにきたれり[添削82]。きのふの鱸、何くれとあるじもうけしてければ、よろこびによろこびて、こゝろよし〳〵と、飯・酒のみくふ、つらつきみつかたもよろこばしく、徒然のうさをはらしつ。浦辺氏御足軽権蔵きたる[添削83][添削84]。昼浮雲くもりて、暮かたはれたり。

廿日。あした晴て、昼薄くもる。

奥津に泊りし日をかそふれば、十はた二日に成ぬ。まして去年の師走船出して、日をへぬる数をかそへなば、およひもそこなはれぬべし。追手のなきに、みな〳〵うれへなげくこゝろやりにとて、行孝従者なと打つれて陸にあがり、こゝの山田をあさりて、根芋なと摘て、こにいれて浦部氏のもとにいたり、湯あみし、麦のめし、酒なとたうべて、七つ半時船にくる[添削85]。

けふは陸にあがるころより、をり〳〵小雨ふりて、暮かたまてくもりて、よるはれて、星月夜なり。

廿一日。ひねもす晴れて長閑なり。

行孝ぬし、下田港に澗掛し候とき、桜の鉢をもとめて、船のうちにて手づからおふしたてつるに、うるはしく花のさき初ければ、

春風の　しらすてさきし　花なれは　ちることをしも　ならはざりなん

いたづらのこゝろやりになん、磯のかた塩干にとて、行孝船子ら誰かれ、はし船にて出ゆきぬ。やかて鮑、さゝゐ[添削86]、蛸、また小々やかなる蟹なんどとりて、きのふの根

[添削82]
左八　りぬ
きたれり
○○

[添削83]
同　ま
あるじもうけ
○

[添削84]
右二
きたる
きたる人ヲ直チニ取扱フカドウトカスル意アラバ、事ニヨリテきたるト云ベキ勢ヒモ有ベシ。只来タル事ヲノミ云ハヾ、きたりナルベシ。又来方宜シケン。きたりトきたれりトノ差別ハ、格別ノ事ナシ。きたりハ来有ノ意、きたれりハきたりへ今一ツ有ノ字ヲ添タル気味合也

[添削85]
左一　衍
船にくる　おほしヲ用
○

[添削86]
八　え
さゝゐ
○

芋、山海の珍味とて、酒たうべて、憂をはらしつ。

暮かたよりくもり、夜四つ時過小雨[添削87]ふりくる。

廿二日。明はなるころより、いなさしけ、塩さゐ、あら波、山のごとく打きて、こゝの波戸を打こえ、つなぎし船々に大涛よせ来たる。いづれも船子らさわぎに騒きて、碇の数あらん限りおろして、纜を[添削88]たがへに詰かはし、あらだつ波をくゞりて、[添削89]もあいをとりふせぐに、ひねもす、夜すがらやまねば、[添削90]今や十あまり壱つの大船、あら波にさぐられて、[添削91]どのふねやくつがへらんかと、こゝろをいため、おそろしさいはんかたなし。

廿三日。夜明るに、猶やまず。やう〳〵朝五つ半時、風北間方に吹かはしきて、雨はやみぬ、されども風強く、をり〳〵日の光あらはれて、小さめもふり、夜になりて波風なぎぬ。

きのふよりのこゝろぐるしさ、たとへんに物なし。

廿四日。あした晴のちくもり、村雨ふりて、昼七つ時より吹たり。何事もなし。このころのあれにて、近きに追手の風吹出ぬべしとて、それのみ船子らまちに待てあけくれ、空ばかりぞなかめて[添削92]おる。

廿五日。ひねもすはれたり。昼八つ時ころ、南の風吹いでぬ。追手の吹くるぞやとて、[添削93]にわかに船子ら騒き立て、船々乗おくれじとて、纜をときて、みな〳〵船を出す。夜四つ時まて走るに、風凪て、東北の隅に[添削94]ちいさき黒雲のみやるに、やがてひろごりて、丑東風吹出ぬ。

[添削87]
右二　衍
ふりくる
○

[添削88]
六　ひ
たがへに
○

[添削89]
七　ひ
もあい
○

[添削90]
同
今や　此や咏ノ心ヵ

[添削91]
八
どのふねやくつがへらんかと
ヤハかニテヤ有ナン、又かハ衍ナルヘシ。サテカウヤウノ文意ハ　どの舟がくつかへらんとナトニテハアルマジキニヤ

[添削92]
左八
を
おる
○

廿六日。暁八つ時ごろより丑東風はげしく、空かきくもり、逆風なれば、遠沖に間切はしる。夜明て、風いやはげしく、船すゝまず。せんかた波にゆられて、下総永江の沖まで弐拾弐・三里漕来たるを、朝五つ時また奥津をこゝろざして船をかへすに、[添削95]小雨ふりくる。日暮るころ上総の鳥山岬迄漕かへすに、風凪て、船漂へり。夜四つ半時西風吹いでたり、追手なればとて、また〳〵こゝより船をなほしてはしらす。空晴たり。

廿七日。暁八つ時南風に吹かはし、なほ風よければ、よろこびて、終日夜すがらはしる。風も吹やまず、空くもれり。

廿八日。夜明て、地方に船をよせて、山やみゆると船子らにたづねさせつ、波やかて船の跡にほのかにみゆるは、岩城の木戸の山ならんといふ。昨日遂手の吹いでゝより、よる昼はしりて、七拾里にあまるほと、よくもはしれり。追手また吹つゞきつれば、なほはしれり。

朝薄くもれり。朝四つ半時過、風北間方に吹かわす。あはれ、けふ一夜追手の吹つゞきたらんには、事なく寒風沢に帰帆せんに、あやにくのさか風ぞやとて、人々なげきに歎く。いかにせん、間切はしるよりほかに、相馬領小浜沖より、さらばとて、間切はしるに、空かきくもり、昼九つ半時よりまた丑東風にかはし、いよ〳〵はしるに[添削96]あしく、[添削97]雨はふりくる。地方みえわかず、風もよわく、夜すがら沖中に間切はしる。

廿九日。夜明て小雨やまず、風凪て、ひねもす寅東風よわく吹て、小雨かきくらしつるを、間切はしりて、御国の釣師浜前まて漕きたりて、日暮なんとす。地方にあま

[添削93]
右一
はにわかに
○

[添削94]
三
ひちいさき
○

[添削95]
九
小雨ふりくる 衍
○

[添削96]
右五
あしく 前ニ云ヘリ
○

[添削97]
六
雨ハふりくる 衍
○

り近く、間切寄たらんに、日暮なば、岸にこゝろおかれつ、卯辰に針をさして、船を沖にと、雲一夜、やれ夜の明るをまちて、とかくはかるべしとす。夜すがら小雨、時化こみて、空くらし。

三十日。夜明て、なほ小雨ふる。夜すがら塩なころに船をとられておもほえず。相馬領塚原浜沖に船はありつ。けふも小雨時化こみ、丑東風やまねは、ます〳〵卯辰のかた遠沖に間切はしりて、風やかはすとまつに、かはらず。せんかたなきに、昼七つ半時ころ帆をみなおろして、船にたらし、綱をともにつけて、風したに流す。よすがらかくしつ、

三月朔日。明てみれは、岩城領木戸沖まて十余里風したに船の流れたる[添削98]。小雨なほふる。やかて北風にかはして、つよく追手の今日明日に吹くべき空のけしきならねば、水戸領平潟まて船をかへして、日和を待よりほかあらじとて、こゝより帆をあげて、平潟をさしてはしる。つらさおもふべし。

そこへは順風なれば、はしるによし。朝五つ半時雨やみ、風はげし。昼九つ半時前かた[添削99]、常陸のくに平潟の港前の沖にいたり、いかりをおろす。こゝにて日和をまつべし。

よるもくもると、雲海底あしく、余波高くさぐりて、船大ゆれにゆれて、いぬることならず。夜一夜おきあかしぬ。くるしさ、誰かれもみな〳〵あはれなり。をしへ子長修うたよみつといふ、

この船の　波にたゞよふ　わた海の　神もあはれみ　追手ふかせよ

[添削98]
右三り
流れたる
○

[添削99]
八
前かた
○○
かたハナクテハイカゞニヤ

となん。

この人は、常に歌よみたることもあらぬに、このころのくるしさにうみつかれ、こりにたるに、よへ一夜くるしさをかさねて、からうじて神にねぎうたよみいでしなるべし。などか神もあはれとおほしたまはざらんやは。

二日。おなじところにかゝる。朝薄くもり、東風ひねもすよわく吹つ。昼はるれて、浮雲おほし。夜くもる。何事もなし。

三日。暁九つ時過より小雨ふり、明はなれてはれたり。やかて小雨またふりて、昼七つ半時はれたるけしき、空よければ、あすは追手吹ならんとおもふを。たのしみてあるにと、宵も名波高く、船ゆれつ。徒然なれば、

あまた数　うきてつもるを　しら波の　いつ寒風沢に　よする船とも

とよみて、たはむれに書て、船子らにかへしをよみてやる。やかて三たり四人、かへしうたあれども、くたゞ〳〵しけれは、もらしつ。空はれ、星あまたし。久しうとて北のほしをおがむ。[添削100]

四日。ひねもす空晴たり。朝四つ時前、南の風吹いでくれば、帆をあげてはしる。昼八つ時過るころ風凪たり。やかて西風にかはし、逐手なれば、よくはしりて、岩城領木戸浜沖にて日くれ、よる四つ半時過るころ、北風にかはし、逆風なれば、遠沖のかたへ間切はしる。

[添削100]
左二
を
おがむ

五日。夜明て、地かたに船をよせてみれば、南へ潮のはやく通るにひかれたるにや、一夜はしれりとおもふに、おなじ木戸浜沖にてぞある。やかて風凪て、のどかに

空はれて、風なければ、この沖にたゞよひをれり。夜もおなじ。

六日。きのふにおなじ。風なければ、なほこゝにたゞよふ。

七日。あした海つら霞わたりて、のとかになほ風凪たり。

この沖中に三夜ふた日船たゞよひあるに、いまや逐手の吹てやすると、四方をみわたせば、山もみええで、たゞ海ばらばかりぞにらめてをる。

朝四つ時ころ、やゝ南の風吹出てくれば、すはや逐手の吹ぞやとて、みな〳〵よろこびはしるに、風いやましに吹かけて、つよくなりくれば、船はしることとく、けふ木戸の沖よりはしりて、寒風沢港までは三拾七・八里もあるべくを[添削101]、夜五つ半時につきぬ。

去年の師走の二日にこゝを船出してより、かへさの日数も過ぬる程なれば、逐手の風吹けしきなれば、日和山に登りて、けふかあすかとまちにまちてゐしとて、ひと〳〵つとひきたり。船子らのうからやからあつまりて、よろこびによろこぶ。夜のあくるもおもほへずさゞめきあへり[添削102]、きふも[添削103]□□る、空はれてのどけし。

（仙台市民図書館所蔵）

[添削101]
左二
あるべくを
き
○

[添削102]
七
おもほへず
え
○

[添削103]
八
きふも　きハけノ誤ニヤ
○

[解説]

「ふなわたり日記」は、万延元年（一八六〇）一一月より翌年三月までの、開成丸の浦賀・江戸への航海を題材とした紀行文である。筆者の村田善次郎（明哲　一八一六～七八）は天文学者で、安政三年（一八五六）一〇月から軍艦方御用係として開成丸の建艦に携わった（史料13）。就航後は測量方頭取として、「ふなわたり日記」の冒頭で自ら記しているように、

ここまでの開成丸の航海すべてに乗務していた。

万延二年一月五日の記事から、この航海の目的が浦賀（神奈川県横須賀市）での才田塩（阿波国撫養の塩田で産する塩）の買付であったことがわかる。春の長雨と夏の風水害により、仙台藩領の塩田が被災し、領内で塩不足を来したため、藩領米（本穀米）の販売益を原資とする塩の移入を、藩主・伊達慶邦に命じられていた。開成丸が藩主の命で災害対応を目的に出動していたことを示す、貴重な記録である。

この航海は、冬期の荒天に阻まれ、順調とはいえなかったようである。往路では乗員の水主たちが漂流を覚悟する状況にまで陥っていた。復路も風向きが悪く、寒風沢への帰還が大きく遅れていたのである。

一方で、「開成丸航海日記」（史料30）と同様に、往復の航海の様子が生き生きと描かれている。開成丸乗組員たちの船内での動向や心理状態、荒天のため入港した下田（静岡県下田市）や目的地の浦賀、江戸藩邸および深川の蔵屋敷（東京都）、奥津（千葉県勝浦市）などでの人々との交流が詳細に記される。仙台藩の廻米を支えた穀宿衆の具体的な姿が見られる。村田ら乗組員の楽しみは各地での入浴であった。下田では、仙台では観測できない「老人星」（カノープス）を見つけて歓喜するなど、天文学者ならではの記述も見られる。

浦賀での船上での年始儀礼や舟歌の歌詞は、民俗学や国語学にとっても重要な資料となろう。関連して、添削者は不明であるが、添削の内容から、本文の随所に仙台方言（口語）の影響もうかがえる。

洋式艦船に関わる武士間の交流もあった。二月二日には幕府の蒸気船・朝陽丸の乗組員だった荒井育之助と甲賀源吾との交流を記す。この七年後の戊辰戦争時に、降伏を是としない仙台藩士らとともに箱館（北海道函館市）に向かう事になる。

開成丸の江戸航海の様子、寄港した各地の風景や、交流した人々の姿を伝える、貴重な史料である。

六　開成丸での商品輸送

32　開成丸御直行方より拝借証文

文久元年（一八六一）

（帯）
「　開成丸御直行方御用金之内
江戸下り荷物前金拝借
被成下候証文
酉六月　小西屋久左衛門　」

一金百両也（抹消線アリ）

右之通、開成丸御直行方御用金之内奉拝借候義、実正ニ御座候、此度御下船之節、士凡望人次第、於江戸表ニ諸色御買上、御積下り之上、御買上御入料・運賃金割合、御元金江一割之御利潤ヲ以、荷物被渡下候ニ付、砂類（砂糖）等注文申上、江戸問屋へ為登仕度、荷物取指置申度候間、注文申上候諸品、江戸問屋仕切金之内、右拝借金高御差引、問屋江被相渡候様被成下度候、万一故障等御座候節者、被仰渡次第、無遅滞右高上納可奉申上候、依而為後日之、拝借証状如此奉申上候、已上、

文久元年六月　大町四丁目
小西屋久兵衛㊞
同
小西屋久左衛門㊞

村田善次郎様
古山誠之丞様
御家来様中

（東北大学附属図書館・小西文書七―一―八二）

【解説】

仙台城下町の中心部・大町四丁目の商人・小西家の文書に、開成丸による商品取引の記録が残る。史料番号32から40までの史料の原本は一括の形で（一包みにされて）保管されている。

開成丸「御直行方」より、砂糖などの仕入れ金として金一〇〇両を拝借した証文。仙台藩が開成丸「直行方」を通じて商品

の仕入を行い、輸送経費と、商品代金の一割を手数料として徴収していたことがわかる。

33 名前書上（直行方役人） 文久元年（一八六一）

村田善次郎様　芳賀今朝治様
古山誠之丞様　鈴木十平様
志村将助様
橋本清太夫様
内池種治様　弐百文両替
八百六十六切判　百五十六文
佐藤久米（久馬）様　内八百五十三切半　弐百十五文
森田九平様　弐切両替
御百性（百姓）　引テ拾壱切百三十一文
影山芳蔵様

（東北大学附属図書館・小西文書七―一―七五）

【解説】

小西家文書の開成丸関係文書に同封されていた人名の書き上げ。芳賀と鈴木以外は、開成丸建艦碑に名前が刻まれている、仙台藩の天文方役人。開成丸直行方役人として書き上げたものか。影山芳蔵の肩書きに「御百性」とあり、天文方役人の来歴を考える上で注目される。金額の書付の性格は不明。

34 小西久兵衛書状（下書） 文久元年（一八六一）

一当国御軍艦船開成丸、此度御石積入出帆仕候処、帰船之節者空船ニ相成、荷足無之、何時も船中難義ニ付、御吟味之上、砂糖・繰綿等積下り、着岸之上、当所右仲間商人ニ限リ御払相成候事ニ被仰渡、私義右指配人被申付候間、別紙之通注文申上候所、先以金百両為相登申候条、無事着、御入手被成下度注文高買付、早々御下し被下候、惣仕切金代之義者、不遠開成丸御地着岸船着次第、乗込御役人衆より御沙汰可仕筈ニ有之、其節荷物引替、御勘定皆済御受取可被下候、

一右御取組、此度ニ不限、往々大行ニ相成、荷物沢山積入可申手配ニ御座候間、其御心得被下度、尤通用等之義、聊仕

候共、御無心可仕義者毛頭無之候、此度之振合ヲ以、大さし注文差出し置、着船之節荷物引替、金代御勘定可仕候間、無御心置御取引可被下候、

一此度手始之義ニ御座候得ハ、直印何分御出精品柄并、品物并ニ貫掛等別而御手入、目減相出不申様御賞付改メ被下度奉願上候、実者直々出府賞方可仕様可然、店へ懸合、買方可然様被申付候所、御店様右へ兼而無御如才御取計被下候義ハ、承知仕居候間、書状ヲ以得御意申候、尤宜敷御承引可被成、尤此元仲間之衆迷惑相成、世上の障ニ可相成義者、取計候様仕候間、無御心配被下間敷、宜敷御承引可被下候、尤此元仲間之迷惑、世上之障ニ可相成者、取計不申間、聊御心配被下間敷此元仲間内御店得意方迷惑ニ可相成者、聊取計不仕候、世上融通宜敷ために御国元引立之ため、御取行ニ御座候間、宜敷御承引被下候、

一当節、白砂糖銘物、無少下物多之由ニ承知仕候処、初雪以下之品者、此元迄も頓ト不印ニ御座候間、何分注文之通御取拵、此状着買付、御下し被下度奉存候、

一此元様子、別而相変義無之、追々乍気候日増照込、出穂相待候計ニ而、人気殊ノ外勇立、安平ニ御座候、先ハ右之段如此ニ御座候、余ハ後便可申上候、以上、

六月廿一日　小西久兵衛

小西利八様

御店衆中

尚以、本仕切名宛覚

仙台様御軍艦

御直行方

御役人様中

船中乗込御役人

古山誠之丞

橋本清太夫

御地逗船中、深川仙台屋敷住也、

御地逗留深川仙台屋敷

右役人衆、商道之事者つゆ不心得■■ニ御座候間、何分叮嚀ニ御取扱、程能御受払被下度奉希候、以上、

（東北大学附属図書館・小西文書七―一―六七）

【解説】

仙台大町四丁目商人の小西久兵衛が、江戸に店舗があった同

族と思われる小西利八にあてた書状の下書。開成丸で江戸に御穀米を輸送した帰り荷物として、砂糖や繰綿などを積み込み、「仲間商人」に限って販売することとなり、小西家がその差配役を命じられたことがわかる。御直行方の江戸での拠点は江戸・深川の蔵屋敷であった。

開成丸造艦に関わった天文学者の古山誠之丞と橋本清太夫が、商品輸送の窓口役ともなっているが、小西久兵衛は両名とも商売には暗いので丁重に対応するように、と注意をうながしている。

35 小西利八書状

文久元年（一八六一）

（端裏書）
「〆・様　［日］」

七月五日

其御地廿一日出之御状、忝拝見仕候、先以御表御家内様御揃、益御勇健被遊御座候、珍重之御儀奉存候、次当方無事罷在候、乍憚御安心可被下候、

一此度御便より、御運漕船開成丸御石積入相成候下り船、右之節から船ニ而者、難義出来候節困入候事ニ而、此度砂唐（砂糖）・綿之類積下り可申候迄、右御渡し被仰付候間、此度御注文被仰下、難有仕合奉存候、則添金百両也、御為替被下候、慥入帳仕候、此段御安心可被下候、御注文分則、

一　大島喜白　六拾挟
一　白雪印　拾樽
一　飛雪印　廿樽
一　初雪印　拾樽

右之通り御注文有之、右開成丸乗込御役人より不残代金ハ相渡リ可申通、金子引替、荷物御積入可申付候、委細承知仕候、右金子相渡リ候者、早々御積入申上候、若不渡リ之節、金子丈御積入申上候、此段左様（カ）御承知可被下候、下店当時者勘（ママ）手廻リ兼申候間、此段御断申上候、此段愈承知、御聞済候ニも、尚御注文此度不限、此持返ニ被仰付候通、大さらニ而荷物積入之節引替、金子御渡し相成候由、難有仕合御座（カ）候、何ほと御引立、多少共御注文可被仰付より、憚なから此段御厚礼申上候、直印之義、精々出精差上申候、何れ売附、重次より差上申候、

一此度開成丸乗込御役人中様

古山誠之丞
橋本清太夫

右之御役人乗込之由、委細承知仕候、
一此度成行可相咄申候、やわか（カ）敷先ニ而、大ゐニ利ニ相成候
上頃合、其後坂入舟無之為ニ厳敷、盆前売物差支有之候様
子、右之通リ買人出廻り、三地引置申候、

相庭薩州
大喜上株　（符牒）
徳之島上株　（符牒）
薩天光　（符牒）

右之通御座候間、御引合之品御注文被仰下候様奉御願可申
候、先者右申上、如此御座候、恐々謹言、

七月五日　小西利八
代金次郎

小西久兵衛様
御店中様
人々御中

（東北大学附属図書館・小西文書七―一―七〇）

【解説】

史料34への返書。小西久兵衛は黒砂糖と白砂糖を注文している。黒砂糖については（奄美）大島や喜界島、徳之島（いずれも鹿児島県）産のもので、大坂を経由して仕入れられていた。

36 小西利八書状

文久元年（一八六一）

（端裏書）
「小久様　　日」

十月五日

其御地廿一日出之御状、忝拝見仕候、先以御表
御家内様御揃、益御勇健被遊御座候、珍重之御儀奉存候、
次当方無事罷在候、乍憚御安心可被下候、
一此度御便より、此元廿五日出迄、御請被下候、千万難有仕
合奉存候、
一右御便より、兼而御注文品之内、開成丸御役人様御相談仕
候、委細御承引被成下候、忝奉存候、右御買附之差引残り
過上分、此度為替御振替被下候、則、

一金拾両壱分
　壱匁二分弐り
　右者本郷和泉や丈助殿御渡可申候由、承引仕候、
右之通御渡申上候、御手札今便御戻之上趣ヲ以、左様御承引可被下候、
一御船下リ候節、又々御注文被仰付候よし被仰聞、難有奉存候、何卒御引立、以多少共御注文被仰付被下候様奉御願上候、
一貴地十七日夜、殊ノ外大地震、土蔵・人家も大破候事有之由、海辺多分死人も有之趣、驚入申候、御店様御別条無之由、御同悦奉存候、尚〆店一統別条無之由被仰聞、難有奉存候、此段御礼申上候、何卒跡静ニあらせ度奉存候、
一此度成行、其後大ゐニ致被成候、昨今先折合罷在候、何分船有之候有荷左様無之、入船持、此処入舟有之分、於貴配、一引立可有之哉奉存候、
昨日ノ相庭出精申上候、
一大嶋迫株（符牒）
一次　（符牒）
一徳上株　（符牒）
右之株ニ而、貴地不向候品も有之、何れ弐・三株ツヽ引替不申候而者、上柊素より、左候者、先残る丈高直相成申候、
薩
一天先印（符牒）
右之通直段有之候得ハ、何卒御引合品々、多少共御注文被仰付被下様奉願上、先ハ右之通り、如此御座候、恐々頓首、
十月五日
小西利八
定次郎
小西久兵衛様
御店中様
人々御中
（東北大学附属図書館・小西文書七―一―八一）

【解説】
文久元年（一八六一）一〇月一五日の小西利八書状。内容は、前掲の開成丸直行方を通じた砂糖取引に関するものか。小西久兵衛から「御船下り」（開成丸の帰港を指すか）の際に再度の発注がある旨が伝えられている。

四条目の（九月）一七日夜の地震は、江戸時代の「宮城県沖地震」に関する記事。仙台藩領の沿岸部で被害が大きかったとの情報が、江戸に伝わっていたことがわかる。

37 覚（商品運賃受取）

文久元年（一八六一）

覚

一蝋燭弐箇
　此駄五分
一紙荷物六箇
　此拾壱、駄弐分
一白砂唐（砂糖）弐拾三樽
　此駄七駄八分七り
　　七拾六分七り
一黒砂唐（砂糖）弐拾樽
　此駄、拾壱駄壱分五り五毛
一流玖（琉球）荷物　七箇
　此駄壱駄六分
〆荷数五拾八箇
　弐拾弐駄三分弐り五毛
一弐百八拾壱匁　運ちん
　弐分九り五毛
　但し九匁へ四わり増しニ而如此
一五拾三匁　寒風沢
　五分八り　かゝり〆高
一百六拾七匁　塩釜諸
　四分三り七毛　かゝり〆高
〆五百弐匁
　三分壱り弐毛
　直し
　改正三拾三両ト
　代七百八拾文
右之通慥ニ請取申上、以上、
　阿部屋勘七
十月十一日
小西久兵衛様
御店中様

（東北大学附属図書館・小西文書七―一―七一）

【解説】

開成丸で運ばれてきたとみられる荷物の運賃の請取証。荷物は黒白の砂糖とともに、蝋燭や紙、さらには内容不明だが琉球（沖縄県）からの荷物も見られる。

寒風沢からは塩竈を経て、馬で仙台城下町まで運ばれている。運賃を受け取った阿部屋勘七については不明。

38 覚（商品仕入につき） 文久元年（一八六一）カ

覚

一紙類七・八拾両高

右問屋名元所付之義者、飛脚便ヲ以可申上候、

一正生掛蝋燭

六匁拾箱

五目　同

四目　同

右者金壱歩ニ五百目前後ニ御座候ハヽ、御調被成下度候、

四百目前後ニ御座候ハヽ、御扣被成下度候、

一醤油八升入　拾樽

右ハ、壱升ニ付弐百五拾文位、口味御覧被成下味不宜候ハヽ、御見合被成下度候、

外ニ近江表三匁五分位之所、壱箇奉差上候、

右之通御座候、以上、

小西屋久兵衛

六月

（東北大学附属図書館・小西文書七―一―七三）

【解説】

小西久兵衛が紙、蝋燭、醤油の仕入について指示した記録。次掲の史料番号40と関連するとみられ、開成丸直行方役人ないしは江戸の商人に送ったものか。

39 覚（商品運賃受取）

文久元年（一八六一）カ

覚

壱駄ニ付弐匁四分
一五拾八匁　寒風沢より小廻諸かゝり
　壱歩四り
同七匁五分之割
一百八拾壱匁　塩釜より原町迄諸かゝり
　六十八り七毛
〆弐百三拾九匁
　八分弐り七毛

駄壱駄六分六り　醤油十樽
　塩釜より原町迄
　駄ちん引

駄弐分五り　ろうそく壱箇分
　同断也

〆壱駄九分壱り
　此銀十四匁三分四り五毛
引〆弐百弐拾五匁〇弐り

阿部勘方

一醤油壱樽代金　外に寒風沢より城下迄の諸かゝり
一蝋燭壱箇　寒風沢よりかゝり　原町迄
村田様方　外ニ白砂糖弐樽代
一白砂弐ツ　寒風沢より塩釜迄かゝり
一醤油■駄取賃　弐百文　古山へ直分
一いせ醤油之分　寒風沢より
　原町迄かゝり
一醤油十樽塩釜より原町迄
　かゝり村田方へ勘定也
一壱樽　古山様方
　駄ちん方

（東北大学附属図書館・小西文書七―一―七四）

【解説】

寒風沢から仙台城下町までの荷物運賃の書き上げ。寒風沢から塩竈までが小廻し船で、そこから原ノ町（宮城県仙台市）までは馬で駄送されている。「村田様」は村田善次郎、「古山様」は古山誠之丞で、いずれも開成丸の係役人。開成丸直行方が、砂糖に加えて他領産（伊勢・三重県）の醤油や蝋燭も取り扱ったことを示すか。

40

覚（砂糖代金の決済）

文久元年（一八六一）カ

覚

一金四拾両也

但し、小西屋久左衛門注文之黒砂糖弐拾樽、江戸ニ而御買上御元金如此、

一金弐両也

但し右御元金御利潤金五分之割ヲ以相納候分、如此、

一金拾両也

但し、小西屋久兵衛、文久元年十一月拝借残金無利足ニ而相納候分如此、

一金七拾三両三分也

銀三匁五分□厘

此金粉弐分三り六毛

但し、於浦賀、黒砂糖拾四樽并初雪白砂糖拾樽、取合弐拾四樽御買上、御払ニ相成候分、御元金如此、

一金八切八分五り七毛也

右御元金御利潤金、三分之割ヲ以相納候分如此、

一金弐拾九両壱分三朱也

銀壱匁七分五り

此金粉壱分壱り□毛也

但し於同所、黒砂糖五樽并初雪白砂糖大樽五樽、取合拾樽御買上、御元金御払ニ相成候分如此、

一金三切五分三り六毛也

右御元金御利潤金三分之割ヲ以相納候分如此、

元利七口

〆金百五拾八両三朱也

金粉七分四り六毛也

内

十月晦日納高

一金七拾五両也

指引

〆金八拾三両三朱也

金粉七分四り六毛也

右之通相納申候、以上、

文久二年

戌ノ十一月　小西屋久左衛門（印）

小西屋久兵衛（印）

御軍艦方
御役所

右受取候、以上、

同年　古山誠之丞（印）
同月　佐藤久馬（印）

（東北大学附属図書館・小西文書七―一―六五）

【解説】

文久二年（一八六二）一一月、小西久兵衛から軍艦方役所への商品代金決済の記録。小西屋が軍艦方の資金を元手に江戸と浦賀で砂糖を仕入れ、その代金の一部を納入（返済）している記録。軍艦方役所と開成丸直行方が同一の組織だとすれば、現時点で確認される、開成丸の活動を示す下限の年代の記録である。

七　開成丸関係者のその後

41　蒸気船へ乗込仰せ付け

慶応四年（一八六八）

慶応四年分

一二月十二日暁、古山誠之丞義、天文方御用ニ而測量方御用ニ而、蒸気船乗組被仰付、京都江被相登ニ付、此日寒風沢江出立致、同人方手伝役山田英四郎も一同乗組被仰付、一同此日出立、

蒸気船ニ而、御奉行大條孫三郎殿上京ニ付、測量方ニ而如此両人乗組被仰付候事、

（志村恒憲「永伝自分手控」東北大学附属図書館所蔵）

【解説】

開成丸は文久三年（一八六三）頃に座礁のため失われたと伝わるが、同時代の記録は確認出来ていない。

開成丸に関わった仙台藩天文方の志村恒憲の記録には、開成丸の乗組員の一人であった仙台藩士で、天文学者の古山誠之丞が、慶応四年（一八六八）二月一二日に測量方御用のため蒸気船への乗り組みを命じられた旨の記事がある。この蒸気船は、前年に仙台藩がアメリカから購入した蒸気船・宮城丸のことで、戊辰戦争の勃発後、仙台藩奉行・大條孫三郎の上京に際しての出航に、天文方役人が参加していることがわかる。

編集を終えて

佐藤大介

仙台藩が幕末に建造した洋式帆船・開成丸に関する記録と論考を、このようにまとめることが出来ました。

黒須潔さんとは、二〇〇三年度トヨタ財団の研究助成特定課題「近代化とくらしの再発見」に、お互いが参加していた研究グループが同時に採択され、山口県萩市での助成団体交流会にて面識を持ちました。黒須さんはその後も「仙台藩の天文史」として、研究成果をホームページで公開・発信されています。また、戦前から続く仙台郷土研究会の理事として、仙台藩・宮城県に関する郷土史の普及にも尽力されています。「ふなわたり日記」の全文翻刻は、二〇〇九年の夏、当時私が取り組んでいた研究テーマを調べるなかで、「ふと」ネット検索したところ、黒須さんがブログ記事として解読に奮闘されているのを見つけたことがきっかけでした。開成丸関係の史料のほとんどは、黒須潔さんによる長年の調査研究によって確認されたものです。今回、黒須さんのサイト内の史料情報を全面的に活用させていただくと共に、ご寄稿もいただきました。

井上拓巳さんとは、黒須さんの少し前、二〇〇二年一二月に千葉県佐倉市の国立歴史民

俗博物館で行われた「地域史フォーラム」の研究会が初めての出会いでした。幕府領の年貢米輸送をテーマに卒業論文を書く、という学部四年生だった井上さんは、その後も東回り航路の拠点となった、東北から関東沿岸にかけての地域をまたにかけて、精力的に研究を続けています。一一年前の地震と津波、原子力災害によって、研究対象としていた地域のほぼすべてが「被災地」となる中で、各地での史料レスキューや歴史再生にも積極的に取り組んでいます。井上さんも、黒須さんのブログで「ふなわたり日記」を知って、海運史の視点から関心を持っていたことで、今回のご寄稿とともに、「ふなわたり日記」など史料編の校訂もお願いしました。

私自身は前述のとおりで、史料の解読だけはしていましたが、二〇一一年三月一一日の地震と津波で被災した歴史資料の救出活動に追われる日々となりました。状況が変わったのは、それらの作業が一段落したからではなく、二〇二〇年初頭からの新型コロナウイルスの感染拡大でした。外出や多人数での用務が文字通り「蒸発」しました。月給をいただける立場の私には、時間の余裕が生まれました。また、これと前後するように、ウェブ上での史料公開が急速に進みました。その中で、一〇年以上前は複製に一苦労だった「ふなわたり日記」原本の画像も公開されたことを、黒須さんのサイトで知りました。誰かに先を越される前に、自分が翻刻していたものを世に出したい、と考えたのです。

それとともに、二〇一八年五月末に、寒風沢島を訪問した経験を、積極的な動機の一つとして挙げたいと思います。宮城県塩竈市では寒風沢島にのみ水田があり、老舗の酒蔵がそこの米で日本酒を造っているという事を知り、実際の様子を見てみたいと「ふと、思い

立って」のことでした。この時、島の造艦碑も確認しました。しかし、島の奥にある水田のほとんどは津波で被害を受け、巨大な防潮堤に囲まれた荒れ地となっていました。この時、たまたま島で出会った方から、「三・一一」から七年が過ぎ、復興支援の人々も姿を消して、だんだん島のことが忘れられていくように感じる、という話をうかがっていたのでした。

江戸時代の東回り海運における重要拠点の一つだった寒風沢島や、開成丸が航跡を残した、現在の岩手県南部から房総半島は、一一年前の大津波に襲われた地域でもあります。開成丸の記録を通じて、海と関わった人々の歴史を伝える記録を作っておきたい、という思いは持っていました。

以上のことを、二〇二一年の夏に共著者のお二人に率直にお伝えして、共同作業となったのでした。約二〇年前に面識を得たお二人とは、「そのような星の下にあった」という事なのかも知れません。

表紙は千葉真弓さんに依頼しました。「このような絵が夢に出てきた」と、私が描いた下手な素案を見せられながらのことに、さぞ当惑されたでしょう。しかし、昼と夜の開成丸の様子を見事にデザインしてくれました。書籍設計は蕃山房の只野俊裕さんです。この手の設計の達人として、読みやすい形に作っていただきました。

わずかな期間で失われた開成丸ですが、それを生み出した海に関わって暮らした人々の営み、造艦を通じて「新しい国造り」を目指した人々の歴史が、本書を通じて広く共有され、未来へと伝えられていくことを願っています。

編著者紹介

佐藤大介　東北大学災害科学国際研究所准教授

黒須　潔　仙台郷土研究会理事

井上拓巳　さいたま市教育委員会文化財保護課学芸員

仙台藩の洋式帆船　開成丸の航跡
幕末の海防構想と実践の記録

発行日　二〇二二年三月一一日

編　著　佐藤大介・黒須潔・井上拓巳

発　行　東北大学災害科学国際研究所　歴史文化遺産保全学分野
〒九八〇―八五七二　宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉四六八―一
電話　〇二二―七五二―二一四三
e-mail dsato@irides.tohoku.ac.jp

制　作　蕃山房
〒九八〇―三一一二六　宮城県仙台市青葉区落合一丁目四―一
電話　〇九〇―八二五〇―七八九九

表紙デザイン　千葉真弓

©Daisuke Sato, Kiyoshi Kurosu and Takumi Inoue 2022 Printed in Japan
ISBN 978-4-99118802-7-9　C0021

本書は科研費基盤研究（B）課題番号19 H01293、基盤研究（C）20K00978および歴史文化資料保全ネットワーク東北大学拠点における成果の一部として、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス　CC BY-NC-ND 4.0 国際で出版およびWeb公開する。

ISBN978-4-9911802-7-9 C0021

十九日。終日晴たり。追手もふかず、ことなし。ひとりごちによめる、

追手まつ　下田の磯に　よる浪の　千々にくだけて　ものおもふせ

夜半にめざめて、船板にのぼりて、空はれたれば、追手の風の吹かたに、雲やたちなんと見わたすに、南の海ぎはに大なる星のみゆる。よくみれば老人星にそある。ふる郷にてはみることのならねば、とくおりてをしへる、行孝をおこしてみせつ、長脩も出てみる。よろこびて珍らしがりつ。

IRIDeS
International Research Institute of Disaster Science
災害科学国際研究所